

三國間の條約は單に一八八二年五月の第一同盟條約を確保し、一八九二年五月まで効力を存続せしむべきを定めたるものなり。而して三國全權委員の調印せる手續書に於て、左記の各二國間に結ばれたる二條約が三國同盟條約と其趣意を對し、平和維持を目的とするものなることを言明せり。

オーストリア、イタリア間の條約の主要なる條款は左の如し。

(第一條) 兩締盟者は、出來得るだけ東方に於ける領土上の現状維持を欲するを以て、本條約の調印國の孰れかに有害なる領土上の變更を防止する爲め其勢力を使用するを約す。兩締盟者は自己の意向並に他國の意向に關し相互的に知識を與ふべき性質の總ての報知を互に相傳達すべきものとす。

然れども事件の發展に依りバルカン地方又はアドリア海及びエーゲ海に於けるトルコ領の沿岸及び島嶼の現状維持が不可能となり、而して第三國の行動の結果として又は然らずして、オーストリア、ハンガリア又はイタリアが自ら一時的又は永久的占領を行ひて現状を變更するを必要とするに至りたる場合には、二國中の一國が現状以上に收むべき領土上又は其他の利益に對する相互的代償の主義を基礎とし、兩國の根據ある利益及び主張に對し満足を與ふべき協約を豫め兩國間に結びたる後に於て、始めて上述の占領を行ひ得べきものとす。

ドイツ、イタリア間の條約の主要なる條款は左の如し。

(第一條) 兩締盟者は、出來得るだけ東方に於ける領土上の現状維持を欲するを以て、アドリア海及びエーゲ海に於けるトルコ領の沿岸及び島嶼に於て、本條約の調印國の孰れかに有害なる領土上の變更を防止する爲め其勢力を使用するを約す。兩締盟者は自己の意向並に他國の意向に關し相互的に知識を與ふべき性質の總ての報知を互に相傳達すべきものとす。

(第二條) 第一條の規定は如何なる方法に於ても、エジプト問題に適用なきものとす。

該問題に關しては、本條約及び一八八二年五月二十日の條約の基礎となれる主義に反せざる以上は、兩締盟者は相互的に行動の自由を留保するものとす。

(第三條) 若しフランスがトリポリ州又はモロッコ帝國の北アフリカ地方に於て其占領、保護又は主權を擴張することありて、此事實に因り、イタリアが地中海に於ける其地位を擁護する爲め、自ら北アフリカに於ける上述の地方に於て行動を試みざるを得ずと信じ、又はヨーロッパに於けるフランスの領土に於て非常手段を執らざるを得ずと信するに至る場合に於て、其結果として生ずるイタリア、フランス間の戰爭状態は、イタリアの要求に依り、兩同盟者の共同の負擔に於て、當然に一八八二年五月二十日の條約第二條及び第五條の豫見せる總ての結果を有する同盟の應援義務發生條件を成すものと看做すべく、上述の場合が前記條款中に明記せられたると同様なりと看做すべし。

(第四條) 若しフランスに對して共同的に行へる戰爭の結果として、イタリアが其王國の境界の安全及び其海國としての地位の爲め、並に平和の安定の爲めに、フランスに對して領土上の擔保を求むるに至るときは、ドイツは之に妨害を加へざるべく、必要あれば、事情の許す程度に於て、イタリアの上述の目的を達する手段を容易にするに努むべし。

オーストリア、イタリア間の條約及びドイツ、イタリア間の條約は、共に其内容に關して秘密を守るべきことが約されたり。而して共に一八八二年五月三十日まで有効に存続すべきものと定められたり。

第二回三國同盟條約締結の際、イタリアは、當時のヨーロッパの形勢を利用して、有利なる條件を收め、オーストリアをしてバルカン半島及び其附近の島嶼に關し對等の地位を認めしむるに至り、トルコのバルカン方面の所領の分割に與かることを確むるに至り、又アドリア海の對岸に於てイタリア領を拓くの希望に基礎を與ふるに至れり。而してドイツはトリポリ及びモロッコに關してイタリアが攻撃的戰爭を行ふ場合に於ても、其參戰の義務あるを認むるに至れり。



第二回三國同盟條約締結に先づ數日、二月十二日イタリヤとイギリスとの間に公文交換に依り第一回地中海協商が行はれ、出來得べき丈け地中海、アドリヤ海、エーゲ海及び黒海の沿岸に於ける現状維持を計るべく、此等の沿岸地方の一部が他の強國の權力の下に歸し、兩國の不利を醸すべき變更の生ずるに對して、共に警戒すべく、現状維持が不可能なる場合に於ても豫め二國間に協定を遂げたる後に非れば變更を生ぜしめざるべしとし、イタリヤはエジプトに於てイギリスの施設を援助すべく、イギリスは第三國の侵略の場合に於てアフリカ北岸の他の地點、特にトリポリ及びシレナイカに於けるイタリヤの行動を援助せんと欲すると爲し、兩國の第一と第三國との間の總の紛争に關して、事情の許す限り地中海に於ける相互的援助を約せり。但し兩國の協力の性質は、各場合に臨んで決定さるべきものとす。此協商はビスマルクの希望せる所にして、オーストリアも三月二十三日の公文を以て加盟の意を宣言せり。

一八八七年七月ブルガリヤの議會がコブルグのフェルデナンドを撰みてブルガリヤ公と爲すや、ロシヤは之をブルガリヤより追はんと欲せり。ビスマルクはブルガリヤに於ては我はロシヤ人なりと稱し、ドイツとブルガリヤとの外交關係を繼續せしめ、而してオーストリアに對して、オーストリア、ロシヤ間のブルガリヤに關する紛争を以てドイツ、オーストリア間の同盟の應援義務發生條件と認めざるを説けり。オーストリアはイギリス及びイタリヤと共にロシヤに反對するの態度を執れり。同年十二月十二日の公文の交換に依り、イギリスとオーストリア及びイタリヤとの間に於て、主として東方問題に關する所謂第二回地中海協商行はれ、八點に關する協商關係國の意見の一致を宣言せり。(一)平和維持及び侵略的政策の廢止、(二)條約に基ける東方の現状維持及び代償政策の廢止、(三)條約の設定せる地方自治の維持、(四)重要なるヨーロッパ的利益の看守の責を荷へる國として、トルコを總ての外國の優越的勢力より獨立せしむること、(五)從てトルコはブルガリヤに對する其宗主權を如何なる國にも讓渡又は委任し得ず、又外國の行政をブルガリヤに設定する爲めに干渉し得ず、又軍事占領若くは義勇兵派遣の形式を以

て外國の行政をブルガリヤに設定する爲めに行ふ所の強制的措置を許容するを得ず、又トルコは條約上海峽の看守者として、小アジアに於ける其主權の如何なる部分をも他國に讓渡するを得ず、又其權力を他國に委任するを得ざるべきこと、(六)三國は此等の主義を維持する爲めトルコと協力すべきこと、(七)トルコが(五)に擧げたる不法なる企圖に抵抗するときは、三國はトルコ帝國の獨立及び領土保全の尊重を致すべき手段につき直ちに協議すべきこと、(八)トルコが上述の如き不法なる企圖に與かり又は之を默許するときは、三國は連合的又は單獨的に、三國の必要と認むるトルコの領土の或る地點を一時占領すべきこと等是なり。

一八八七年五月四日イタリヤ、イスパニヤ間の公文の交換に依り、四年を有効期間とする協商行はれ、イスパニヤは、就中、北アフリカの土地に關して、イタリヤ、ドイツ、オーストリア又は其中の一國を直接又は間接に標的とする條約又は政治上の協定をフランスと結ぶこと無かるべしとし、總ての挑發されざる攻撃を加ふること無く又挑發を行ふこと無かるべしとし、地中海に於ける現状を維持する爲め、イタリヤ及びイスパニヤは自國又は他國の意向に關する總ての報知を交換すべきものとす。イタリヤもイスパニヤに對して同様の義務を負ふべきを認めたり。オーストリアも亦之に加盟するに至れり。

第一回及び第二回地中海協商に依りイギリスは三國同盟の國家結合系統に加はるに至り、オーストリアはコンスタンチノブル、ダルダネルス及びバルカン半島に對するロシヤの脅威に關し、イギリス艦隊の協力を確むるを得るに至れり。而してイタリヤも西部地中海に於けるフランスの侵略に對するイギリスの援助を期待するを得るに至れり。

當時三國同盟の系統に於て、三同盟國の外にイギリス、イスパニヤ、ルーマニヤ、セルビヤを網羅するに至り、而してロシヤに對してルーマニヤ、セルビヤを用ふるを得るが如く、フランスに對してイスパニヤを用ひ得べく、然のみならず、イギリスの援助に依頼するを得るに至れり。



ビスマルクは當時のヨーロッパ外交の舞臺の中心に立ち、ビスマルクの外交政策は、其の躬らドイツ帝フレデリックに告げたる所に依れば、平和を維持し、ドイツに反対する聯合の成立を防止するに在りて、此政策の樞軸はロシアなりとす。ビスマルクはオーストリアに遠かるの危険を冒してロシアのブルガリア政策を援助せり。ビスマルクは又ロシアの海峡の通航を認め、又はコンスタンチノブルを占領するに至ることも反対せざらんと欲せり。

一八八一年に締結され、一八八四年更新されたる三帝同盟條約は、一八八七年六月に至り有効期間盡きたるも、ロシア帝が之を更新するを欲せざるより、該期間の盡くるに先ち、六月十八日ドイツ、ロシア間に所謂再保險條約が締結されるに至れり。該條約の主要なる條款左の如し。

(第一) 若し締盟國中の一國が第三の強國と戦争を行ふときは他の締盟國は好意的中立を守り、紛争を阻害するに努むべし。此規定は、締盟國の一の攻撃より生ずるオーストリア又はフランスとの戦争に適用なきものとす。

(第二) ドイツはロシアのバルカン半島に於て歴史的に獲得せる權利を承認し、特にブルガリア及び東部ルーメリアに於ける其卓越的且つ決定的勢力の正當なるを承認す。二國政府は豫め協定する所無くしてバルカン半島の領土上の現状の変更するを認めざるべきを約し、二國政府の容認を経ずして現状を擾亂し、又は之を変更せんとする總ての企圖に反対すべきを約す。

(第三) 二國政府は海峡閉鎖の原則のヨーロッパ的にして且つ相互義務的の性質を有するを認む。二國政府はトルコが海峡の存する其國の部分を作戦行動の爲めに使用せしめて、或る政府の爲に該原則の例外を作ることなき爲めに、共同に警戒すべく、此種の違反の行はるる場合に於て、又は此種の違反の行はれんとするを防止する爲めに、二國はトルコが之に因り害を被むる國に對して戦争状態に立つものと認め、從て一八七八年の條約がトルコの領土上の現状維持に對して與ふる擔保の

失はれたるものと認むる旨をトルコに告ぐべきものとす。

該條約に附加せる秘密議定書に於て、ドイツはロシアがブルガリアに於て再び正規にして適法なる政府を建てんとするを援助し、パッテンベルヒ公の復位を容認せざるべきを約し、又ロシア帝がロシアの利益を防衛する爲めに黒海の入口を防護せざるを得ざるに至る場合には、ドイツは好意的中立の態度を執るべく、而してロシア帝國の關鍵を守護するに必要と認むる措置に對して精神上及び外交上の援助を與ふべきを約せり。

再保險條約の締結の際、一八七九年のドイツ、オーストリア間の同盟條約の條款は、ドイツが之をロシア政府に示したるも、再保險條約はロシア帝の希望に従ひ全然秘密のものとせられ、ドイツは之を其同盟國たるオーストリアに示さざりし所なり。

イタリアに於て一八八七年七月クリスビーが政局に當り、熱心に三國同盟の維持を計り、此頃より一八九〇年三月ビスマルクの辭職する頃に至るまで、三同盟國間の關係は大體に於て良好なる状態に在りたり。ビスマルク辭職後に於ても、三國の當局者は三國同盟維持の方針に變更無きを宣言せり。同年十一月クリスビーがビスマルクの後繼者たるカプリヴィーとミランに會合して後、三國同盟更新の談判開始され、イタリアは一八八二年の三國間の條約の規定と一八八七年に結べる二國間の二條約の規定とを一括し、之を修正して單一なる條約中に收むることを提議するに至れり。クリスビー内閣が其植民政策の失敗の爲に倒るるや、フランスに接近するの傾向あるルヂニエが内閣を組織し、フランスと談判を行へる形跡あるより、カプリヴィーは新なる紐帶に依りイタリアを中央ヨーロッパより離れざらしむることの必要なるを感ずるに至れり。當時ロシアとフランスとの接近が顯著となり、從來共和政體のフランスとの接近を欲せず、又フランスの政策の繼續性を疑へるロシア帝アレクサンデル三世も、ドイツ帝ウィリヤム二世が一八八七年の再保險條約の更新を拒み、ロシアが孤立の地位に立つに至れるを見、且つ三國同盟とイギリスとの接近につき危慮の念を抱けるより、フランスと提携するを欲するに至れり。カプリヴィーはロシ



ヤ、フランスの接近の形勢の顯著なるを見て、カルノキーの新たな同盟義務をオーストリアに負はしむるを欲せざるに拘はらず、イタリアの要求を考慮せざるべからずと爲せり。

一八九一年五月六日ベルリンに於て調印されたる第三回三國同盟條約は、其以前の三條約の規定を一括して一條約中に收めたるも、條約の規定の實質はオーストリアに關しては殆ど全く一八八七年の條約と等しく、ドイツに關しても重大なる變更は行はれずして止めり。批准交換の時より起算して六年間有効となし、若し孰れかの締結者も有効期間盡くる前一年の頃に廢棄を行ふこと無ければ、更に六年間有効たるべきものと爲せり。而して條約締結の日に結べる議定書を以て、經濟上の事項に關する約束を爲せる以外に於て、イギリスをして、從來の如く東方に於けるトルコの土地に關する援助を同盟國に與ふるを約するに止まらずして、中部及び西部地中海に接する北アフリカの土地に關する援助を爲すことをも約せしめ、イタリアのフランスに對する戰爭に關して援助を爲すを約せしむるに努力すべきことを、三國の間に約束せり。一九一二年の第五回三國同盟條約に附屬せる議定書中に於て同様の約束の結ばれたるを見る時は、イギリスをして議定書に掲ぐる如き約束を爲さしむるを得ずして終れるもの如し。

イギリスは行動の自由を保有せんと欲し、所謂光輝ある孤立の地位を守れるも、大陸諸國をして互に相牽制せしめ、其間に勢力の均衡を維持し、以てヨーロッパに於ける平和を確保せしめ、且つ大陸諸國の勢力を海外に延ずを得ざらしめんと欲す。イギリスはロシア及びフランスと其植民地及び占領地に關して利害の衝突を有し、特に當時東方に於てロシアに對抗するの政策を執れると同時に、西部地中海に於てフランスの海軍に對抗せざるべからざりしを以て、イタリアをしてドイツ及びオーストリアとの同盟を脱せずして、地中海に於てフランスに對抗せしめんと欲せり。イギリスは第一回及び第二回の地中海協約に依り三國同盟の系統に加はるに至れること已に述べたる所の如し。

三國同盟は大體に於て防禦的同盟の性質を有し、又秘密的同盟の性質を與へられたり。所謂三國同盟條約の外に、別にドイツ、オーストリア間の秘密同盟條約を存せり。一八八八年二月に至り、ドイツの軍備擴張案を議する際、ドイツ、オーストリア同盟の條文及び三國同盟成立の事實が世に公表せられたり。

## 第二十四章 ロシヤ、フランス同盟

三國同盟の成立に依りロシヤはドイツ、オーストリアの同盟の對抗を受け、フランスはドイツ、イタリアの同盟の對抗を受けるを以て、他より孤立し且つ其間に領土上又は其他の關係に於ける利害の衝突を存せざるロシヤ、フランス兩國が相接近せんとするは自然の勢なりと言ふべし。而して、フランス人は最も孤立に苦めるを以て、ロシヤとの同盟を希望すること最も切なり。

然れどもロシヤ、フランス同盟の成立に對して種々の障礙を存せり。ロシヤの皇室とドイツの皇室との間に重縁の誼ありて、ロシヤの宮廷内に於て、傳來のプロシヤ接近の政策を遽に抛つを不可とし、革命の淵藪を以て目せらるる共和政體のフランスに接近することを以て、ロシヤの國體を危うする所以と爲す者あり。特にアレクサンドル三世は虛無黨の陰謀を恐れ、フランスに近くことに躊躇せり、フランスに於て專制政體のロシヤと結ぶことを以て共和政體の主義に反すると爲すの議論あるのみならず、ロシヤとの同盟談判は成效の見込少なく、却て是が爲めにドイツの威脅を招く虞あるに過ぎずと爲す者あるを以て、ロシヤとの談判の開始を避けんとするの傾向あり。且つ一旦事變起り、ロシヤ、フランス間の同盟條約に基きフランスが兵を動かすの結果は、會、フランス國內の君權黨の勢力を強め、共和政治の運命を短縮せしむるを懼るる者あり。又ロシヤ帝はフ



ランスの爲にロシアの利害に關係なき復讐戦争に参加するを強ひらるるに至らんことを懼れ、フランス人はロシアの外交上の信義に信頼するの念強からずして、同盟を結ぶも戦争起りて後、ロシアの棄つる所とならんことを恐れたり。特にフランスに於て政府の更迭頻繁に行はれ、外交政策の終始一貫を缺けるのみならず、同盟を得るの基礎として必要な兵力が整備せざるを以て、ロシアをしてフランスの同盟を求むるに躊躇せしめたり。

然のみならずビスマルクは其縦横の畫策を以て百方ロシア、フランス同盟の成立を妨礙し、或は秩序破壊を企つる者に對する苛嚴なる處置に依り、ロシア帝をして信頼の念を起さしめ、依てロシアのフランスに近くを妨げ、或は列國の注意を植民地問題に注がしめて、フランスをしてチュニス及びトンキンに依りアルサス、ロレーヌ問題を忘れしむると同時に、又エジプト、トンキン及びチュニスに依りフランスをしてイギリス及びイタリアと衝突せしめ、フランス人のドイツに對する敵愾心を他に轉ぜしめんとし、又ロシアをして、フランスに近くことの徒に多數の敵を作るに過ぎざるを思はしめんとせり。ビスマルクはフランスのチュニスに於ける計畫の實行を助け、一八八〇年のモロッコ會議に於てドイツ代表者をしてフランスの代表者と行動を共にせしめたり。一八八三年以後ドイツ人の間に植民思想の旺盛なるに及びても、ビスマルクは猶植民地問題に依り積極的にフランスに近くことを求め、フランスと協同してコンゴ河下流に關する一八八四年二月のイギリス、ポルチュガル間の條約に抗議して之を取消さしめ、フランス、ドイツ兩國の首唱に依り一八八四年十一月より一八八五年二月に互る所謂アフリカ會議をベルリンに開かしめ、コンゴ河流域の通商の自由、コンゴ河及びナイジャー河の自由航行及び土地先占の新原則等を定めたり。又一八八五年十二月西アフリカに於けるドイツ、フランスの植民地の境界を劃定せり。ビスマルクは常にフランスを他國より離隔するの消極的手段を以て足れりとせずして、植民地問題に依り積極的にフランスと協商せるが、又ロシアとの接近を計るを忘れざるなり。ビスマルクは一八八一年六月三帝同盟を復活せしめ、一八八四年之が更新を圖れり。一八八

七年ロシアがオーストリアと緊密なる條約關係を維持するを欲せずして、三帝同盟條約の重疊を厭せざるより、ドイツ、ロシア兩國間に所謂再保險條約の締結を見るに至れり。

ロシア、フランス間の同盟は種々の障礙ありたるに拘はらず、漸く實現の緒に着かんとす。一八八六年の頃より、ロシアに於てはカトコフ、フランスに於てはデルレド、ブーランジュ等が盛にロシア、フランス同盟を唱へたり。一八八六年九月ロシア帝がフランスに對して間接の方法を以て同盟締結を提議せる際、フレシネ内閣が談判を拒絶せることありたるも、一八八七年一月ブルガリヤ事件に際して、諸國を巡りてロシアの暴行を訴へんとするブルガリヤの遊説委員に對して、フランスの外務大臣フルランスは、ブルガリヤの第一の義務が先づロシア帝の了解を求むるにあるを説けり。一八八六年の終、陸軍大臣たるブーランジュが東境に於て兵士を増員する爲めに新に兵營を建つるを命じたるに對し、ドイツが七萬五千の豫備兵を召集せるや、フランス政府は、ドイツがフランス政府に對して軍隊及び兵營に關する説明を求むることあらば、ロシアが如何なる態度を執るべきやをロシアに問ひ、ロシアはベルリンに於けるロシア大使シューヴァロフをしてドイツ政府に警告せしめて、事無きを得たることあり。一八八七年二月六日ベトログラード駐割のドイツ大使がロシア帝に對して、フランス、ドイツ間の戦争に際してロシアが中立の態度を維持すべきや否やを問ひ、若し中立の態度を維持せば近東に於てロシア帝の欲する所を行ひ得べきを説けるに對して、ロシア帝は、過去の戦争に於て其利益を棄てて中立の態度を守りしも、今日に於てはロシアは一層自己の利益を考量せざるを得ずとし、オーストリア帝の同盟國たるプロシヤを常に助くることを得ずとし、フランスの滅亡はヨーロッパの勢力均衡を全然變更すべきを以て、中立を約するを得ずと爲せり。同年四月ドイツの爲に間諜教唆者として境上に於て逮捕せられたるフランスの警察吏シュネーベレに關する事件の際、ビスマルクが強硬の態度を執れるに當り、ロシア帝がドイツ帝に書翰を送り、ドイツ帝がシュネーベレの解放を命じたることあり。ロシア、フランスは又エジプトに關す



るイギリス、トルコ間のドラモンド、ウォルフ條約に對して、共に抗議を爲せり。

一八八八年二月ビスマルクが軍備擴張案を通過せしむる爲め、ドイツ、オーストリア間の同盟の條文及び三國同盟成立の事實を發表して、實際の演説中に於て、ロシアの新聞紙及びロシアの輿論が、有力にして信頼すべき舊友たるドイツ人に戸を指示して退去を促せるを以て、ドイツ人は強て交を求むること無かるべしと説きて、ロシア、ドイツ間の乖離の形勢を公言せり。一八八八年ロシアとの親交を重要視せるウィリヤム一世崩殂し、其子フレデリック三世も幾も無く崩殂し、ウィリヤム二世がドイツ帝となるや、即位の際、先づ軍隊に對して、朕が一身は墳墓の彼方より祖先の英靈が譴視する所にして、朕は軍隊の光榮及び榮譽を祖先に奉告するの日あるべしと説ける等の事ありしより、ロシア及びフランスに於て、ドイツ新帝を以て事を好むの君主となし、之に對して警戒を加へんとするの傾向あり。ロシアは一八八七年より一八九一年に至るの間フランスに於て屢公債を募るを得て、財政上の利益に關しても、フランスと緊密なる關係を結ぶに至れり。一八九〇年三月ロシア帝の秩序維持の利益の上より深く信頼せるビスマルクが首相の職を去れることは、更にロシア、フランス同盟成立を妨礙するの有力なる一事由を除けり。又ドイツ帝ウィリヤム二世が一八八七年締結せる所謂再保險條約の更新を拒みたるより、ロシアはドイツとの緊密關係を失ひ孤立するに至れり。ドイツ帝は再保險條約の維持がオーストリアに對して信義を缺くものと爲し、又彼の如き複雑なる關係を致すべき條約を存せざるも、ロシアをしてフランスと結ばしめざるを得べしと爲せるなり。當時ドイツとイギリスとが相接近せるの形勢あるより、東西の孤立國たるロシア及びフランスが互に相接近するの勢は益促進せられたり。一八九〇年五月フランスはロシアの要求に應じて、ロシアに赴かんとする虛無黨員を逮捕し、ロシア帝は益フランスの依頼し得べきを認むるに至れり。

一八九〇年フランスの參謀總長ポアツツフル將軍がナルヴァの大演習の陪觀の爲めにロシアに赴き、ロシア、フランス兩國

の參謀本部の間に接近を生じたり。一八九一年一月に至り、フランスの提議に基き、ロシアよりフランス艦隊がスカンディナヴィヤ諸國首都訪問の際を以て同年七月クロンスタットを訪問すべきの招待を爲せり。同年二月ドイツ帝の母后がパリ觀光の際民衆の侮辱を被むれりとして、ドイツ帝が動員準備の命令を發せることあり。此事件の後ロシアの外務大臣ジェルスはロシア、フランス間の協商が平和の最良の擔保にして、三國同盟に對してヨーロッパに於て勢力均衡を維持する爲め必要なるをパリ駐劄のロシア大使モーレンハイムに告げ、モーレンハイムは之をフランスの外務大臣リボーに示し、フランス外務大臣はフランス政府が兩國間の協商を以てヨーロッパの安全の爲に缺くべからざるものと認むることを述べたり。

一八九一年五月の第三回三國同盟條約が締結され、且つイギリスが三國同盟に接近せること明白となれるより、ロシア帝もフランスに接近するの必要を感じるに至れり。七月二十三日フランス艦隊がクロンスタットに入るや、ロシアの官民の非常なる歓迎を受けた。フランス艦隊の入港の前日、ロシアの外務大臣ジェルスは、三國同盟の更新とイギリスの間接の加入とに依り生じたる新事態の爲めロシア、フランス兩國が更に其間の協商の歩を進むるの必要なきをロシア駐劄のフランス大使に問ふに至り、七月二十四日フランス政府は其大使に訓令して、第一にヨーロッパの平和の維持を危うすべき總ての問題につき兩國政府が協議すべきを約し、第二に三國同盟内の一國の行動に基きて平和が實際上危殆に瀕する場合には、ロシア、フランス兩國は直ちに奇襲を被らざる爲めに必要なる手段を執り、三國同盟内の一國が其兵力の動員を行ふときは、ロシア、フランス兩國は豫め協議を爲すを待たずして、直ちに且つ同時に其兵力の動員を行ふべきを約し、同時の動員の條件は、兩國參謀本部の間に於て之を協定すべきことと定めしめんと欲せり。ロシアの外務大臣はフランスの提案に於ける第一の約束が、特にヨーロッパに於ける平和の維持に限局されたることを以て狭きに失すと爲し、又第二の約束が三國同盟内の一國の行動に基きて平和の危殆に瀕する場合のみに關することを以て狭きに失すと爲し、協定に一層一般的なる性質を與ふべきを説けり。是れロ



シヤがドイツ、オーストリアに對する場合のみならず、イギリスに對する場合に於てもフランスの援助を得ることを求むるものなり。一八九一年八月二十七日フランスの外務大臣リポーとパリ駐割のロシア大使モーレンハイムとの間の公文交換に依り成れるロシア、フランス間の協定の要旨は左の如し。

(第一) 兩政府を結合する懇誠協商を確定保維せんと欲し、且つ協同一致を以て兩政府の最も熱心に希望する平和の維持に貢獻せんと欲し、兩政府は一般平和を危うすべき性質の總ての問題につき協議すべきを宣言す。

(第二) 上述の平和が實際上危殆に瀕する場合、特に二國の一方が攻撃の威脅を受くる場合には、戦争又は攻撃の實現が兩國政府をして即時且つ同時に執らざるを得ざらしむるに至るべき處置につき豫め協定すべきを約す。

一八九一年八月の協定は兩國の協同的行動を執るべきを定むと雖も、其條件につきて明定する所無し。フランス政府は夙にロシアと軍事協約を結ぶことを必要なりとし、十二月に於けるジェルストとベトログラード駐割のフランス大使モンテペローとの間の會談に依り、軍事協約を締結すべきこと原則上決定され、一八九二年二月フランスよりミリベル將軍の起草し首相フレシネの校閱せる協約原案をロシア政府に提出せり。三國同盟の兵力に依り締盟國の一方又は双方が攻撃を受くる場合に關して協定するの意を明らかにし、締盟兩國は完全なる相互主義を執り、一方が攻撃を受ければ他方は其左右し得べき總ての行動手段を以て應援すべきものとし、三國同盟又はドイツの兵力の動員あれば數時間内にロシア、フランス兩國が同時に動員を行ふべしとし、一方に於てはロシア、フランス、他方に於ては三國同盟の兵力を比較し、フランス參謀本部は主要なる敵の剿絶を要旨とし、ドイツに對する戰闘の爲めに總てを犠牲にすべしと爲し、フランスはイタリヤに對して其兵力の六分の一を用ふべきも、六分の五はドイツに向はしむべしとし、ロシアも亦オーストリアに對して其兵力の半を用ひ、他の一半はドイツに對して之を用ひざるべからずと爲す。ロシア帝は迅速に軍事協約を結ぶの意思を有せず。是れフランスが軍事協約を結ぶを得ば、

ドイツに對する復讐戦争を起し、ロシアが其渦中に投ぜざるを得ざるべきを恐れ、又ドイツが協約の結ばれたるを知らば斷乎たる態度に出づべきを懼れたるに出づるもの如し。リポーがモンテペローに與へたる六月二十三日の書簡中に於て、新に結ぶべき規約が主として政治的の行爲なるを説き、若し國家の元首に依り親しく署名するに非ざれば、少くともロシア帝及びフランス大統領の名に於て、兩國外務大臣に依り署名するを要すと爲せり。然るにモンテペローは應援義務を定めたる同盟條約がリポー、モーレンハイムの公文交換に依り已に結ばれたりと認むべしと爲し、新に結ぶべき協約は之を新條約と爲さずして、已に約束せる所に對して必要な補足を爲すに過ぎずとすることロシア帝の意思に合すと爲し、新條約はフランスより派遣する參謀總長ポアツフル將軍がロシアの參謀本部と議して定むべき軍事協約と爲すべしとす。リポーは更に新協約が軍事的と言はんよりは寧ろ政治的のものなるを説き、陸軍大臣の外に外務大臣の署名すべきものなるを主張すべきを命ぜり。ポアツフル將軍は同年ロシアの大演習の陪觀に託してベトログラードに赴き、協約に關してロシアの陸軍大臣及び參謀總長と談判を交へたり。正式の談判の行はるるに及び、ロシアの全權委員オブルチェフ將軍は、協約を以てリポー、モーレンハイム公文交換と關係あるものと爲すことに反對せり。一八九二年八月十七日兩國の參謀總長たるオブルチェフ將軍及びポアツフル將軍が協約案に署名するに至れり。軍事協約案の要點は左の如し。

フランス及びロシアは、等しく平和維持を希望し、而して其一方又は他方に對する三國同盟の兵力の攻撃に依り起るべき防禦的戦争の必要に備ふることを唯一の目的として、左の規定を協定す。

(第一條) フランスがドイツに依り、又はドイツの援助するイタリヤに依り攻撃するときは、ロシアはドイツを攻撃する爲めに其左右し得べき總ての兵力を使用すべし。ロシアがドイツに依り、又はドイツの援助するオーストリアに依り攻撃するときは、フランスはドイツと戦ふ爲めに其左右し得べき總ての兵力を使用すべし。



(第二條) 三國同盟の兵力又は之に加はれる一國の兵力が動員さるる場合に於ては、フランス及びロシアは、此事實の最初の通知を受くるや否や、豫め協商するを待たずして、直ちに且つ同時に其兵力の全部を動員すべく、出來得べき丈け其境界に近く之を送り出すべし。

(第三條) ドイツに對して使用すべき兵力は、フランスに於ては百三十萬人、ロシアに於ては七十萬人乃至八十萬人と爲す。此等の兵力はドイツをして東西に敵を受けて戦ふに至らしむる爲めに、極めて迅速に全力を盡して作戰に従事すべきものとす。

(第四條) 兩國陸軍參謀本部は、上掲の措置の執行を準備し且之を容易ならしむる爲め、常に協議を爲すべきものとす。兩國陸軍參謀本部は、平時よりして其知り得たる三國同盟に關する情報を互に相通告すべきものとす。戰時に於ける交通の道途及び方法は豫め研究豫定すべきものとす。

協約は三國同盟の存続中効力を有すべきものとし、而して嚴に之を秘密に付すべきものとす。

協約案は兩國の參謀總長の署名を経たるも、其中に政治的性質を有する條款を存するの故を以て、確定的のものとなるには外務大臣の署名を要すべきこと認められたり。ロシア帝は大體に於て協約案を承認することを説けるも、ロシア政府は協約案に對して確定的の効力を與ふるに熱心ならざるの態度を示せり。フランスより大統領カルノーの修正意見が提出せられたるより、益協約案の確定的のものとなることが遅延するに至れり。一八九二年の末より翌年に互るバナル運河に關する醜聞事件に於て、ロシア大使が該事件に關係あるの噂がフランスの新聞紙に掲げられ、且該事件の爲めフレシネ内閣の倒れたることありて、協約案の確定は益遅れたり。

一八九三年ドイツに於て陸軍擴張案が通過するや、ロシア、フランス間の軍事協約案中の一條款(第四條)に基くとして、

フランス參謀本部より該陸軍擴張案のドイツの兵力の増加に及ぼす影響の大なることをロシアに告げたり。同年九月に於てロシア軍艦がツーロンを訪問し、フランス人の非常なる歓迎を受けたり。ロシアの外務大臣ジェルスは十二月二十七日附の書翰を以て、フランス大使に對して、已にロシア帝の大體に於て承認し、兩國參謀總長が署名せる軍事協約案を、現在の形態に於て確定的に採用されたるものと考へらるべき旨を説くに至れり。是に於てロシアより進で協約を確定的に認むることとなり、之に對してフランス大使が一八九四年一月四日附の返翰を送り、此公文交換に依り所謂軍事協約案が確定的の協約となるに至れり。一八九四年ロシア帝アレクサンドル三世崩殂し、ニコラス二世立ち、一時ドイツに接近するの形跡ありしも、フランスとの同盟は依然として存し、一八九五年一月に於て、フランスの首相リボは、平和及びヨーロッパの勢力均衡の爲にフランスが其利益を他の國民の利益と結合するに至れるを説き、國內の一般の意見に依り是認されたる此同盟は、フランスの威嚴及び其勢力を組成すと爲せり。一八九六年十月ニコラス帝は皇后と共にフランスを訪問し、一八九七年八月フランス大統領フェリックス・フォールがロシアを訪問せり。フォールのロシア訪問の際、フランス軍艦に於てロシア帝とフランス大統領との間に交換されたる挨拶の中に於て、互に友邦同盟の語を用ひたり。

一八九九年ムラヴィエフがロシアの外務大臣たりし際、フランスの外務大臣デルカッセがロシアに赴き、同盟に關して談判し、其結果として、デルカッセの歸國後幾も無く、八月九日附のムラヴィエフ、デルカッセ間の公文交換に依り、一八九一年の外交上の協定を完成すべきものとして、一八九三年十二月及び一八九四年一月に於てジェルスとモンテペローとの間に結ばれたる軍事協約は、上述の外交上の協定が存続する間は其効力を存続すべきものと爲せり。是れ前には三國同盟の存続を以て軍事協約の條件と爲せるも、例へばオーストリア老帝の崩殂の如き事實に依り三國同盟が解散する場合に於ては、軍事協約は之を存続せしむること必要なりと爲せるが爲めなり。而して協約の内容のみならず其存在に關しても双方が絶対の秘密を守る



べきものと爲せり。其後一九一二年に至り、ロシアの提議に依り海軍協約の談判行はれ、兩國の海軍大臣及び海軍軍令部長の署名せる協約成り、同盟に於て陸軍の協同動作を約定する總ての場合につき、兩國海軍力も相協力すべきこと等を定めたり。

ロシア、フランス間の同盟は三國同盟に對する防禦同盟にして、平和維持及びヨーロッパの勢力均衡を主眼と爲す。該同盟はフランスに於ける一部の人士の希望せる如く、直ちにアルサス、ロレーヌ回復の爲めの復讐戦争に之を利用するを得ざりしも、ロシア及びフランスの孤立の地位を救ひ、兩國の外交上の威信を加へ、フランス人をしてドイツに對する危惧の念を除くを得せしめ、又ロシアをして極東に於て經營を行ふの資源を得せしめたり。

ロシア、フランス同盟の成立に依りビスマルクの所謂國家聯合の悪夢が實現し、ドイツのヨーロッパに於ける霸制の地位の動くを懼れしむるに至れり。ドイツは當初ロシア、フランスの接近に對して警戒を加へ、一八九二年十一月平時兵員を増員して四十七萬九千人（外に下士七萬七千人）と爲すの提案を爲し、議會の反對に遭へるも、之を解散し、新議會に於て案を通過せしめたり。然れども正面より同盟を敵視することを爲さずして、却てヨーロッパ以外の事項にロシア、フランスの鋭鋒を轉ぜしめ、自己も時に之と協同的の運動を爲し、同盟のドイツに對する壓力を減せんと計れり。明治二十七、八年の職役に依り我國が清國に勝ち、所謂下の關係に依り、遼東半島の割讓を約せしめ、ロシアが極東の勢力均衡を害さるとして、フランスと共に我國に勸告し、遼東半島を清國に還付せしめんと計るや、ドイツはロシア、フランスと協同して我國に臨めり。ドイツはロシアをしてドイツの支那に於て給炭地を得ることを認めしめ、一八九七年十一月二人のドイツの宣教師の山東に於て殺害さるるや、十一月十四日四隻のドイツの巡洋艦は膠州灣に入港し、土地を占領し、終に支那をして、九十九年を期限とする租借と内地の鐵道敷設とを認めしめたり。而してドイツ帝との秘密の約束に基き、ロシア帝は支那をして旅順口及大連の二十五年の租借と滿洲に於ける鐵道敷設とを認めしめたり。イギリスは兵力を以て争ふの意無く、直隸灣の勢力均衡を恢復する爲

めと稱して、我國の許諾を得て、我國の當時據保占領を行へる威海衛の租借を行へり。

ロシア、フランス同盟は元來ヨーロッパの現状維持を主眼とし、三國同盟に對するものなるも、一九〇二年一月三十日日英同盟協約成るや、ロシア、フランスは同年三月中旬協同して宣言を發し、日英協約は極東に於てロシア、フランス兩國政府の政策の基礎と爲す所の、東洋の現状及び平和を維持し、清韓兩國の獨立を維持し、及び此等兩國に對する門戶開放の主義の實行を期することを目的とするものに外ならずと雖も、ロシア、フランス兩國政府は、極東に於ける事變の爲め自己の特別利益を保護する必要があるときは、相當の手段を考量することを留保すと爲せり。此等宣言はロシア、フランス同盟を極東に擴張する趣意を有するに非ず。

## 第二十五章 イギリスとロシアとの關係

イギリスは世界の種々の地點に互りてロシア及びフランスと利害の衝突を有し、ロシアとはトルコ及び黒海方面、中央アジア、ベルシヤ及びインド方面、並に極東方面に於て利害の衝突を有し、フランスとは諸植民地、殊にアフリカ大陸に於けるニジプト、スーダンに於て利害の衝突を有し、是が爲めにイギリスは三國同盟に近き、一八八九年に於ける海軍擴張案に所謂二國標準は、フランス及びロシアの二國を以て假想敵と看做せるものなり。

イギリスとロシアとは早くより東方問題につきて利害の衝突を有し、イギリスはバーマーストン以來トルコを援助するの政策を執り、クリミア戦争に於て相戦ひ、又ベルリン會議に於ても相争へるが、一八八五年のブルガリヤと東ルーマリヤとの合併事件に於て、ロシアがアレクサンドル公の下に合併の行はるるに反對するや、イギリスは却て合併の援助を與へたり。其後



アレクサンドル公がロシア人の與れる陰謀の結果として一旦強制を以て國外に追はれ、歸國後ロシア帝の爲に辭任を強ひらるるに至れることは、イギリス人の憤慨する所となれり。

イギリスとロシアとは中央アジア問題につきても反目の原因を存せり。ロシアはベルリン會議以後トルコ方面に於て其の進出を妨げらるるに至れるより、中央アジアの方面に經略を試みんとせり。是より先き一八七五年に於てアフガニスタン王がカブルにロシアの使節を迎へ、又ロシアがコーカンドを併合せるより、イギリスも此方面に於て警戒を加へ、一八七六年ベルチスタンを其勢力範圍に加へたるが、アフガニスタン王はイギリス兵が境界地方の要衝を占領するを許さざらんとせり。ロシア、トルコ間の戦役の際、一八七八年の春イギリスがインド兵をマルタに召致し、艦隊をコンスタンチノブルの近傍に進むるや、ロシアはアフガニスタンの境界方面に軍隊を動かさし、ベルリン會議の開會日たる六月十三日に於てカブルに向けてストリエトフ將軍を派遣せり。カブルに使節を派遣することは、スコベレフがロシア、トルコ戦役中計畫せるインド侵入計畫の一部を成せり。ロシアはベルリン會議に於ける談判上の地歩を強むる爲め、已に四月二十五日示威の爲め軍隊を中央アジア方面に於て動かすの命令を下せり。其主力は上述の六月十三日を以てタシケンドを出發せしが、其アフガン境上に達せる頃ベルリン條約締結の報道至れり。ストリエトフ將軍は八月二十四日カブルを去れる勢、アフガニスタン王と條約を結びて約定せる所ありたるもの如し。イギリス政府はロシアの使節接受に對して、イギリスの使節をも接受すべきをアフガニスタン王に求めたり。王が返答を與へざるより、九月八日チェンバトレン將軍が使節として、護衛を率ゐてカイバー山路に依りカブルに進まんとす。然るにアフガン兵に依り進路を妨げられて引き返せり。インド總督府は十月三十日カイバー山路に於ける使節に對する侮辱に關し書面上の辯解を爲し、且つイギリスの常駐使節を接受することを要求する最後通牒をアフガニスタンに對して發するに決せり。然るに最後通牒に對する返答を得ざるより、イギリス軍がアフガニスタンに侵入し、シリア、アリ王は其

豫期せるロシアの援助を受くるを得ずして、イギリス軍に敵する能はず。王はロシア領に逃れり一八七九年五月二十六日に至りシリア、アリの子ヤクブがガンダマックの條約を結び、外交につきてイギリスの指揮を受くるを認め、カブルにイギリスの常駐駐在官を置くを認め、イギリスはロシアの侵襲に對して應援を爲すを約せり。又カイバー山路はイギリス人の監視の下に置くこととなれり。然るにイギリスの使節がカブルに到着して後六週間に於て虐殺に遭へり。ヤクブは位を退き、ロバーツ將軍が一時カブルに於て權力を行ひ、翌年シリア、アリの甥なるアブデュルラーマンが王位に上れり。

一八七九年の夏ロシアのテッケ、トルコマンに對する遠征の準備につきイギリス政府が説明を求むるに至りしが、ロシア帝はヴィクトリヤ女王に對して、メルヴを攻撃すること無かるべきを説けり。一八七九年の末スコベレフの率ゐる遠征隊が派遣され、一八八一年一月トルコマンの要塞たるゲオク、テベを陥る。此際ロシアの外務省は更にロシア兵がメルヴに進むこと無かるべきを説けり。然るに一八八四年二月ロシアは遂にメルヴを占領するに至れり。是に於てヘラットはロシア兵の容易に達し得べき所となれり。イギリスは混成委員會を設けて、ロシアの超ゆべからざる境界線を一定すべきを提議し、ロシアは陽に之を承諾せるも、種々の故障を設けて、其間に占領の範圍を擴め、一八八五年三月ロシア兵はベンジエを占領するの態度を示し、一方に於てアフガン兵及びイギリス兵、他方に於てロシア兵が相對峙するに至り、三月四日ヴィクトリヤ女王はロシア帝に電報を送り、ロシア兵とアフガン兵との衝突を防ぐの策を講ずべきを求む。ロシア政府は、境界の劃定を爲す前に、單純に地理上より之を定むべきや、又は人種關係をも參考すべきやの原則を決する爲め、ロンドンに使節を送りて協議を行はしむべきを説けり。イギリスはロシアが談判を長引かしめ、其間に占領の歩を進むべきを懼れ、又アフガン人がロシア兵に襲はれて之に抵抗し、是が爲めに戦争の生ずべきを懼れたり。三月三十日アフガン人がロシア人に依り其占むる地位より退去すべきの要求を受けて聽かざるより、コマロフ將軍の攻撃を受け、ロシア兵がベンジエの沃地を占領せり。四月二十七日グラッド



ストーンは議會に於てロシア人が挑發を受けずして攻撃的行爲を行へりとし、千百萬磅の軍費の支出を要求せり。イギリス、ロシア兩國の間に危機迫せるの觀ありしも、兩國政府は共に戦争開始を欲せず、又アフガニスタン王も戦争を欲せずして、ロシアとの間の争地を譲渡するの意思を表示し、イギリス政府は仲裁を提議せるも、ロシア帝はコマロフ將軍の正當なる行爲を仲裁裁判に附するを諾する能はずと稱せるが、終に眞に仲裁裁判を遂行せざることを條件として、表面上デンマルク王の仲裁裁判に附するとし、事件を落着せしむるを得たり。仲裁裁判は終に行はれざりしが、イギリス、ロシア兩國の間に於てベンジェがロシアに屬することを認めらるるに至れり。而して混成委員會に依り境界を定め、委員會は一八八七年に其業を終へたり。

其後イギリスはトルコ問題につきてロシアと意見を異にするに至れり。イギリスに於てデイズレリはトルコ問題につきてロシアの進勢を止むることに専ら着眼せるも、ソールズベリは耶蘇教徒の狀態の改善を計ることを以て必要と爲し、ベルリン會議の終了後幾も無く一八七八年八月八日アジャ、トルコの改革案をトルコに提出せり。十月に至りトルコは改革の實行をイギリスに約し、イギリスは軍人の領事をアジャ、トルコの各地に送りて改革を助けしめ、終に小アジャ改革總監としてペーカー將軍の任命を見るに至れるも、改革は實際に於て行はれず。グラッドストーンが一八八〇年五月内閣を組織するや、トルコ帝の改革の約束の實行を促がし、トルコ帝が決答を與へざるや、諸強國と共にトルコに對して壓迫を加へんとせり。諸強國は六月十一日聯合通牒をトルコに提出し、アルメニヤの行政改革に關するベルリン條約の規定の完全且即時の實施を要求せり。九月七日には改革の詳細に互る聯合通牒提出されたり。然れども眞にトルコ内の耶蘇教徒の狀態の改善に熱心なる國はイギリスの外に存せずして、ロシアも眞にイギリスを助けて其志を遂げしむるの意なく、ヨーロッパ協調も活力を缺き、而して一八八二年に於てイギリスがエジプトを占領せるより、全然トルコ政府に對する信用を失ひ、又軍人の領事も召還さるるに至り、改革

の業は挫折するに至れり。トルコはアルメニヤ人を迫害することを止めざるより、少數のアルメニヤ人の間に、暴力を用ひてトルコ人に反抗せんとするの企圖が行はるるに至り、トルコは一八九一年アルメニヤ地方にクルド人の不正規の騎兵を置き、一八九四年の夏よりアルメニヤ人の虐殺が行はるるに至れり。イギリス政府は事實の調査と違犯官吏の處罰とをトルコ政府に求め、トルコ政府は叛徒を鎮壓せるに過ぎずと爲せるが、イギリスは他の諸強國と共に、調査委員會を設くることをトルコに勸告するに至り、該委員會に依り、アルメニヤ人が叛亂を起せるに非ずして、トルコ兵がクルド人と合してアルメニヤ人を攻撃せるものなること明白となれり。

イギリスは虐殺の再び行はるるを防がんと欲し、改革案を提出せり。然るに小アジャに於てアルメニヤ人に對する迫害の止まざるを見て、ロシア及びフランスも其コンスタンチノブル駐劄の大使をして、イギリス大使と共に改革案を協議せしむ。一八九五年五月十一日提出されたる改革案に對してトルコ帝は承諾を與ふるを欲せずして、ドイツの關與を求めたるも、其の聽く所とならず。イギリスは諸強國に勸めて、共にトルコに對して改革案の諾否の返答を迫らんと欲し、而してロシアの大使に對して、トルコが荏苒返答を爲さざるときは強制的手段に出づべきを告げたり。ロシアの外務大臣ロバノフはアルメニヤに關してブルガリヤに關する覆轍を踏むに至らんことを懼れ、ロシアが強制手段に關係するを欲せざるを説けり。トルコはロシアの態度を聞知し、實際上改革案の全體の拒絶を行へり。ロバノフはイギリス大使に對して、ロシアが強制に關係せず、又アルメニヤ人が特權を有してアルメニヤ國の核心となるに至るべき地方を設くるを許す能はずと爲せり。六月十九日イギリス政府はトルコ帝が四十八時間内に改革に關する意思を言明することを要求すべきを提議し、ロシア政府が此提議の考量中に於て、ローズベリ内閣倒れ、而してロシアはイギリスの要求に同意するを拒めり。

ソールズベリが新内閣の首相として外務大臣を兼ねしが、アルメニヤ人を救ふに熱心にして、トルコ帝が改革案の批評を以



て其返答と爲すや、ソールズベリはロシヤ政府に問ふに、如何なる程度までロシヤが強制を行ふに意あるやを以てせり。ロバノフは自治的の國家を立つるの意圖なき限りは、イギリスと協力するを辭せざる旨を答へ、ソールズベリはイギリス政府が是の如き意圖を有せざるを説き、問題がベルリン條約に基きて有效なる監視を設くることに在るに外ならずと爲せり。ソールズベリはカウスに於てドイツ帝と東方問題につき談話を交へたるが、議會に於ける勅語奉答案に關する演說中に於て、トルコに對して警告的の言説を爲し、ヨーロッパ強國がトルコ帝國內の無政府的狀態及び諸弊害を匡正するために提議する援助を受諾するを拒み、又は其の提出する勸告を聽かざるが如きは重大なる誤謬にして、如何なる條約も、如何なる同情も、結局に於てはトルコ帝國が無政府的狀態及び諸弊害の爲に倒るることを防ぐ能はざるべきを述べたり。然れどもトルコ帝はイギリスが他國の援助を受けざるを見て、毫もイギリス政府の言に耳を傾けざるなり。而してロシヤは單にイギリスの強制をトルコに加へんとするに對して援助を與ふるを拒むに止まらずして、他國が強力をトルコに對して用ふることをも、之を承認せざらんとするの態度を執るに至れり。トルコ帝は若しイギリスにして改革に關するヨーロッパ的監視を主張するときは、トルコ帝は寧ろロシヤ帝の權力の下に立つべきを説くに至り、而して既にアルメニヤ人に許與せる讓許を撤回し、回々教徒の手に悉く行政を留保するに至れり。

此後ロバノフはイギリス政府がアルメニヤ國を創立するの意圖を有せず、又強制を行ふの意思なきを見て、稍態度を改め、溫和的なる提議の支持を諾するに至れり。トルコ帝がヨーロッパ的監視を拒絶せるを以て、ソールズベリは監督の爲に混成委員會を設け、三人のヨーロッパ人の委員を加ふるの提議を爲せり。ロシヤはフランスと共にトルコに提議するに、イギリスの提議せる委員會と、五月の提議に係る改革案の要綱との中、何れか其一を撰みて之を行ふべきことを以てし、トルコ帝は五月の改革案の要綱を探るべきを答へ、十月十七日改革に關する勅令を發せり。

然るに是より先き九月三十日よりアルメニヤ人の大規模の虐殺行はれ、死する者三萬五千人に及べり。イギリス政府はトルコ政府に對して厳しく抗議せるも其效無く、ロシヤの外務大臣は秩序恢復の爲めにトルコ帝に時日を假すべしとし、此際出來得る丈けトルコの事に干渉せざるを可なりとせり。アルメニヤ人の一隊はヨーロッパ諸強國の冷淡なるを憤り、一八九六年四月末コンスタンチノブルのガラタに在るオットマン銀行を襲ひて之に據れり。アルメニヤ人の此暴擧の爲に虐殺がコンスタンチノブルにも行はるるに至り、アルメニヤ人の死する者六、七千人に及べり。コンスタンチノブル駐劄の諸國大使が聯合通牒を以て抗議を爲すに至りて、虐殺が始めて止むに至れり。

六強國の大使は聯合通牒を以て、虐殺に關する調査及犯人の處罰を要求せるも、騷擾に關係せる者を裁判する爲めの法廷は却てアルメニヤ人を罰して、虐殺に従事せる者を解放せり。而してトルコ政府は諸國がアルメニヤ人の煽動者を其領内より追ふべきを求むるに至れり。イギリスに於てグラッドストンは、イギリスが單獨なりとも強力を以てトルコに干渉すべきを説けるも、ソールズベリ卿はイギリスの干渉の爲にヨーロッパ的戰爭の起るべきを懼れて、敢て單獨干渉の舉に出づる能はず。諸國と協同してトルコに改革を迫らんと欲せるも、諸國の聽く所とならず。

此頃イギリスに於て、ロシヤに對してトルコを擁護するの在來の政策の誤謬なるを説く者多きに至れり。トルコはベルリン條約に於て約束せる改革を行ふこと無く、諸強國もトルコの改革の約束を強て行はしめんとするの意なく、會々イギリスが改革をトルコに迫らんとすれば、ロシヤの如きは却て之を妨ぐるの態度に出でたり。イギリスがアルメニヤ人虐殺に關して抗議を爲せることは、トルコ帝の憤怒する所となり、又イギリス人が改革を強ひんとして威脅的態度に出づれば、トルコ帝の輕侮する所となれり。イギリス政府のトルコに對して主張する所一も之を貫くを得ず、イギリスはアルメニヤ人を救援するを得ずして、イギリスのトルコに於て在來蓄積せる勢力を擧げて之を失ふに至れり。



ロシアは其會てバルカン半島に於て獨立を援助せる人民に關して、志す所を行ひ得ずして、ロシアの見て忘恩の措置と爲す所に懲りたるのみならず、アルメニヤ人に對しては初より深き同情を有すること無く、且つロシアは當時極東の經營に志すに至れるを以てトルコ方面に於て事無きを求め、又トルコが改革に依り國情を改めて、ロシアの後日の計畫の妨害を生ずるを欲せず。然のみならず、會てトルコを助けて屢ロシアの計畫を挫けるイギリスがトルコの事に苦しむを快とするの情なきを得ず。クリミア戦争以來のイギリス、ロシア間の反目の情勢は此方面に於ても現はれたるなり。

是の如くアルメニヤ事件につきては、イギリスはロシアの爲に妨げられて其目的を達するを得ざりしも、クリート島事件につきては、イギリスはロシアの協力を得て、耶蘇教徒をトルコの勢力より解放するを得たり。而してヨーロッパ協調もクリート島事件に依り、其のアルメニヤ事件の爲に失墜せる威信を稍恢復するを得たり。クリート島は其住民の多數が耶蘇教徒にして、 그리스人と人種を同うせるが、常に權力を有する少數の回々教徒と軋轢せり。一八八九年クリート島を 그리스に合併することが問題となり、耶蘇教徒と回々教徒との間の鬭争を生じたるが、トルコは軍隊を派遣して擾亂を熾定せしめたり。此際 그리스政府は、列強特にイギリスのクリート島民の爲に干渉するを求めたるも、其要求は容れられずして止めり。一八九四年騒擾再び起り、翌年に至り鎮壓されたり。其後一八九六年の叛亂の起るや、ソールズベリはクリート問題をヨーロッパ協調に依りて處理せんと計り、トルコも終に、五年を任期とし、諸強國の承認する耶蘇教徒の知事を任命することを認むるに至れり。一八九七年回々教徒が騒擾を起すや、耶蘇教徒はクリートを 그리스に合併することを宣言し、 그리스の軍隊がクリート島に上陸せり。 그리스は一八六四年デンマルク王室より其王を迎へ、其際イギリスよりアイオニヤ群島を得、又ベルリン會議の後一八八一年セッサリーを得たるが、 그리스人は住民の大部分が 그리스と人種、宗教を同うするクリート島の合併を欲し、 그리스政府も此際輿論に動かされて、軍備を備めたり。トルコは 그리스に對して動員を行へり。イギリスはロ

シアと協同するを得て、遂にヨーロッパ協調をして同時にトルコと 그리스とに對して行動せしめ、 그리스に對しては、クリート島に絕對の自治を與ふべきも、其併合を許さずとし、 그리스軍隊及び軍艦をクリート島より撤退せしむべきを要求し、又トルコに對しては、クリート島を 그리스をして併合せしめざるべきも、クリート島の完全なる自治を許與すべきを要求し、 그리스は軍隊をクリート島より撤退せしむるを肯ぜざるより、諸強國はクリート島に軍隊を送るに至れり。 그리스、トルコ間に於て、トルコ帝の一八九七年四月十七日の宣戰に依り戦争開かれ、 그리스軍大敗し、 그리스はクリート島の軍隊を撤退せしむることを認め、諸強國の調停を求むるに至り、ヨーロッパ協調に依る調停が行はれ、五月十九日及び二十日休戰規約結ばれ、十二月四日に至り講和條約が結ばれたり。 그리스は償金をトルコに拂ひ、僅少の土地の割讓を行へり。ロシア帝はクリート島を以て依然トルコの宗主権の下に在るものと認めたるも、 그리스のジョージ親王を以てクリート島の總督と爲すべきを提議し、イギリスは之に賛成し、フランス、イタリヤも之に同意せり。ドイツ、オーストリアは當初之に反對せるも、ドイツはヨーロッパ協調より脱退すべきを宣言するに至り、オーストリアも亦之に倣へり。クリート島に在るイギリス兵が回々教徒に依り攻撃を受くるに及び、イギリスの艦隊司令官ノエルがカネアに砲撃を加へ、十月五日四強國はトルコ帝に聯合通牒を送り、トルコの軍隊及び官吏をクリート島より撤退せしめ、該島を四強國に引渡すべきを求む。四強國はトルコ帝のクリート島に對する宗主権並に耶蘇教徒及び回々教徒の福祉を保障すべきものとす。トルコ帝は終に四強國の要求を容れ、十一月五日クリート島の行政が四國の艦隊司令官の手に歸せり。十一月二十六日アテネ駐劄の四國の公使がジョージ親王の三年を任期として總督の職に就くことを求む。其後ジョージ親王は引續き總督の職名を帯びたるが、一九〇六年に至りクリート總督を辭し、諸強國は 그리스王をして其後繼者を撰定せしめ、ザイミスが總督として任命さるるに至れり。一九〇八年に至りクリート島に在りたる四強國の兵が撤退を始めたなり。



イギリスとロシアとの間の反目の情勢はアルメニヤ事件に於て著るしく現はれたるが、當時のロシアの外務大臣ロバノフは、イギリスに反対するヨーロッパ大陸の聯合を作り、之に依りロシアがコンスタンチノブルを得、フランスにエジプトを與へ、イスパニヤにジブラルタルを與へんとするの計畫を立てたり。是れロバノフ一箇の胸中に描ける空想的の計畫に過ぎざるも、一八九六年イギリスのトルコに於て勢力を失へるに乗じて、ロシアの利益を進捗せんとして、ネリドッフがボスフォラスに關する計畫を立てて、殆ど之を實行せんとせることあり。コンスタンチノブル駐劄のロシア大使ネリドッフは、ロシアの軍艦を黒海より出でしむるの權利を確むるの時機到來せりと爲し、トルコをして此權利を認めしむるの報償として、トルコの領土保全の擔保を約すべしと爲す。而してトルコ帝の決心を促す爲めにボスフォラス海峡の兩岸を占領すべしとす。ロシア帝は此計畫に賛成して、ネリドッフをペトログラードに招けり。ネリドッフは實にロシアに依る上部ボスフォラスの永久的占領及び總ての國民の軍艦に對して開放さるべきダダネルス海峡の中立化を致さんとせるなり。大藏大臣ウィッチは獨り此計畫に反対し、ポビエドノスツェッフの援助を借りて此計畫を挫けり。

## 第二十六章 イギリスとフランスとの關係

イギリス及びフランスの關係に於て極めて重要なものは、アフリカ大陸、特にエジプト及びスーダン地方に於ける利害の衝突に在り。是が爲めに兩國の間に危機を生ずるに至れることあり。

エジプトに於てメヘメット、アリの後継者が、トルコ帝の宗主権の下に、「ケデイーヴ」の稱號を有して君臨せるが、外國に於て負債を起すの權能を認められ、又政治的條約の形式又は性質を有せず、且つトルコ政府が外國と結ぶ條約に矛盾せざる以

上は、通商上の條約又はヨーロッパ人に關する警察事項關係の條約を結ぶの權能を認めらるるに至れり。一八六九年スエズ運河開通し、一八七五年イスマイル「ケデイーヴ」は其巨額の負債の爲めに其所有せる運河會社の株式をイギリスに譲渡すに至れり。一八七六年エジプト公債金庫を設け、エジプトの財務は漸く實際上イギリス及びフランスの共同監督の下に立つに至り、所謂二強監督の制度を生ぜり。一八八二年アラビ大佐の率ゐたる國民的運動の際、イギリス艦隊は砲撃をアレクサンドリアの要塞に加へ、軍隊を上陸せしめ、此機會を以てエジプトの占領を行ふに至れり。此際イギリスはフランスに對して協同的行動を勧めたるも、フランスはイギリスと行動を共にせず。イギリスのエジプト占領の結果として二強監督は終止するに至れり。此以後フランスはエジプトに於ける其行動の自由を恢復せりと稱して、イギリスのエジプトに於ける諸施設に對して反対するの態度を執るに至れり。

一八八五年夏ソールズベリが内閣を組織して外務大臣を兼ねるや、ドラモンド、ウォルフをトルコに派遣し、十月二十四日トルコと所謂第一ウォルフ條約を結び、イギリス及びトルコの政府が各一人の特派委員をエジプトに送り、「ケデイーヴ」と計つて、軍隊の組織を改め、行政の改革を行ふべきを定めたり。而して双方の特派委員が境界の安全並にエジプト政府の満足なる作業及び安定の確められたることを認定するときは、速に各特派委員より兩國政府に報告書を提出し、之に基き兩國政府はイギリス軍の便宜の時期に於ける撤退に關する條約の締結につき協議すべきを定めたり。一八八七年五月イギリスはトルコと第二ウォルフ條約を結び、イギリスの占領撤退の期限を三ヶ年以内に限り、内外の危難の爲め期限延長の必要起るときに於ても、危難去れば撤退を行ふべきを約し、條約批准後エジプトの領土不可侵の擔保を與ふべきを各強國に求むべしとし、トルコが侵寇又は内部の擾亂の起るを恐るる場合若くは「ケデイーヴ」が宗主國に對する其義務の履行を怠り又は國際義務の履行を怠りたる場合等に於て軍事的占領を行ふの權利を行使すべしとし、イギリスも同様の場合に於て危難を去る爲めに軍隊をエジ



プトに送るを得べしと爲せり。而して干渉の理由が止むときは、トルコ軍もイギリス軍も皆撤退すべしと爲せり。又上述の如き場合に於てトルコが軍事的行動を行はざるときは、イギリスが單獨に行動するを得べしと爲せり。此條約に附加せるウォルフの書簡に於て、若し三年の終に於て地中海に於ける強國の一が條約を承認せざるときは、イギリスは此拒絕を以て該條約中に所謂「外部よりの危機の出現」と看做すべしと爲せり。フランスはロシヤと共にトルコ帝が此條約を批准せざることを勧告し、トルコも遂に該條約の批准を行はずして止めり。

一八九一年十月上旬の演説中に於て、グラッドストーンはソールズベリが恒果多きエジプト占領を終止せしむることを希望するが如き言を爲せるも、其後數月にしてグラッドストーン内閣成るや、占領の終止に關して何等の實行されたる所無く、一八九二年「ケデーヴ」となるアッパスがイギリスを喜ばざる首相を任命するや、グラッドストーン内閣の外務大臣ローズベリは此任命を否認し、大臣變更の如き重大の事項につきましてはイギリス政府が協議を受くるを期待することを述べたり。フランス政府はイギリス政府の此高壓的措施に對して抗議せるも、「ケデーヴ」は終にイギリスに屈せざるを得ざるに至れり。

イギリスがドイツと軋轢するに至りても、其當初に於ては、イギリスとフランスとの間の反目の情勢は、依然として變更あることなし。ウォルフ條約の締結以後に於て所謂世界的政策が流行し、植民熱が旺盛となるの時勢に伴ひ、兩國の間に植民地を關する利害の衝突を加へたり。南太平洋のニュー、ヘブリデイスに於て、一八八六年フランスが軍艦を派遣し、屯營を作り、フランスの國旗を掲げたるより、イギリスも同地に軍艦を派遣し、翌年兩國の海軍將校より成る混成委員會が任命されて、移民の生命財産の保護を行ふこととなれり。一八八五年イギリスがビルマを併合するや、シヤムがイギリス領と印度支那のフランス領との間の緩衝國となり、シヤムに於ける兩國の勢力範圍に關して紛議を生じたり。フランスは一八八九年及び一八九二年に於てメナム河を以て兩國の勢力範圍の限界と爲すべき提議を爲せるも、イギリスが在在之に答へざる間に内閣更迭を

生じ、ローズベリ内閣成りて後、フランスがシヤム政府の措置に對して救正を要求する所ありしも、平和的手段に依り其主張を貫くを得ざるを見て、一八九三年四月フランスは強力を用ひて其要求を貫かんと計り、最後通牒を發し、封鎖を宣言せり。七月三十日フランスの提督がイギリス軍艦の封鎖區域より退去するを要求するや、ローズベリはイギリス軍艦リンネット號の退去すべからざるを電訓し、パリ駐劄のイギリス大使はケー、ドルセーに於て、イギリス軍艦の保護なければ、イギリス人の安全を計る能はざるを説けり。八月一日シヤムがフランスの要求を容れたるより、同月三日封鎖が解除され、イギリス、フランス兩國間の危機が去るに至れり。兩國は其後シヤム方面の勢力範圍の限界を定むるの談判を行へるが、一八九六年一月十五日に至り、始めて一の宣言に依り兩國の勢力範圍を定むるに至れり。

一八九四年五月十二日のイギリスとコンゴ自由國との間の條約により、イギリスが其勢力範圍に屬すると稱するナイル上流のバール、エル、ガゼル地方をコンゴの君主たるレオポルド王をして、其終身間租借せしめ、レオポルド王はイギリスのケーブよりカイロに至る電信及び鐵道の敷設の爲め、タンガニカ湖の西に於ける一帯の土地をイギリスをして租借せしむるを約せり。然るにバール、エル、ガゼル地方をイギリスの領土の如く處分せんとする點につきフランスは抗議をイギリス及びコンゴに提出し、スーダンとトルコの領土にしてトルコ帝のみが之を處分し得べしと爲せり。此際フランスの外務大臣アノトーはイギリスがバール、エル、ガゼル地方を其領土の如く主張することは、アフリカ及び世界に於ける勢力均衡を覆へし、フランスの利益及び權利に反すると爲し、而してフランスも該地方に遠征隊を派遣するの意あることを漏せり。イギリスはフランスの抗議に對して答ふる所ありしも、レオポルドに對して、條約の認むる權利を主張せざるに至れり。八月十四日フランスはコンゴ自由國と條約を結び、コンゴは其のイギリスより租借する地方を占領せざることを約し、又ウバンギ河上流の流域に關してフランスの權利を認めたり。イギリスは已に一八九〇年に於てナイル河上流の勢力範圍に關してドイツ



と約する所ありしが、是に至りフランスと談判を行はんと欲し、フランスも談判を諾し、同時に中央アフリカに關する諸問題につき協議せしが、一八九四年の末アフリカに關する種々の問題につきて協定案成りたるに拘はらず、シエラ、レオネの境界に關する以外に於ては、双方が之を承認せずして止めり。是に於てナイル上流地方につき兩國の紛議の原因依然存し、終にアフシヨ外事件を生ずるに至れり。

コンゴ河及びナイル河の中間に在る地方にフランスが遠征隊を送れるの風説あるや、一八九五年四月イギリス外務次官グレイは有名なる宣言を爲し、ナイル河の流域に於てエジプトが権利を有し、イギリスの之に基きてナイル河流域地方につき他國の覬覦を許さずとするの意見は、已にフランス政府の知悉する所にして、ナイル河流域地方にフランスが遠征隊を送る如きは、イギリスの非友誼的行爲を以て目せざるを得ざる所なりと説けり。フランスはイギリスのナイル河流域に關する主張を承認せずして、遠征隊を該地方に送れり。一八九五年夏統一黨が政局に立つや、ソールズベリはフランス政府に告ぐるに、イギリスが「マデイ」教徒の勢力を覆さんと欲し、ドンゴラに遠征隊を派せんとするの意あることを以てし、協商を行ふの意あるや否やに關して、暗にフランス政府の意向を問ふ所あり。然れどもフランス政府は此の協商の提議に應ぜず。

イタリアは紅海岸のマッソワを占領するを計り、一八八七年イタリア軍の一隊がドガリに於てアビシニヤ人の爲に全軍覆没の禍に遭へり。一八八九年ウッチャーリ條約はイタリアを以て外國との交渉に於けるアビシニヤの仲介者と爲せるの故を以て、イタリアは爾後アビシニヤを其保護國と稱せるも、アビシニヤ王メネリックはイタリアの主張を承認せず。一八九一年のイギリス、イタリア間の協定は二國の勢力範圍の限界を定め、カッサラはイギリスの勢力範圍内に屬すると爲せるも、イタリアが軍事上の理由に依り之を占領するを認めたり。而してイギリスはアビシニヤがイタリアの勢力範圍内に在るを認めたり。フランスは當時イタリアと關稅戦争を行ひ、イギリス及びイタリアに對する關係に於て、アビシニヤを利用せんと欲せり。一八九

〇年イタリアはソマリ海岸につき保護關係を設定したるを以て、益々アビシニヤに關して利害を感ずること深きに至れり。一八九六年アビシニヤ王はイタリアが其新に占領せる土地より撤退し、ウッチャーリ條約を修正するの基礎に依り、イタリアと講和せんと欲せり。然るにイタリアは此提議を拒絶し、三月一日アドワに於てアビシニヤ軍を襲ひ、却て大敗を受けたり。イタリア軍はマッソワに退き、クリスピーの内閣は是が爲めに倒れ、ウッチャーリ條約は解除せられ、イタリアのアビシニヤに對する計畫は頓挫するに至れり。

イタリア軍がアビシニヤを追はるる際「マデイ」教徒がカッサラを圍み、イタリアの守備兵の勢危かりしが、他の方面より「マデイ」教徒の進出せんことを懼れ、エジプトの軍憲は其際直ちに軍を進むるの必要あるを説けり。是に於て一八九六年三月中旬、イギリスに於てドンゴラまで進軍するの宣言が行はれたり。フランス政府はスーダン恢復の計畫がイギリスのエジプト撤退の無期延期を致すものと爲し、エジプト問題のヨーロッパ的問題たるを主張せり。而してフランスはロシアと提携して、公債金庫に於ける投票權に依りスーダン遠征の費用の支出を妨げんとせり。然るにドイツは已に一八九〇年の協約に依りナイル上流に對するイギリスの主張を認め、且つドイツはエジプトに於てはイギリスを助くるを以て其方針と爲し、公債金庫の決議に於て遠征費の支出を認むるに至らしめたり。フランスは更に公債權利者の名義を以て混成裁判所に訴へ、其否認の宣告を認め得たり。ドンゴラは九月に及びて占領さるるに至りしが、ソールズベリは永くカーツームを「マデイ」教徒の手に委するを得ざるを説けり。

フランスのブルジョア内閣は一八九六年二月二十四日マルシャンをして、フランスの勢力をナイル地方に擴張せしむる爲め、イギリス人に先ちて該地方に赴かしむ。同年四月末ブルジョア内閣倒れてメリーヌ内閣成り、該内閣の外務大臣アノトーはマルシャンを召還するに至らざりしも、新に訓令をウバンギ上流の總督に與へ、マルシャンの使命は軍事的の企圖に非ずして、



征服の意圖を含まずと爲し、單にナイル河流域に於て地歩を占むることを求めんとするに外ならずと爲せり。是より先き一八八五年フランスはマダガスカルと條約を結び、其外交關係をフランスの監督の下に立たしむることを約せしめ、イギリスは一八九〇年フランスと協商を爲し、ザンジバルに於て讓歩を得て、フランスの爲にマダガスカルの新地位を認めたり。然るにマダガスカルはフランスの勢力を承認せず。一八九四年フランスは最後通牒を發して、マダガスカルをしてフランスの權力の下に立つことを認めしめんとせり。マダガスカルがフランスの要求を容るるを肯ぜざるより戦争起り、一八九五年九月マダガスカルが占領され、一八九六年叛亂が戡定せられ、全島がフランスに併合されたり。イギリスは意ならずも領事裁判權を拋棄せり。然るにフランスが關稅率を高めてイギリスのマダガスカルに於ける貿易に大打撃を與へたるより、イギリス、フランスの間に衝突の原因が加はるに至れり。

一八九七年七月フランスはトーゴランドの境界につきてイギリスと協定を爲し、其後幾も無くチュニスに關してもイギリスと協定を爲し、イギリスの貿易に對して若干の讓許を與へたり。

ナイジャー河の下流に關してもイギリス、フランスの間に紛議を存し、一八九七年の初、該紛議はパリに開ける混成委員會に依り之を處理せんとせり。一八九八年二月十八日ナイジャー委員會のイギリスの代表者は終にフランスの主張を認め、セネガル、ナイジャー及び象牙海岸等のフランスの植民地の相互の連絡を確むるを得せしめたり。同年六月十四日一條約がパリに於て調印され、セネガルよりナイル流域に至る迄の勢力範圍の限界を定めたり。此條約に依り西アフリカに於ける兩國間の境界爭議を一掃するを得たるも、ナイル流域の問題が依然存せり。

キツチナーは一八九八年三月イギリス及びエジプトの軍隊を率ゐてナイル河上流のスーダン地方に向て進軍を始めた。ナイジャー條約の調印の翌日メリース内閣倒れ、デルカッセが外務大臣となれり。七月十日フランスのマルシャン遠征隊がフ

シヨダに着せり。九月一日イギリス、エジプトの軍は「マデイ」教徒の「カリファ」アブデュラの首都たるオムデュルマルに向て進み、九月二日「マデイ」教徒の軍を破りて其首都を占領せり。イギリス政府は「カリファ」に屬せる土地は征服の權利に依りイギリス及びエジプトに歸屬するに至れることをフランス政府に對して主張せり。キツチナーはカーツームの西五百哩に在るフアシヨダに於てフランスの國旗の翻れるを聞き、砲艦と軍隊とを率ゐて至れり。マルシャンは書翰を以てナイル左岸のバール、エル、ガゼル及びシルク地方をフアシヨダに至るまで占領せるを告ぐ。九月十九日キツチナーはフアシヨダに達し、マルシャンに告ぐるに、フランス人のフアシヨダ及びナイル流域に在ることは、エジプト及びイギリスの權利の直接の侵害と考量されることを以てし、「ケディイヴ」の領内に於てフランスの國旗を掲揚することに對して抗議せざるを得ずと爲す。マルシャンはフランス政府の命令を受けずして撤退し、又は國旗を卸すを得ずと爲し、事件をパリに通報するを求む。九月二十七日デルカッセは外務省に於てイギリス大使と會て、イギリスの手を経てマルシャンに訓令を發し、マルシャンの報告をカイロに送らしむることと爲さんとす。是れ報告の接受に至るまではマルシャンを召還せざるべきを以て、ソールズベリは其の不安の事態を長引かしむるを不可とせるも、終に訓令の傳達を諾するに至れり。九月三十日デルカッセは審議を行はずして無條件にフアシヨダより撤退するを得ずと爲し、其際コンゴ河及びウバンギ河上流のフランス植民地の境界につき審議するを求む。フランスは種々主張する所ありしも、イギリスはフランスがフアシヨダを撤退せざるを得ざるを悟り、體面の維持を求めんとするに過ぎざるを見て、無條件の撤退を要求せり。マルシャンの報告パリに送られて後、十一月四日フランスはフアシヨダ撤退をイギリス政府に告ぐ。此に於てイギリス、フランス間に危機を生ぜしめたる問題の落着を見るに至れり。一八九九年一月十九日のイギリス、エジプト間の條約に依りスーダン地方の共同領域たるを定めたり。

一八九九年三月二十一日の宣言に依りイギリス、フランスの間に於てアフリカに於ける勢力範圍を分ち、ナイジャー及びビ



ンゴに於けるフランスの地位は改善せられ、フランスは西アフリカよりサハラ及び内部に向て膨脹するの権利を認められたり。フランスは又商業上ナイル河上流と觸接することを認められたり。

トランスヴァール戦争の際ヨーロッパ大陸に於てトランスヴァールに對する同情が盛に表示され、一八九九年十月ムラヴィエフはパリに於てフランス政府と意見の交換を行ひ、一九〇〇年二月の末ロシアはフランスと審議して後、ドイツを誘うて、平和恢復の爲めにイギリスに對して聯合的行動を爲さんとせるも、ドイツ帝は、ドイツにしてフランスの抗敵に備へざるを得ざる間は、自己を紛糾に暴露するを得ずと爲し、ロシア及びフランスがドイツと共に各自の領土の擔保を目的とする條約を結ぶに意あるや否やを問へり。是れフランスに對してフランクフルト條約の規定の公認を爲すを求むるものに外ならざるを以てフランスの肯せざりし所なり。

## 第二十七章 イギリスとドイツとの關係

イギリスとドイツとは、フランス及びロシアに對する關係に於て或る程度の共同利害を有し、イギリスは地中海協商に依りて三國同盟に接近せり。ビスマルクのドイツの政局に當れる頃、イギリスのエジプトに於ける地位を認め、屢イギリスとの接近を求め、一八八七年に於ても、ビスマルクとソールズベリとの間に意見の交換行はれたるが、一八八九年一月に於てビスマルクはロンドン駐劄のドイツ大使ハッツフェルトに訓令して、フランスに對するドイツ、イギリス間の同盟に關するイギリス政府の意向を探らしめたり。ヨーロッパの平和は、フランスの攻撃に對して相互的に應援するを約するドイツ及びイギリス間の條約の締結に依りて最も善く之を確むるを得べしと爲し、秘密同盟條約もフランスの攻撃に因る戦争の際の勝利を確かむる

に足るべきも、公示同盟條約と爲すときは、初より是の如き戦争の起るを妨げ得べしと爲す。ソールズベリは三月二十二日に至りドイツの同盟の提議に答へ、内閣員中之に依り政府が議會の多數を失ふに至るべきを以て時機不可なりとするの説を爲すものありとの理由に依り、ドイツの提案に對して諾否を述ぶるを得ずと爲せり。此際チェンバレンがヘリゴランドをドイツに讓渡することにつき談れることあり。ビスマルクが政局より退きて後、一八九〇年六月十七日イギリス、ドイツの間に條約が結ばれ、ドイツはアフリカのウイテニー及びソマリ沿岸に對するイギリスの保護權を認め、ウガンダをイギリスの勢力範圍に移し、沿岸一帯の地を除きて、ザンジバルに對するイギリスの保護權を認め、ナイル河上流の流域を、エジプトの境界に至るまで、イギリスの勢力範圍内に在りと認めたり。而してイギリスはザンジバルの君主に對して沿岸一帯の地方をドイツに賣却するを勸告すべきを約し、ドイツがアフリカ内地の大湖水に至るまで其政治的勢力を擴ぐるを認めたり。ドイツは又ザムベシ河に達する交通に必要な一帯の地方を得たり。此際ドイツの最大の利益と爲せる所は、ドイツ帝の熱望せるヘリゴランドを獲得せることに在り。

一八九三年の初頃ビスマルクの後を襲ぎて宰相となれるカプリヴィーは、ロンドン駐劄のドイツ大使に與へたる書翰中に於て、ドイツ政策の目的とする所がイギリスを漸次三國同盟内に正式に加盟せしむることに在りとし、現に兩國の間に存する友交關係を害すべき何事をも避けざるべからずとし、兩國の間に眞實にして永續すべき乖離を生ずるときは、其のイクリヤに對する影響の爲めに、三國同盟は危殆に瀕すべく、ドイツをしてロシアに依らざるを得ざらしむるに至るべしと爲せり。

然るにアフリカ大陸の分割の問題に依りイギリス、ドイツの間の國交に陰翳を生ずるに至れり。是より先きドイツが西南アフリカに植民地を拓かんとするに當り、一八八二年の末以來イギリスと交渉を行へるも、イギリス政府が容易に確答を與へざるより、ビスマルクがイギリス政府に對して不平を述べたることあり。一八八四年六月に至りイギリスは始めてアングラ、ベ



ケナに對するドイツの主權を承認すべきことを宣言せり。同年中ドイツはトーゴランド及びカメルーンの一部を占領し、又太平洋のニューギニアの一部を占領せり。ニューギニアに關してドイツとイギリスとの間に問題生じたるも、一八八五年に入り、ビスマルクが特に其子ハーバート、ビスマルクをロンドンに派遣して、ドイツが植民政策につき其期待するイギリスの援助を受くる能はざるを以て、ドイツの友誼とドイツの敵意との間の區別を示さざるを得ざるに至れりとして、率直なる言明を爲さしめたるの結果として、幾も無く協定成るに至れり。ザンジバルに於ても一八八四年よりドイツ人が植民地を拓き、イギリスはドイツの主張を支持することを其代表者に訓令せり。一八八六年の秋イギリスはドイツのアフリカ沿岸一帯地方並にキリヤンジャロ地方、ウガンダ及びウイテヌーに對する權利を認めたり。ドイツは又太平洋に於てサモア群島の一部を占領せり。一八九〇年六月に於てイギリス及びドイツの間に上述のアフリカ及びヘリゴランドに關する條約結ばれたるが、一八九三年中キリマンジャロ地方及びカメルーンの背後地の境界が協定され、次でトーゴランドの境界が協定されたり。

一八九四年以後イギリス、ドイツの關係に於て、アフリカ問題に依り陰翳を加へたり。同年カメルーンの東境に關してドイツ、フランスの間に協定成りしが、曩にイギリスがドイツとの條約に於て、フランスをして保有せしめざらんと欲してドイツに與へたる地方が、該協定に依りフランスに歸屬するに至れることあり。又同年五月十二日イギリスとコンゴ自由國との間に結ばれたる條約に依り、イギリスが其勢力範圍内に存すと認むるバール、エル、ガゼルを以て終身レオポルド王の租借する所となし、又コンゴ自由國は一八八四年のドイツ、コンゴ間の條約に矛盾せるタンガニカ一帯地方の租借をイギリスに認めたるより、フランスはバール、エル、ガゼルに關して抗議し、ドイツはタンガニカ一帯地方に關して抗議し、該條約は行はれざるに至れり。ドイツのアフリカに於ける活動はイギリス人のドイツに對する感情を冷却せしむるの一原因となれり。一八九五年ソールズベリが首相となれるとき、ドイツはアビシニヤ事件につきイタリヤを助くべきをイギリスに求めたり。ソ

ールズベリは紅海に於てイタリヤに便宜を與ふるときは、フランス人の嫉妬を招くべきを説き、イギリスはイタリヤのアルパニヤ及びトリポリを取得することを承認するの意あるを説けり。ソールズベリはトルコの改革の到底行はれざるを信じ、トルコ分割論に傾きしが、一八九四年のアルメニヤ人は續事件以後益其所信を堅ふし、トルコ分割の場合に備ふる爲めに諸強國が豫め協定を爲すべきの時期に達せりと爲せり。ドイツはトルコ分割に反対し、且つイタリヤがアルパニヤを取れば、アドリヤ海に於けるオーストリア、イタリヤ間の競争を劇甚ならしめて、三國同盟の存立を危ふし、且つ東方問題の再起を促して、ドイツ、ロシア間の友交を危ふすべきを懼るるを以て、ソールズベリの提議に耳を傾けず。同年ドイツ帝がイギリスのカウスに赴くや、ソールズベリがドイツ帝に對して同様の提議を爲せるも、拒絶に遭ひ、東方問題に關する協議の結果は益イギリス、ドイツ間の乖離の勢を加へしめたり。

イギリス人がフランスヴァールに對して壓迫を加ふるや、ドイツ政府はフランスヴァールの人民に對して同情を表し、ドイツの物質的利益の擁護が、フランスヴァールの獨立國として維持されることを必要と爲すべきを説けり。一八九五年の末ジェームソンがフランスヴァールに侵入するや、一八九六年一月一日ロンドン駐劄のドイツ大使はイギリスの首相に對して、ドイツがフランスヴァール共和國の獨立に對する攻撃を默視する能はざることを述べたり。ジェームソン侵入が失敗に終れるの報道達するや、ドイツ帝は一月三日フランスヴァール大統領クルーゲルに宛てて、大統領及び其人民が友邦の援助を求むること無くして、獨力を以てせる努力に依り平和を恢復し、其國に侵入せる武装團徒に對して國の獨立を維持し得たることにつき、衷心より祝賀する旨の電報を送れり。イギリス人は南アフリカに於ける其地位に對する挑戦として深く之を憤れり。

ドイツは又トルコに關する問題につきイギリスと衝突せり。ドイツはトルコに接近して、イギリスのアルメニヤ問題又はクリート問題に關する政策を妨害し、イギリスのトルコに於て勢力を失へるに乗じて、イギリスに代りてトルコに勢力を植うる



に至れり。ドイツは一八八八年及び一八九三年に於てアナトリア鐵道の經營延長に關する特許を得、一八九八年ドイツ帝がコンスタンチノブル、シリア、パレスティンに旅行して、ドイツの勢力をトルコに植うるを計り、一八九九年には、ドイツは所謂バグダッド鐵道の特許を得たり。

イギリスとドイツとの間の衝突の原因は、上述する如き局部的の原因に限るに非ずして、更に一般的なる原因を存せり。ドイツの商工業の發達に依りイギリスが産業上の競争に苦しむに至れること、及び就中ドイツの海軍力の發達に依りイギリスが其制海權を侵さるるを懼るるに至れることは、トルコ問題、植民問題と共に、兩國の反目の原因となれり。ドイツに於て世界的政策の理想が宣言され、一八九七年六月ティルピッツが海軍大臣となり、同年十一月海軍擴張案が提出され、翌年四月該案が通過し、一八九八年九月ドイツ帝はドイツ人の將來は海上に在りとの言を爲せり。

イギリスはアジヤ、アフリカに關して早くよりロシア、フランスと利害の衝突を有せるが、是等の事情に促されて再びドイツに近づかんとするに至れり。一八九五年のソールズベリ内閣に於て、チェンバーレンが植民大臣として勢力を有し、一八九八年二月末より三月に互りて、ロンドン駐劄のドイツ大使ハッツフェルトと非公式の會談を爲し、チェンバーレンは兩國の同盟につき述ぶる所あり。ドイツ政府はイギリスの黨派政治なるが爲めに、一旦同盟を結ぶも其永續を保障し難く、且つ同盟條約の公表はドイツとロシアとの關係を悪化せしむべきの故を以て、同盟を結ぶを欲せず。當時チェンバーレンは同盟の締結を熱望せるものの如く、ドイツ帝が五月三十日ロシア帝に送れる書翰中に於て、イギリスより三たび提議を受けたりと爲せり。ドイツ帝の書翰に依れば、イギリスは三國同盟の外、日本及びアメリカをも同盟に加へんと欲するものなりと爲す。ドイツ帝はロシア帝に問ふに、若しイギリスの提議を拒絶せば、如何なる事をロシア帝より期待し得べきやを以てせり。ロシア帝は三ヶ月以前に於てイギリスが暗にフランス、ロシア同盟を破壞するの目的を以てロシアに提議する所ありたりと爲し、爾後ロシアは旅順口を獲得し、日本と韓國に關する協定を行ひ、又アメリカと友交的關係を維持すると爲し、ドイツはロシアの友誼に信頼し得べきも、イギリスの提議に對して如何なる價值を付すべきはドイツ帝の自ら決定せざるべからざる所なりと爲せり。ドイツはロシアの好意を維がんと欲するを以て之に對する同盟を結ぶに意なきも、イギリスとの接近の道を塞がざらんと欲せり。六月に於てソールズベリがドイツ大使と議して、ロシアを標的とせざる形式を以て兩國の接近を致さんと試みたるも成效せず。八月十八日ドイツ帝はロシア帝に書翰を送り、イギリスが同盟の談判を爲せるも、其眞意はイギリスの用を爲すべき大陸の軍隊を得んとするに在るもの如しとし、イギリスは之を見出すこと困難なるべく、少くともドイツ軍はイギリスの用を爲さざるべしと説けり。

ボルチュガルの財政の困難に際し、ドイツ及びイギリスは其間に協議を爲し、ボルチュガルの公債に關して二國の一が談判を受くるときは、二國協同に非れば金圓を供給せず、又巨額の公債の場合には、其擔保として植民地を抵當と爲すか、又は之を讓渡せざるべからざる旨を答ふべきを約せり。一八九八年十月に於てボルチュガルの植民地を兩國の間に勢力範圍として分割するの秘密條約成れり。但し實際の領土權の獲得は、ボルチュガルが領土の賣却を望む場合に依て始めて行はるべきものとす。然るにボルチュガルが破産を免がれたるを以て、此條約は實行されずして終れり。一八九九年ソールズベリはボルチュガルと公文交換を行ひ、外國の攻撃に對して相互的に領土を擔保するの舊約を、明文を以て更新せり。所謂ウインゾル條約是なり。セシル、ローツが一八九九年春ベルリンに赴き、ドイツ領東アフリカを經由するアフリカ大陸縱貫の鐵道及び電線の敷設の計畫を實行せんとし、先づ電線の敷設につきドイツの承認を得たるも、特許會社が大西洋岸まで鐵道線を敷設する場合にはドイツ領西南アフリカを經由せしむべきことを條件とせり。而してドイツが財政上ドイツ領東アフリカを通ずる鐵道の敷設を實行する能はざる場合には、ローツが敷設に従事すべきを約せり。

ウインゾル條約



一八八九年以來サモアはアメリカ、イギリス及びドイツの三國の勢力の下に在りしが、其處分に関して紛議止まず。ドイツはイギリスに對して強硬の態度を持せしも、一旦イギリス領ソロモン島及び黄金海岸の一部を得て、之に換へてサモアに関する権利をイギリスに譲渡するの議が決せんとせるが、チルビッツの反對に依り議破れたり。トランスヴァール戦争の起るに及び、ドイツの談判上の地歩強きを致し、イギリスはドイツ領ソロモン島を得て、サモアに於ける其權利をドイツに譲るに至り、合衆國もサモアの一島を領有することとなれり。

トランスヴァール戦争中、一八九九年ドイツ帝がイギリスを訪問せる際、チェンバーレンは十一月三十日のレスターに於ける演説に於てイギリスとドイツ及びアメリカとの接近につきて説けり。然れどもドイツの新聞紙はトランスヴァールに同情せるを以て、チェンバーレンの所説はドイツに於て反響を生ぜず。

一八九九年トランスヴァールの最後の通牒の發せられたる後一週間を経たる十月十八日、ドイツ帝はハンブルグに於ける演説中に於て、ドイツが痛切に強大なる海軍の必要を感ずるを説き、十二月十一日宰相ビュローは帝國議會に於て、ドイツが如何なる強國の攻撃をも妨止するに足るべき強勢なる艦隊を有せざるべからざるを説けり。十二月中ドイツ商船三隻が戦時禁制品輸送の故を以てイギリス軍艦に依り停船を命ぜられ、其中ブンスラート號は審檢の爲めダーバンの捕獲審檢所に引致されたり。此際ドイツはイギリスに對して著るしく強硬の態度を示し、イギリス政府はドイツの海軍將官の一人が四十八時間を期限とする最後通牒を懷にしてロンドンに赴くべきの通知を得たるが、ソールズベリは温和的態度を示し、直ちにブンスラート號を解放して、償金を拂ふべきを約し、且つ向後ドイツ船の航行を妨害せざるべきを約せり。幾も無くドイツの第二の海軍擴張案が提出され、擴張案の説明に於て、假令最も強き海上國たりと、ドイツが之を敵とするに當りて、其制海權に對する危懼を感ぜしむべき程強勢なる艦隊をドイツが有せざるべからずと爲せり。是れ海軍擴張のイギリスに對するものなることを

公然認めたるなり。

トランスヴァール戦争の際、ヨーロッパに於てトランスヴァールに對する同情盛に表示され、一九〇〇年二月の末、ロシヤはフランスと審議の後、ベルリン駐劄のロシヤ大使をして、平和恢復の目的を以てドイツがロシヤ、フランスと協同して、ロンドンに對して聯合的行動を爲すの意あるや否やを問はしめたり。ドイツ帝はベトログラード駐劄のドイツ大使を經由して、之に關する返答を爲し、ドイツがフランスの抗敵に備へざるを得ざる間は、自己を紛糾に暴露するを得ずと爲し、ロシヤ、フランスがドイツと共に各自のヨーロッパ領土の擔保を目的とする條約を結ぶの意あるや否やを問へり。フランスはアルサス、ロレーヌの永くドイツに屬するを公然承認するを欲せざるを以て、ドイツと領土擔保の條約を結ぶを欲せず。一九〇一年十月ベルリンのロシヤ代理大使は調停に關するドイツの意見を問ふの覺書を提出せり。ドイツ政府は戦争の終止につき助力するを欲するも、聯合的行動は脅威の外觀を有すべきを以て之に與るを欲せずと爲せり。是より先き、トランスヴァールの大統領クルーゲルが一九〇〇年ヨーロッパを巡歴せる際、ドイツ帝はクルーゲルに謁見を與ふるを拒めり。

一九〇〇年に於ける義和團事件の際、北京公使館救援の爲めの遠征軍の總督として、ドイツ帝の腹心たるワルデルゼーが擧げられたり。ドイツ、イギリスの二國は北方より領土上又は商業上の侵蝕の行はるるに對して支那を防衛する爲めに協商を結び、一九〇〇年十月十六日、公文交換に依り支那に於ける門戶開放の主義及び領土保全の主義の維持を約せり。

イギリスは一九〇一年の初の頃猶ロシヤ、フランスに對する關係良好なるを得ずして、植民大臣チェンバーレンは、一八九九年以來中止せるイギリス、ドイツ同盟の問題を更に提起するに至れり。同年一月中旬チェンバーレンはドイツ大使館員エックカドスタインと會談の際、イギリスの「光輝ある孤立」の時代は去れりとし、イギリスは三國同盟又はロシヤ、フランス同盟の孰れかの一と共に當時の問題、特にモロッコ問題及び極東問題を解決するの覺悟を有すると爲し、内閣はドイツと共にす



るを欲するも、若しドイツとの協約が不可能となるときは、最大の犠牲を拂ふもフランス、ロシアと協商せざるを得ずと爲せり。

此際我國よりロシアが關東洲總督アレクシエフと支那の一將軍との間に結べる秘密條約の批准を支那に強ゆるを報じ、且つイギリス政府を促して我國と歩調を同ふして支那に對して宣言を爲さしめ、支那の態度を強硬ならしめんとするや、イギリスはドイツとの協約を有する關係上ドイツの意見を求めたるに、ドイツはイギリス、ドイツ間の支那に關する協約は滿洲に適用なしとするの解釋を主張し、協同的の行動を拒めり。唯支那に對して領土上又は財政上の約束を他國と結ばざるべきを警告するを諾せり。一九〇一年三月十五日ドイツ宰相ビュローはイギリス、ドイツ間の支那に關する協約が滿洲に適用なきことを帝國議會に於て明言せり。是れドイツがロシアの滿洲に於ける行動に反對する爲めに協力することを拒絶するの意を表示するものなり。

三月十八日イギリスの外務大臣ランズダウン卿はエッカルドスタインに對して防禦的協定を兩國間に結ぶの内相談を試みたり。エッカルドスタインは支那に於ける領土保全及び門戸開放を維持することを目的とするイギリス、ドイツ及び日本間の條約を結ぶの議を發し、其友人たる林董公使が賛成する所なるべきを告げたり。三月二十日に至りドイツの外務省のホルスタインは若しドイツにしてイギリス帝國を擔保すべきものとせば、イギリスは日本と共に三國同盟に加はらざるべからずと爲せり。而して談判はウィーンに於て之を行ふべしと爲せり。三月二十五日假に要綱を定め、應援義務發生條件は締約國の一が攻撃を受くるときに於て存すべく、極東に關しては兩國が別に日本と同盟を結ぶべしとす。ホルスタインのウィーンに於て談判を行ふべきの希望に對し、ランズダウン卿は先づドイツに關する地位を明瞭にせざるを得ずと爲せり。然るに此時に於ても談判はベルリン側より妨害を受けて結果無きに終れり。ドイツ帝はイギリスがロシアに對してドイツの軍隊を用ひんと欲するもの

と爲し、ワルデルゼーも其極東より歸るや、イギリスがロシアに對する緩衝國としてドイツを利用せんとするの意圖を抱くと爲し、ドイツ帝に勸むるに、軍隊を支那より召喚し、又支那の海關稅率の引上を計りて償金を擔保すべきことを以てせり。ドイツより特に人をロンドンに派して、南アフリカに於けるドイツ人の損害の賠償要求の處理及び支那の海關稅引上を提議せることあり。然るに一方に於て同盟談判は猶行はれ、ソールズベリは單にドイツのみと同盟せんと欲し、ランズダウンは同盟談判の豫備問題として種々の問題を審議すべきを述べたり。然るにホルスタインはイギリスが先づドイツの二國の爲に攻撃を受くる場合のみならず、ドイツの其同盟國を援助せざるを得ざる場合に於ても、ドイツに應援を與ふべきを約さざるべからずと爲せり。六月中旬に至りチェンバーレンもドイツとの同盟締結につき望を絶ちて、ベルリンの人々にして彼の如く短見なるに於ては、施すべきの策無しと言へり。然れども七月に至りフランスがモロッコに使節を特派するや、イギリス側より更にドイツとの接近を試みたり。タンジニアに於けるイギリスの代表者たるニコルソンがロンドンのドイツ大使館にエッカルドスタインを訪ひ、フランスがモロッコに於て保護關係を設定するの目的を有するに對して、ランズダウン卿は現狀維持の目的の爲めにドイツの協力するを求むるの意ありと爲し、二國が先づモロッコに於ける利權の分配に關して協定を爲して後、共にモロッコと通商條約を結び、是に依り協力の基礎を置くを得べしと爲し、通商上、財政上及び政治上に於ける總ての措置を協同的に行ふを要すと爲せり。エッカルドスタインはイギリスの此提議をベルリンに報道せるも、之に對する返答を得ず。是より先きエッカルドスタインはモロッコに關して、一八九九年に於てはチェンバーレン及びローツと審議し、又一九〇一年一月にはチェンバーレン及びデヴォンシャーと審議し、イギリスがイスパニヤに屬すべき地方以外の地中海岸及びタンジニアを得べく、ドイツは大西洋に於て敷設炭港を得べしとし、終局に於ては共にモロッコを分割すべしと爲せるなり。

ドイツ人はイギリスと緊密の關係を作るときは、是が爲にロシアとの良好關係を危ふするに至るべきを恐れたり。又トラレ



スヴァール戦争以来ドイツ人民の間に人望を失へるイギリスと同盟するを困難とするの事情を存せり。而してドイツはイギリスがロシア及びフランスと相反目するの關係がヨーロッパの政局に於ける不變の現象なりと誤想し、イギリスのフランス及びロシアと協商を結ぶに至るべきを測知する能はざりしなり。是の如くして一八九八年以來四年に亙る談判の末に於て、イギリス、ドイツ間の同盟の不可能なること明白となれるなり。

イギリス軍の南アフリカに於ける行動に關して、ドイツ新聞紙が絶えず激しき批評を加ふるより、一九〇一年十月二十五日チェンパーレンは、イギリス人に蠻野の行爲ありとして、非難する國民自身が過去に於て行へる如き蠻野の行爲に類する行爲は、イギリス人の背て行ふ能はざる所なりと爲し、過去の蠻野の行爲の事例中に一八七〇年の戦争を挙げたるより、ビュローはイギリス政府の辯解を求めて拒絶に遭ひ、其後ビュロー及びチェンパーレンは各其演説を以て互に相應酬し、兩國民間の惡感情を煽揚するの結果を生ぜり。一九〇一年のイギリス、ドイツ間の談判の際、我國を新結合中に加ふることが考量されたるも、イギリスの提議がドイツの爲に拒絶さるるに及び、我國とイギリスとの間に同盟談判が行はれ、伊藤侯のロシアとの協商に關する談判は却て我國とイギリスとの間の同盟談判を促進せしめ、一九〇二年一月三十日に於て、我國とイギリスとの間に同盟協約締結せられ、イギリスは孤立の地位を脱するを得たり。同年二月頃よりイギリス、フランスの間に於て已に接近に關する談判が行はれたるも、モロッコ問題のジブラルタルに對する關係が複雑なる爲め、談判結果無くして終れり。

一九〇二年七月ポーア人が降伏せる後、イギリスとドイツとが再び相近づかんとするの形勢を見たり。ヴェネズエラに於て大統領カストロが専制を行ひ、在留ヨーロッパ人のヴェネズエラ政府の處置の爲に損害を受けたる者多く、一九〇二年イギリス、ドイツは相協同して主張する所ありしが、カストロが聽かざるより、十二月七日兩國は最後通牒を送り、ヴェネズエラの軍艦を拿捕し、其沿岸に封鎖を行へり。此際に於ける兩國の協同的行動は多數のイギリス人の喜ばざる所となれり。

一九〇二年バグダッド鐵道會社がコニヤよりベルシヤ海に鐵道を延長することを認められたるが、一九〇三年三月五日コニヤより、バストラに鐵道を延長し、鐵道の兩側の一定範圍内の鐵業を行ひ、バグダッド及びバラスに築港を爲し、並に鐵道用の爲め河川を航行するの特許を得たり。ドイツは資金供給につきイギリス人の協力を求めたるも、イギリス人は供給を爲すを肯せず。

是の如くイギリスよりドイツとの接近を求めたることあるも、ドイツ之に應ぜずして、且つイギリス、ドイツの間に許多の利益の衝突を存するを以て、イギリスは終にフランス及びロシアとの接近を求むるに至れり。

## 第二十八章 ロシヤとドイツ及びオーストリアとの關係

一八七九年ドイツ、オーストリア同盟の成りし後、ロシヤはドイツに近づくを求め、一八八一年五月に至り、オーストリアを加へて三帝同盟條約を結びたり。然るにロシヤに於てスコベレフ將軍の如きは、オーストリアがヘルツェゴヴィナに於て徵兵制度を施かんとして、之に反對せる人民の運動を鎮壓せるを見て、オーストリア兵がモンテネグロに侵入せんことを恐れ、一八八二年一月ベトログラードに於て、ロシヤ人はスラヴ人種の虐待され壓制さるるを見て永く黙視するを得ざるべしとし、ロシヤ人の歴史的の使命に關するロシヤ人の信仰が其慰藉にして又其勢力なりと説けり。スコベレフは更にパリに於て説きて、ロシヤがバルカンのスラヴ人種を解放せるは、オーストリアをして之を抑壓せしむるが爲めに非ずとし、ロシヤはトルコとの戦争に依り瘡痍を受けたること無く、宗教及び人民の爲めに如何なる犠牲を爲すをも辭せずとし、若しオーストリアにしてボスニヤ、ヘルツェゴヴィナ以外のスラヴ人を攻撃せば、ロシヤは之と戦ふに至るべしと爲し、又スコベレフはドイツ



人がロシアの敵なりと爲し、スラヴ人種とドイツ人種との間の闘争は必然的にして、終にスラヴ人の勝利に歸すべしと首へるもの如し。

ドイツのウィリヤム帝はロシアと事端を生ずることを避けんと欲し、一八八一年の夏モルトケがロシアの其要塞を強め、其鐵道を改良し、ドイツよりも迅速に其境上に兵力を集中し得るの理由に依り、ドイツ東境防禦の爲に金圓支出を要求するや、ウィリヤム帝は此要求に應ぜず。一八八三年二月サブロッフは一八八一年の三帝同盟條約を更新するを提議し、一八八四年三月に於て、變更を加ふること無くして三帝同盟條約を更新せり。九月に至り三國の君主は其外務大臣を從へてスキエルニヴィスに會合して懇談を行へり。然るにドイツはバルカン半島に於てロシアがブルガリヤを左右するを認めんとせるも、オーストリアはロシアの勢力を全くバルカン半島より追はんと欲し、ロシアのブルガリヤに勢力を占めんとするに反對せり。

是より先き一八八六年の夏、ロシア帝の信用を受けたるカトコフが、モスコイ新聞紙上に於てロシア、フランスの接近を唱道し、ロシア帝に覺書を奉り、其中に於て、フランスを強大なるものとして存続せしむることがヨーロッパの勢力均衡の爲に必要なりとし、フランスの脆弱はロシアの孤立を致すべきを説けり。一八八七年一月十一日陸軍擴張案提出の際のビスマルクの演説中に於て、若しフランスにして戰ふて勝利を得べしと考ふるに至るときは戦争が必ず起るべきを以て、ドイツの當局者は之に備へざるべからずと爲し、而してロシアの方面より攻撃又は抗敵を期待せんと爲し、ドイツにして反對黨の新聞紙の説く如く、ブルガリヤに赴きて故にロシアとの紛議を求むるに非れば、ロシアと紛議を生ずること無かるべしと爲す。而してドイツとロシアとの間に平和を維持することが困難なるに非ずして、オーストリアとロシアとの間に平和を維持することが困難なりと爲し、ドイツの義務は是等二國の政府をして平和を維持せしむるに在りとし、或はドイツの政策とオーストリアの政策とを全然一致せしめざるべからずと論ずる者あるも、ドイツのオーストリアに對する關係は、一方が強國として存在すること

がヨーロッパ勢力均衡上の必要事たるを各、自覺するに基くものにして、一方が其全力を他方の用に供せしむるの思想に基くものに非ずと爲せり。ドイツの干渉し得ざるオーストリアの特別利益あり、又オーストリアの干渉し得ざるドイツの特別利益ありとし、ドイツは其のフランスとの紛議又はイギリスとの植民上の紛議にオーストリアが關與するを求めず。之と等しくドイツはコンスタンチノブルに於て利害を有せずと爲せり。

一八八七年一月ロシア帝はドイツ帝がブルガリヤ公たりしアレクサンドル公の歸國を認めざるを求め、ドイツ帝は之を認めざるべきを約せり。四月ビスマルクはロシアの新聞紙のドイツ攻撃に關してロシア政府に談判せしめ、外務大臣ジェルスは政府の新聞紙をしてドイツ攻撃の不可なるを説かしめたり。カトコフは此事に憤慨して新聞紙上に於て論ずる所ありたるより、ロシア帝はカトコフのジェルスと面會して懇談すべきを命じ、ジェルスは其敵手と面會するを拒み、辭表を提出せり。ロシア帝はジェルスの辭職を聽許せざりしも、カトコフの主張に聽きて、三月十四日の勅令に依り西境に於ける市外の外國人土地所有者は一定の例外の場合を除きては、三年間に其所有地を賣却すべきを命ぜり。是れドイツ人に對するの措置なりとす。ジェルスは三帝同盟條約の更新に反對せざりしも、ロシア帝はハンガリヤの政治家間にロシア反對思想が熾烈なるの故を以て、一八八七年の更新期に於て、オーストリアとの條約關係を維持するを欲せざるを説けるが爲め、三帝同盟條約は更新されずして終れり。然れどもドイツとロシアとの間に於て三年を期限とする所謂再保險條約が結ばれたり。該條約はドイツ政府が其同盟國たるオーストリアに告げずして締結せる所なり。而して再保險條約締結の際、ドイツ、オーストリア間の同盟條約の關係條款がロシア政府に通報せられたり。

一八八七年の末オーストリア、ロシア兩國はブルガリヤ事件につきて相反目し、兩國の君主は互に他を攻撃せざるを聲明せらるも、ロシアの軍隊がガリシヤ境上に集中され、ロシアの新聞紙が熱狂的なる風習をオーストリアに加へ、兩國の關係切迫せ



るの形勢ありたり。ビスマルクは此際戦争を起らしめざることに努力し、十一月二十四日の議會に對する勅語に於て、ドイツ帝國は攻撃的傾向を有せず、又戦に勝たざれば満足するを得ざるの缺乏を有せず。然れども自ら衝るに際してドイツは現に強勢にして、又如何なる危険に應ずるも懼るる所無き程強勢とならざるべからずと爲せり。而して陸軍擴張案を提出する際、ドイツ、オーストリア同盟條約を公表し、一八八八年二月六日の演說中に於て、當年の憂慮はフランスに非ずしてロシアに在りと爲し、ロシアの新聞紙の攻撃烈しきも、ロシア帝の權威に比すれば秤の上の塵の如しと爲し、ロシア帝がドイツ人又は其他の何人に對しても敵意を有せざることを親しく談られたるを以て、絶対にロシア帝の言ふ所を信ずと爲し、ドイツ及びオーストリアの境上に軍隊の集中されたるは、新規の事に非ずして、已に一八七九年より行はれたる所なりとし、ロシアは難治のポーランド人を更に其治下に加ふるを欲せざるべきを以て、ロシアがドイツを攻撃するの理由なしとせり。然らば何故に多數の軍隊を境上に集中せしめたるやにつき、特に説明を求むることを爲さざるも、蓋し次に起るべきヨーロッパの危機に於てロシアの發言に威重を加ふるが爲めなるべしと爲せり。然れども國家聯合の危険に絶えず存し、ドイツ人は之が對策を講ぜざるべからずと爲し、ドイツ人は其地位の爲めに他國民に比して一層の努力を爲さざるべからずとし、ロシア、フランスは一方より襲はるるに過ぎざるも、神はドイツ人の傍に諸國民中最も好戰的にして又最も躁急なるフランス人を置き、而して又神はロシアに於て好戰的傾向の行はるるに至るを許せりと爲せり。而してドイツ、オーストリア同盟條約を公表するに至れる理由を述べ、此公表は新聞紙の唱ふるが如くロシアに對する最後通牒、警告又は脅威の意味を有せずとし、ロシア政府は以前に之が通報を受けたるを説き、同盟條約は双方に於ける永久的利害の宣明なりとし、オーストリア無しとせばドイツはロシア、フランスの間にイタリヤと共に孤立せざるを得ずと爲し、若しドイツ人にして暴露されたる地位に孤立するを避けんとせば、安全なる友を有せざるべからずと爲せり。而してロシアの新聞紙及びロシアの輿論が有力にして信頼すべき舊友たるドイツ人に戸

を指示して退去を促せるを以て、強て交を求むること無かるべしとし、是故に一層ロシアの條約上の權利の尊重に注意せざるべからずとし、該權利の中にはドイツがロシアをして一八七八年に於て獲得せしめたるものをも含めりと爲せり。ドイツ人はブルガリヤに於ける卓越勢力がロシアの手に歸すべしと思惟せりとし、ドイツはロシアがブルガリヤに於て強力を川ふるを援助もせず又忠告もせず、又ロシアも之を欲するとは思惟せずと爲し、ブルガリヤは結果を豫見し得ざる戰爭の渦中にヨーロッパを投ずるの原因とする程重要なものに非ずとし、ビスマルクは平和の道に破るることあるべきを思はずと雖も、他國が脅威を止むべきを忠告せざるを得ずとし、ドイツ人は神を恐るるも其以外に此世に於て懼るる所無しと述べたり。

ビスマルクの演說の後數日にして、ロシア帝はブルガリアのフェルヂナンドをして退位せしめ、ブルガリヤ人をして新に其君主を撰ましめ、ロシアは以後干渉を行はざるべきことと爲して、ブルガリヤ問題を落着せしむるを求め、ドイツはフランスと共にロシア帝の提議に賛成せるも、オーストリアはフェルヂナンドの退位を強うることに賛成せず。ロシア帝はブルガリヤ事件につき終に其意を達するを得ずして止り。

ブルガリヤ事件の危機去れるも、ロシア帝はオーストリアと友交關係を復するを欲せず。然れどもドイツとロシアとの關係は未だ全く惡化するに至らず。ロシア帝の嫉視する前のブルガリヤ公アレクサンドルとドイツ皇太子フレデリックの王女との間の結婚談につき、ビスマルクはロシア帝の感情を顧慮し、固く争ひて之を妨げたり。フレデリックがウィリヤム一世の崩殂に依りドイツ帝となりて後、ビスマルクはドイツ帝に奉れる書翰中に於て、一八七一年以來のドイツ帝國の外交政策は平和の維持及びドイツ反對の國家聯合の防止に外ならずして、此政策の樞軸はロシアに在りと爲せり。

一八八八年六月ウィリヤム二世即位するや、先づロシア帝を訪問せり。ビスマルクは新ドイツ帝の爲に覺書を作り、ドイツはオーストリアの存立に關係なき事項につきてはロシアを妨害すべからずと爲し、例へば黒海、海峽又はコンスタンチノブル



に關する其企圖に反對せざるべきものと爲し、オーストリアにして之を妨げんと欲せば、其爲めにドイツ以外の同盟を求めざるべからずとし、ドイツ人は何人がコンスタンチノブルを支配すべきやの問題に依り二方面に敵を受くべき戦争を行ふを得ずと爲せり。而してドイツ帝はロシアに對して何物をも求めず、又何物をも提出せざるべきものとし、ドイツはロシアに關して求むる所なく又懼るる所なく、唯友交的關係を維持せんと欲するのみと爲せり。

一八八九年の末頃アレクサンドル三世はシエルズに命じて、一八八七年の再保險條約を更新すべきや否やを考量せしめ、ジエススの意見に従ひ更新を行ふの決心を爲せり。ビスマルクも固より更新の意ありしも、ビスマルクの退職の後ドイツ帝は更新を拒むに至れり。カプリヰーは兩國の關係に於て變更なきも、ドイツの政策は玲瓏透徹を要し、秘密條約あるを許さざるが爲めなりとせり。是に於てロシアと中央ヨーロッパとの緊密關係絶えたるを以て、ロシアはフランスに接近するを求むるに至れり。

一八九四年ニコラス二世が即位して後、一時ドイツに近づくの形勢ありしが、ロシア、フランスの接近は變更を生ぜず。一八九五年九月ドイツ帝はロシア帝に書翰を送り、ロシア帝がドイツを攻撃するの意圖を抱かざることを熟知するも、ロシアの將校官吏の公式的にフランスに赴くために、フランス人の感情を煽ぎ、復讐戦争を開かんとするに至らしむるの虞ありと爲し、若しロシア帝にして已にフランス人と同盟せらるらば、彼等惡漢を制して狼籍を行ふに至らしめざるを要すと爲せり。其後一ヶ月にして更に書翰をロシア帝に送り、朕をして不安の念を抱かしむるものは、フランスとロシアとの間の友交に非ずして、共和國を臺座の上に登らしむることに依り、君主主義に危険を及ぼすことに在りと爲す。ロシア帝はドイツ帝の書翰に依りて、毫もフランスとの同盟に對する其態度を變ずること無く、一八九六年十月ニコラス二世はフランスを訪問して同盟の體を堅めたり。

ドイツ帝はロシア、フランスの同盟の破り難きを見て、ロシアを誘ひて益々極東の經營に深入せしめ、同盟の銳鋒のドイツに加はるを避けんとし、極東事件に關してロシア、フランスと協同的の行動を爲せり。

ニコラス二世即位の後、ロシアの外務大臣ロバノフはブルガリヤに對するロシアの政策を一新するの必要を認め、而してブルガリヤ公フェルディナンドもロシアと和睦して君位を子孫に傳ふるを求め、一八九六年二月其王子をしてギリク舊教に依る洗禮を受けしめ、ロシア帝の其の名親たるを求むるや、ロシア帝は之を承諾し、ロシア帝がトルコ帝をしてブルガリヤ公の東ルーメニヤの知事たるを公認せしむるに至れり。一九〇〇年に至りブルガリヤがルーメニヤと戦はんとするの形勢あるに際し、オーストリアはルーメニヤと軍事協約を結び、ロシアは一九〇二年に至りブルガリヤと軍事協約を結び。

ロシア帝アレクサンドル三世の崩殞、ブルガリヤ公フェルディナンドの承認及びアルメニヤ事件に關する意見の一致等の事實ありたるのみならず、ロシアが極東の經營の爲に後顧の憂を除くを求むるに至れるより、ブルガリヤ事件以來相乖離せるロシア、オーストリアの關係が改善せらるるに至れり。一八九六年の夏ニコラス二世はフランシス、ジョセフを訪問し、オーストリア帝は翌年春ロシア帝を訪問して禮を返せり。オーストリア帝のロシア帝訪問の際兩國間に協商行はれ、事情の許す限り現狀を維持すべしとし、ゴルショースキの記する所に依れば、左の諸點が協定を經たりと爲さる。

(第一) 現狀の維持が困難となるべき場合に於て、オーストリア及びロシアは、豫めバルカン半島に於ける征服の思想を抛ち、又他國をして此主義を守らしむるに決心せることを約束す。

(第二) 又コンスタンチノブル及び其附近の地方の問題並に海峽問題は、極めてヨーロッパ的なる性質を有するを以て、格別の協商の目的と爲すべき性質を有せざるを認む。ムラヴィエフ伯はロシアが現在の事態の變更を計るの意圖無く、却て條約の規定の完全なる維持を主張すべきを宣言せり。同伯は現在條約の規定の完全なる維持が、海峽の閉鎖に依り外國軍艦

1896  
ニコラス二世  
アレクサンドル三世

1889-1890



の黒海に入るを妨げ、ロシヤに充分の満足を與ふるものと爲せり。

(第三) コンスタンチノブル及び海峽以外に於て、バルカン半島に新事態を設定することに關しては、オーストリア及びロシアは、其間に特別の約定を結ぶべく、之に關して兩國は左の方針に依り協力するの意圖あることを宣言す。

(イ) ボスニヤ、ヘルツェゴヴィナ及びボザール州(サンジャック)の領有は何等の審議の議題と爲すを得ず。此等地方につきオーストリアは、時期到来せば、現在の占有及び守備權の状態に代ふるに、併合の状態を以てするの權利を留保す。

(ロ) ヤミオ及びスタタリ湖の間の地方は、東方に於ける充分なる地域を含めて、アルバニヤ公國の名を以て、一獨立國を形成せしむべし。

(ハ) 處分すべき爾餘の土地は、バルカン諸邦の間に衡平的に分配さるべく、オーストリア、ロシアも意見を述ぶるの權利を留保す。兩國は出來得る限り關係國の正當利益を考量するの意向なるも、現在の勢力均衡の主義を擁護し、必要あれば境界の改正に依り、或るバルカン公國の著るしき勢力偏重の勢を致すべき事態を除去するの決心を有す。

(ニ) 兩國政府はバルカン半島に於て設立されたる小國の維持及び其平和的發達以外に何等の目的をも有せざることを記録に止め、兩國は將來此方面に於て完全なる一致の政策を追ふべく、從て軋轢又は猜疑を生ずべき事項を避止すべきを約す。然るに、ゴルショースキの協商記録中に述ぶる所の具體的の問題につきましては、協商が充分明白に行はれざりしもの如く、ゴルショースキの協商の記録をロシヤ外務大臣に示すや、ムラヴィエフは其中に言明されたる主義を是認せるも、ボスニヤ、ヘルツェゴヴィナの併合の問題は影響の及ぶ所廣く、適當なる時期及び場所に於て特別の審議を爲すの必要ありとし、ノヴィバザールの州に關して、其境界を一定するの必要ありとし、アルバニヤ公國の設立及び處分すべき地方のバルカン諸邦間の衡平

的分割に關して、是れ將來の問題に觸れ、今日に於て決定すること時機尙早にして且つ困難なりと爲せり。一八九七年に於て行はれたる此協商は、一九〇八年に至るまで、バルカンに於けるロシヤ、オーストリア間の政策の基底を爲せり。

一八九九年ロシヤ帝の首唱に依り第一回平和會議がヘーグに開かれたるが、ウィットテ之に關して記せる所に依れば、陸軍大臣クロバトキンが、フランス、ドイツ已に大砲の改良を行ひ、ロシヤ、オーストリアも亦之に促されて改良を施さざるを得ざるに至れるも、費用巨額に上るべきを以て、寧ろ兩國間の協定に依り互に新砲の購入を行はざるを約することを以て双方の利益と爲すべき意見をロシヤ帝に奉り、ウィットテは諮詢を受けて、寧ろ總ての國家が其軍備につきて經濟を施すべきを提議するを可なりとし、是に於てロシヤ帝の平和會議開催の發議が行はるに至れりと爲せり。第一回平和會議は一八九九年五月十八日開かれ、ロシヤは五年間兵員の數又は軍事豫算額を増加せざるべきを提議せるも、ドイツの代表者が軍備の縮少又は増加停止を審議することを拒絶して、平和會議の開催に關するロシヤの主要なる目的は達せられずして終れり。

### 第二十九章 フランスとイタリヤ及びイギリスとの接近

一八九八年六月デルカッセがフランスの外務大臣となりてより、イギリス及びイタリヤと協商して、アフリカに於けるフランスの植民地の發展を確むるの策に出でんとせり。ファシヨダ事件の後、一八九九年三月イギリス及びフランスの間にアフリカに於ける兩國の勢力範圍を劃定するの條約を結ぶや、イタリヤの外務大臣ヴィスコンチ、ヴェノスタはフランス政府に對して釋明を求め、一九〇〇年十二月十四日ローマ駐劄のフランス大使バルレールは、フランス及びイタリヤ間に成立せる友誼的關係に鑑み、且つ釋明が一層友誼的關係を進捗すべきを信ずると爲して、一八九九年三月の條約がトリポリ州を條約の認めた



る勢力範囲の以外に置き、而してフランスが陸面の交通を妨ぐるの意思を有せざる旨の聲明をイタリアの外務大臣に與へたり。之に對してイタリアの外務大臣は、モロッコに於けるフランスの行動が其領土の近接に因りて生ずる權利の行使及び保全を目的とするに外ならざるを認め、斯の如き行動は地中海強國としてのイタリアの利益を害すること無しと認め、而してモロッコの政治上又は領土上の地位の變更の場合に於て、イタリアはトリポリに於て自己の勢力を發展するの權利を留保する旨を答へたり。此等の交換されたる公文は秘密に付せられたるも、フランス、イタリアの接近の事實は、一九〇一年の春に於けるイタリア艦隊のツーロン訪問に依り世に公表されたり。斯の如くして、フランス、イタリア兩國の間の約二十年に互る反目的關係は止むに至れり。

一九〇二年三國同盟の更新の際、イタリアは三國同盟内のドイツ及びオーストリアと談判すると同時に、同盟外のフランスとも交渉を行ひ、同年三月イタリアの外務大臣ブリネッチは、ローマ駐劄のフランス大使バルレルに對して、三國同盟條約の本文は之を變更するを得ざるべきも、フランスの杞憂を除くべき保障を與ふるを得べしと述べたり。同年六月四日ブリネッチはパリに電報を送り、三國同盟の更新に關し、フランスに對して直接又は間接に侵略的なるべき何物をも存せずとし、如何なる場合にもイタリアをしてフランスに對する侵略に参加するの義務を負はしむべき約束を存せずとし、又フランスの安全及び平穩を脅かすべき如何なる規定をも存せずと告げたり。フランス政府はイタリア政府の此の通報の要旨を議會に報告し、而してデルカッセはパリ駐劄のイタリア大使に對して、平和的政策の極めて忠誠なる證據を與へられたるに對するフランス政府の深厚なる謝意を表せり。此際ビュローは、睦まじき夫婦の間に於て、妻が他人と無害なる舞踏を爲すも、夫は平然たるを得べきを説けり。

同年六月二十八日三國同盟條約は更新されたるも、以後イタリアは三國同盟内に在りながらフランスと接近せり。ブリネッ

チの上述の原則的宣言行はれて後、フランス、イタリアの間に談判行はれ、其結果として十一月一日ブリネッチとバルレルとの間に公文交換行はれ、双方の國は直接又は間接の侵略の場合のみならず、他方が直接の挑發を受けたる結果として、其名譽又は安全を防護する爲に進で宣戰を行はざるを得ざる場合に於ても、中立を維持することを計るべしとし、其事の起る場合に於て、双方の國は其意思を豫め他方に通報して、直接の挑發の存するや否やを判定するを得せしむべしとし、双方の國は此宣言と抵觸する軍事上の義務を現に負ふことなく、又向後も之を約定すること無かるべきを互に相聲明せり。該協定は之を秘密に付するものとせり。然れども一九〇四年に至りフランス大統領ルーベは、イタリア王ヴィクトル、エマヌエル三世を訪問し、兩國の接近が顯著なる事實となれり。

デルカッセはイスパニヤの接近を求め、一九〇二年十一月十日兩國の間にモロッコに於ける勢力範囲につき協定せる所ありしも、イスパニヤに於て内閣更迭ありて、後の内閣はイギリスを憚りて條約の調印を爲すを肯せず。デルカッセは益々イギリスとの接近を求むるの必要を認めたり。

イギリスはドイツに接近するの試圖に成功せざるより、フランスとの接近を求むるに至り、而してイタリアとフランスとの接近はイギリスとフランスとの接近の前驅となり、一九〇一年一月エドワード七世が即位するに及び、フランスとの接近が益々促進されたり。イギリスは當時エジプトの施設につきフランスの妨害を去るの必要を感じ、フランスとの接近を求めたり。フランスは已にチュニス及びガムビヤを占領せるを以て、モロッコの地を得て其西アフリカの領地を整理せんと欲す。且つナイル上流地方に於ける其試圖が不成功に移り、ファシヨダを撤退するの止むを得ざるに至れるより、他の方面に於て之に代るべき土地を求むるに至れり。一九〇一年七月フランスはモロッコと條約を結び、境界に於ける警察に關して協同的處置を執るを認めしめたり。其後更に約して、境界に於ける秩序維持の爲め、モロッコの軍隊を教練すべき教書をフランスより送るべ



きを定めたり。デルカッセはフランスがエジプトに於けるイギリスの施設に妨害を加へざるを約して、イギリスをしてモロッコに於けるフランスの行動の自由を認めしめんと欲す。

イギリス及びフランスの衝突の原因は、エジプト及びモロッコに限るに非ずして、ニューファオンドランド、ザンジバル、マダガスカル、シャム、ニューヘブリディス等につきて猶存せり。然れどもイギリスは已に實際に於てエジプト、スーダン及びナイジャー地方に於て其意を逞ふし、フランスもアルジェリヤ、チュニス及びコンゴ地方に於て其意を逞ふし、舊時の兩國間の係争問題の重要なものは、大體に於て事實上の解決に就き、残存する衝突原因は、モロッコ及びエジプトの問題を除きては、比較的に輕微のものなるを以て、兩國は大體に於て既成事實を承認するの基礎に依り相接近するを得べきに至れり。フランスが國勢擴張の計畫を地中海の西岸に局限して、イギリス及びイタリアに接近するを求むるに至れるより、フランスとイギリスとの接近は可能となれり。當時イギリスも漸くドイツの商業上及び海權上の競争の壓迫を感ずるに至り、孤立の終に達ぐべからずして、ドイツとの接近の成立し得ざるべきを知り、フランスと接近するを求むるに至れり。

一九〇三年五月エドワード七世バリーを訪問し、イギリス、フランス兩國接近の端緒を開き、七月フランス大統領ルーベがロンドンを訪問せり。同年十月兩國間の法律的紛議、就中條約の解釋に關する紛議にして、外交手段に依り處理し得ざるものは、兩國間の重大利害又は名譽に關せざる限り、常設仲裁裁判所の決定に付すべきを定むる條約が兩國間に結ばれ、兩國の接近を象徴するに至れり。ルーベのロンドン訪問の頃より兩國間に談判行はれ、八箇月に及びたるに、會、我國とロシアとの間に戦争起り、フランスはロシアとの同盟關係に因り戦争の渦中に投せらるるを恐れ、イギリスは我國との同盟關係に因り、フランスが戦争に加はらば我國を助けて戦争に加はらざるを得ざるに至るべきを以て、イギリス、フランスの兩國が相接近し、相助けて中立を守り、共に戦争の渦中に引き入れらるるを防ぐの必要を認めたるもの如く、兩國の接近の談判は是が爲めに促進せられ、一九〇四年四月八日兩國間に協定成るに至れり。

一九〇四年のイギリス、フランス間の協定は、一條約、二宣言より成れり。其中最も重要なものはエジプト及びモロッコに關する宣言にして兩國はエジプト及びモロッコに於ける政治上の現状維持につき相互的に約束すると同時に、フランスはエジプトに於てイギリスの占領に對して期限を定むることを要求せざるべく、又イギリスの施設に反對せざるべきを約し、又イギリスはモロッコに於てフランスが該國の安寧を監視し、其要する行政上、經濟上、財政上及び軍事上の改革を補助するを認め、フランスの行動を妨害せざるべきを約せり。フランスは又ジブラルタルの對岸なるムールーイア及びセブール兩河間のモロッコの海岸に沿ふて要塞其他の防禦工事を設けざるを約し、以てジブラルタルに關するイギリスの利益を認めたり。而してエジプト及びモロッコに於ける通商上の自由を約し、又スエズ運河の自由航行につき約する所あり。上述の宣言に附屬する秘密條款に於て、兩國が事態に依り止むを得ずエジプト又はモロッコに關する政策を變更せざるを得ざる場合に於ても、宣言中に約せる通商上の自由、スエズ運河の自由航行及びモロッコに於けるジブラルタル對岸の防禦工事の禁止等に關する宣言の條款は變更を受けざるべきを定め、又兩國のエジプト又はモロッコの立法制度を他の文明諸國に於て行はるものと同様なものと爲すの目的を以て改革を加ふることを望ましと考ふるときは、互に是の如き提議を支持すべきを約す。又同宣言に附屬する秘密條款に於て、メリラ、セウタ及び其他のイスパニヤ領に近接せる地方をイスパニヤの利益範圍として認め、是等の土地がモロッコの「サルタン」の統治を離るるときは、其行政をイスパニヤに委ぬべきを協定せり。而して二國は宣言の條款を實行する爲めに相互的に外交上の援助を與ふることを約せり。宣言に附屬する「ケデーヴ」の命令に依りエジプト公債に關する規則を定め、エジプト政府に對して支出に關する一層の自由を認めたり。フランスはエジプトに於ける財政上の自由を認めたる代りに、イギリスをして一八八八年のスエズ運河條約の戦時に於ける完全なる實施を認めしめたり。



一 條約に依り兩國はニューファオンドランドの漁業に關するウトレヒト條約以來の爭議を一掃し、此點に於けるフランスの特權拋棄に報ゆる爲め、イギリスは西部アフリカに於てフランスに讓與する所ありたり。又一宣言に依りシャム、マダガスカル及びニューヘブリデイスに關する規定を設けたり。シャムに於て、メナム河流域を以て兩國が共に武裝的干渉を試みず又特殊の取得を求めざるべき中立地域とし、該中立地域及びシヤム灣の西方に在る地方はイギリスの利益範圍たるを認め、該中立地域の東及び東南の方面に在る地方はフランスの利益範圍たるを認めたり。又マダガスカルの關稅制度に對する一八九六年以來のイギリスの抗議を拋棄し、ニューヘブリデイスに於ける土人關係の司法制度の設定の爲め、並にイギリス人とフランス人との間の土地に關する爭議の處理の爲め、混成委員會を設くるを定めたり。一九〇四年のイギリス、フランス間の協商は地方的衝突の原因を除く爲めの許多の規定より成り、一般的に協力又は援助を約するの規定を設くること無きも、之に依り兩國間の反目及び孤疑の状態は一變して、兩國の接近が成るに至れり。

談判の進行中、一九〇四年三月二十三日パリ駐劄のドイツ大使ラドリン公の問に答へてデルカッセはモロッコがイギリス、フランス間に問題となれるを認めたるも、フランスは政治上及び領土上の現状維持を求むると爲し、而してモロッコが存続する爲めには改革の必要ありと説き、前年侵略履行はれ、干渉の正當理由を存せりとし、フランスは軍隊の補充及び増加の爲め莫大の費用を投せりと爲し、「サルタン」がフランスの援助の價值を経験せるが、引續きて之に援助を與へざるべからずと爲し、唯援助は何人も之に依り利益を受くべき様に與へらるべしとし、安全は商業の爲に必要なりとし、商業上の自由の嚴に尊重せらるべきは言ふを待たずと爲せり。協商成れる後四月十八日に於て、デルカッセはベルリン駐劄のフランス大使をして、ドイツ外務省に告げしむるに、イギリスとフランスとの協商が全然協商國の利益に關係し、如何なる他國の利益をも害すること無きことを以てし、條約は昔く世人に知られたるを以て、條約の謄本を呈示するの必要無しと考ふる旨を以てせしめたり。

ビュローは條約が他國に對する尖端を有すると想像するの原因を存せずと爲し、平和的手段に依り許多の紛議を避くるの試圖と見るべしとし、ドイツの利害の上より、之に反對すべき何物をも存せずと爲し、ドイツ人は商業上の利益を有し、之を保護せざるべからざるも、該利益の閉却され又は侵害さるべきを恐るるの理由を存せずと爲せり。

フランスはイギリスとの協商に基きてイスパニヤと談判し、一九〇四年九月兩國間に宣言が結ばれ、イスパニヤはモロッコをして「サルタン」の主權の下に領土保全を維持せしむることに熱心なる旨を宣言せるも、秘密條約に於て、利益範圍の劃定を爲し、分割の漸と爲さんとせり。

一九〇四年の終、フランスはモロッコの「サルタン」に對して改革の一般的計畫を呈示するに決し、十二月十五日デルカッセはフェッヰズに差遣さるる使節タイヤンディエに與ふべき訓令を起草し、第一の緊要事は秩序の回復なりとし、フランスの將校をしてモロッコの警察官の教練に當らしむべしとす。道路、電信も必要にして、國立銀行も有益なりと爲せり。タイヤンディエは一九〇五年二月フェッヰズに着して「サルタン」と改革案につき談判せり。

フランスの使節がフェッヰズに派遣さるるや、ホルスタインはドイツ帝がタンジリアを訪問すべきを提議し、ビュローは之に賛成し、三月三十一日ドイツ帝はタンジリアに上陸し、「サルタン」の代表者に對して、獨立君主の資格に於ける「サルタン」に向て訪問を爲すものとし「サルタン」の主權の下に、自由なるモロッコが獨占無く、併合無く絶對的均等の政策に依り、總ての國民の自由なる競争に對して開放されて存するを望むと爲し、ドイツ帝のモロッコ訪問が、モロッコに於けるドイツの利益を擁護する爲めに其力を盡さんとするのドイツ帝の決心を示すが爲めに行はれたりとし、「サルタン」を以て絶對的に自由なる君主と思惟し、「サルタン」とドイツの利益擁護の手段を審議せんと欲すと爲せり。「サルタン」の考量する改革に至りては、慎重に之を行はざるべからずして、人民の宗教的感情を顧慮せざるべからずとし、然らざれば公共秩序の害せらるるの



虞ありと爲せり。三月二十九日ビュローは帝國議會に於て、ドイツ帝のタンジニア訪問がモロッコの保全又は獨立を害すべき私利的の目的を有せずとし、支那に於ける如くモロッコに於て門戸開放を維持することを以て、ドイツの利益と爲せり。

ドイツはロシアが我國との戦争に依りフランスを助くる能はざるを機としてフランスに對して屈辱を加へ、且つ其のモロッコに於て勢力を占むるを妨げ、以てフランスのドイツを疎外してモロッコ問題を決定せんとせるを懸さんとせるもの如く、且つモロッコ事件に依りイギリス、フランス間の協商の堅脆を試験して、ホルスタイン等の豫想せる如くイギリスが充分なる援助をフランスに與へざるときは、イギリス、フランス間の協商が其萌芽に於て粉碎され得べきを計れるもの如し。然れどもドイツの干渉はイギリス、フランスをして益々相接近せしめたり。ドイツ帝のタンジニア上陸の事ありて後幾も無く、イギリス艦隊の七月に於けるプレスト訪問及びフランス艦隊のボルツマス訪問並にイギリス王の五月に於けるバリ訪問が發表されたり。

### 第三十章 第一モロッコ事件及びアルジェジラス會議

ドイツ帝のタンジニアに於ける示威運動の後に於ても、フランスの使節タイヤンディエはフエッズに於て談判を續けたるが、一九〇五年四月十一日ビュローは回章を發し、諸國駐劄のドイツの使臣をして、モロッコに関する列國會議を開き、一八八〇年のモロッコに於ける各國の保護民の制限に関するマドリッド條約締結國を參列せしむべきの議を唱へしめ、モロッコに関するフランス、イギリス等の條約がドイツ政府に通知されざりしを説かしめ、是等條約が現状維持を認めたるもの如きも、モロッコがフランスの果して諸國の委任を受けたるや否やを問ふに至り、又フランスの計畫の一端が世に知られて、モロッコを處するにチニスの例を以てせんとするを説く者あるに至りたるを以て、默視するを得ざるに至れりとし、會議が最良の解決

方法たるを唱へしむ。五月十三日ドイツの使節がフエッズに着し、同月二十八日「サルタン」はフランスの提議を拒絶せり。而して五月三十日「サルタン」は一八八〇年のマドリッド條約の締結國に向て列國會議開催の招請をなせり。デルカッセはフランスの威嚴を損するの故を以て強く列國會議の開催に反対せるも、六月六日の閣議はデルカッセの議を容れずしてデルカッセは終に辭職するに至れり。同日の閣議の際、デルカッセはイギリスが艦隊を動かし、十萬の兵をシュレスウィッヒ、ホルンタインに上陸せしむるの提議を爲せるを説けるも、首相ルーヴィエは、斯の如き提議を受諾するは戦争を意味するを以て、之を避けざるべからずと爲せり。

デルカッセ辭職するや、首相ルーヴィエが外務大臣を兼ね、ドイツとの協商を求めたるも、ビュローはフランスが先づ列國會議の開催を認むるに非れば其議題につき審議するを得ずと爲す。六月二十一日ルーヴィエは猶會議開催に関する諾否を述べずして、ドイツ大使に向て其態度を説明し、フランスがモロッコの内治外交の支配權を求むるに非ず、又ドイツの商業に関するモロッコの條約上の義務を侵すの意無しとし、豫め協定を行はずして會議を開くは危険にして、又已に協定成れば會議を開くの必要無しとす。然れども斷然會議の開催を拒絶するに至らず。ドイツはフランス政府に對して通牒を送り、フランスがモロッコを支配するの希望を有せずとするも、フランスが單獨に問題の解決に當るときは、勢に制せられて、漸次其希望せずと稱する地位に就かざるを得ざるに至るべしとし、軍隊及び財政に関するフランスの提議はモロッコの主權を害し、他國を利せずして獨りフランスを利するものなりとし、一國が獨り斯の如き特別の地位を占むることは、マドリッド條約の最惠國民待遇を定むるの趣意に矛盾すると爲し、地位の轉回の爲め列國會議の開催の望ましきを説けり。

ドイツ帝はアメリカ合衆國大統領ルーズヴェルトに書翰を送り、ルーズヴェルトがイギリス及びフランスに對して、列國會議を以てモロッコ問題の平和的解決の最良方法と信ずる旨を告ぐることを求め、ルーズヴェルトはフランスに對して會議開催



を承認するを勧め、同時に會議に於てドイツが不正、不當の態度に出づることあらば、必要に應じ強く之に反対すべきを説けり。六月二十三日フランスは列國會議の開催を承認する旨をルーズヴェルトに告ぐるに至り、ルーズヴェルトは更にドイツ帝に對して、其の列國會議の開催に關する勝利を以て満足するを求め、細目に關する問題を提起するの不可なるを説けり。

七月八日ルーヴィエとドイツ大使ラドリンとの間に、フランスが列國會議の開催を認むるの條件を確定せる宣言を交換し、而してドイツ大使はドイツが一九〇四年のイギリス、フランス間の協商を争はざることを公式に宣言せり。上述の條件中に於て「サルタン」の主權及び獨立、モロッコの領土保全、經濟上の均等等の尊重を言明すると同時に、アルジェリヤの境界に依り生じたる地位及び秩序維持に關するフランスの特別利益の承認を言明せり。七月十二日に至りイギリス政府も會議の開催を認めたり。八月一日ルーヴィエは警察及び財政の改革並に公工事に關する改革等の議題をドイツ大使ラドリンに交付し、八月二十六日ラドリンはドイツ政府が議題を承認することを述べたり。九月二十八日ルーヴィエとラドリンとの間に協定が結ばれアルジェリヤ境界を除き、警察の編制は國際的と爲し、國立銀行が警察、軍隊及び公工事等に關する資金を供給すべきものとす、モロッコは特別の國人を利する爲め公事業を許すを得ざるべきものとす、而して公工事の請負につきては、國籍を差別することなく、競争を以て之を決すべきものとす。而して會議をアルジェリヤに開くことと爲せり。

十二月二十六日ルーヴィエは「サルタン」が議題及び會議の開催地を承認せるを代議院に報告し、フランスの境界に關する權利がドイツに依り認められ、列國會議の議題の外に置かれたるを説き、アルジェリヤ會議の有望なるを説けり。ルーヴィエは十一月及び十二月に於て、ドイツに特別の利益を與へて之と協定せんと試みたるも、ドイツは兩度ともフランスの提議に應ぜざりしもの如し。ビュローは十二月中帝國議會に於て、其のモロッコに關する政策を以て、獨立國家に於ける經濟的均等の維持に在りとし、ドイツはイギリス、フランス間の條約とドイツの利益との間の調和が行はれべきを信じて溫和の言

を用ひたりしも彼等の計畫を實行するに先ちてドイツに交渉することなく、フランスがドイツに無断にて使節をフュッスに派して、其改革案を實行せんとし、モロッコを以て第二のチュニスたらしめんとするに及び、是の如き措置がドイツの一八八〇年の條約の最惠國民條款に關する權利を侵し、ドイツの經濟上の利益を脅かすを以て、ドイツ帝のタンジリア訪問を計畫し、問題の國際的性質を有することを廣く世人に知らしむるを得たりと爲す。

十二月四日バルフォア辭職してカムベル、バンナーマンが自由黨内閣を組織し、依然フランスとの協商の政策を維持することと言明すると同時に、ドイツに關しても、イギリス、ドイツ兩國の人民の利害の上に於て乖離の原因を存せずと爲せり。ロンドン駐劄のフランス大使は、一九〇六年一月十日外務大臣グレーに對して、フランス政府が危險の實在を信するを説き、フランスの挑發すること無くして攻撃を受くる場合に於て、イギリスがフランスの抵抗に對して助力を與ふる程度の痛痒を感じるものと思惟するや否やに關するイギリス政府の意向を尋ね、若しイギリスの助力することがあり得べしとせば、フランスの北部に於ける共同動作の形式に關して兩國の參謀幹部の間に協議を遂げ置くことが望ましきを説けり。グレーは、イギリスに於ては、現實の場合に臨みて、輿論の熱心なる支持を受くることあるに非れば何事をも行ひ得ざるを以て、豫め何事をも約束するを得ずと爲せり。グレー自身は、若しモロッコ問題の爲めフランスが戰爭を強ひられたる場合には、イギリスの輿論がフランスの實力的援助に歸向すべしと思惟するを説けり。フランス政府は、イギリス政府が豫め兵力的援助を約するを得ずとするも、事變の突發せる際、イギリスの輿論がフランスに對して兵力的援助を與ふるを是認することあり得べしとせば、豫め海陸軍の専門家の間に協議を行ひ置くを可なりとし、然らざるときは、假令事變突發の際に臨みて援助を與へんと欲するも、之を與ふることを實行し得ざるべきを説き、グレーも其言を是認して、重なる關係の意見を聽きて後、自己の責任を以て、兩國の海陸軍の専門家の間に談判の行進るるを認めたり。但し海陸軍専門家の間に協議されたる事項は、双方の政府を拘束する



こと無く如何なる方法に於ても、現實の場合に臨みて援助を與ふべきや否やを決定するの自由を制限すること無きものとす。軍事的協議は一九〇六年一月十七日に開始し、其後屢休止し、一九一四年に及べり。ブリュッセルに於てもイギリスは略同時に軍事的協議を開始せり。

アルジェジラス會議は一九〇六年一月十六日開會され、マドリット條約の締約國が之に参加せり。「サルタン」の主權、モロッコの領土保全並にモロッコに於ける商業上の自由等の原則は、一般に認められたるを以て會議の議題となること無く、二月初モロッコの警察及び國立銀行が會議の問題となりしが、フランスは初には單獨に、後にはイスパニヤと共に、警察に關する列國の委任を受くるを主張せり。ドイツはフランスの主張に反對し、「サルタン」が小國人より將校を選びべきを提議し、後に之を改めて「サルタン」が外國人より將校を選びべきを主張せり。フランス及びイスパニヤは共にドイツの主張に反對し、而して國立銀行に關する議事も行き詰るに至り、會議の破裂を恐れしめたり。ルーズヴェルトは警察に關して委任をフランス及びイスパニヤに與ふるの議を支持し、而してドイツに於てもビュローはホルスタインの強硬政策の戰爭の開始を致すべきを思ふに至り、オーストリアはフランスが八開港中の四港の警察の編制に當り、イスパニヤが其三港の警察の編制に當りスキス又はオランダが其一港の警察の編制に當るの議を出すに至りしが、ルーズヴェルトはモロッコ分割の漸と爲して之に賛成せず。三月の末に至り、オーストリアの第二の提案が容れられて、フランス、イスパニヤが委任を受け、スキス人の總監を置くこととなれり。是に於て難問題は決定し、四月七日アルジェジラス會議の決議書が調印された。八開港の警察の教官として、フランス及びイスパニヤの將校下士を配置し、スキス人の總監はタンジニアに駐在することとす。又兌換券を發行すべきモロッコ國立銀行につきて、會議の決議書の署名國が各均等の額に至るまで出資するを得べきものとす。モロッコ政府の任命すべき總裁及び取締役以外に、イギリス、ドイツ、フランス、イスパニヤの銀行の指名すべき四名の監査役を置きて、アルジェジラ

ス會議決議書の實行を監視することとす。

アルジェジラス會議に於てフランスはロシア、イギリス、イスパニヤの援助を受け、アメリカ合衆國もフランスを助ふるに傾き、イタリヤはモロッコに關して已にフランスと約する所あるを以て之に反對するを得ず、オーストリアも亦フランスと争ふを欲せず。ドイツは會議に於てイギリスとフランスとを離間せんと欲せるも、其目的を達せず。會議に於てドイツはモロッコ問題の國際的性質を認めしむるを得たるも、フランスはイスパニヤと共に警察に關する委任を受くるを得たり。ドイツはモロッコ問題の決定につき全く度外視せられんとすることを以て自己の威嚴の問題となし、又モロッコの全くフランスの勢力の下に立つに至るを妨げんと欲せるのみならず、イギリス、フランス間の協商に對して打撃を與へんと欲せるもの如きも、實にイギリスをフランスより割くを得ざりしに止まらずして、却て兩國の關係を緊密ならしめ、又イギリスとロシアとの接近を促すに至れり。アルジェジラス會議の際、イギリスの代表者たるニコルソンは、ロシアの代表者たるカッシニ伯と協同して行動し、兩國の協商に關して暗結を開けり。アルジェジラス會議の際ドイツは三國同盟内のイタリヤの援助を受くる能はずして、オーストリア以外に援助を與ふるの國無く、殆ど孤立の地位に立つに至りしが、會議終りて後、ドイツ帝はオーストリアの外務大臣ゴルシースキに對して、決闘場に於ける伎倆ある介添人の役目を果せるを謝せり。

### 第三十一章 イギリスとロシアとの協商

イギリス、ロシアの間に於て、東亞、中央アジヤ並に黒海及び地中海東部に於て利害の衝突を存し、クリミア戰役の際相戦ひ、ペルリン會議に於て相争へるが、イギリスは又中央アジヤに於てロシアの南侵に備へんとし、曾てアフガニスタンの境界



上の事件につき争へることあり。ペルシヤに於てもイギリスはロシアの南下の勢を阻止せんとし、殊にペルシヤ灣に於ける十九世紀初葉以來の特別地位を維持することを以て、インドの安全及び帝國の威信の爲に重要なりとせり。一九〇三年五月十五日外務大臣ランズダウンはペルシヤ灣に於けるイギリスの通商を保護し、之を發達せしめざるべからずとし、他國人の正當なる通商を排除せざるべきを認めたるも、他國がペルシヤ灣に於て海軍基地又は要塞港を作ることをして、イギリスの利益に對する重大なる脅威と認め、其の左右し得べき手段を盡して之に抵抗せざるべからずと爲せり。同年十一月インド總督カーゾンがペルシヤ灣に於て海軍の示威運動を行へり。チベットにつきては、ロシアが勢力を之に及ぼすに至らんことを恐れ、且つチベット官憲のインドとの交通を避くるを見て、一九〇三年一月十八日インド政府よりラッサに遠征隊を送るの議を發せり。日露戰役の開始後、ヤングハスバンドの使節一行は、一九〇四年八月三日ラッサに進み、「ダライ、ラマ」は國を逃れたり。九月七日に至り、チベットはイギリスと條約を結び、イギリス政府の豫め承認すること無くして、チベットの土地の如何なる部分をも、他國に讓與し、賣買し、貸與し、又は抵當とし、其他他國をして占領を行ふに至らしむること無かるべきを約せしめ、他國のチベットの内治に干渉するを許さざるを約せしめ、又他國の代表者又は使節の入國を許さざるを約せしめ、又鐵道、道路、電信、鑛山及び其他の權利は、同様なる權利がイギリスにも許與さるるに非れば、他國に許與せざるべきを約せしめたり。是れロシアの勢力の浸潤を防がんとするものなり。而して償金を七十五箇年間に支拂ひ、其間イギリスはチャンビ谿谷を占領するを得べしと爲す。イギリス政府は其の三箇年間に拂ひ得べき償金額を定むべしと爲せる訓令に違反し、且つチャンビ谿谷の長きに亘る占領が、イギリスのロシアに對して、長期の占領を行はざるべきを公言せるに反するの故を以て、條約中の償金に關する條款を否認せり。一九〇五年五月十一日バルフォアは、ロシアがアフガニスタンに向て侵勢を示せるを説き、戰略的鐵道の敷設の行はるるを述べたり。而してロシアの戰略的鐵道と連絡する爲め、アフガニスタンに於て鐵道を敷設する

如き企圖は、インドに對する最大の打撃にして、直接なる侵略的行爲と認めざるべからずと爲せり。

イギリスとロシアとの間の支那ペルシヤ、チベット、アフガニスタンに於ける軋轢は已に兩國の關係を惡しくせるが、日露戰役起るに及びイギリス、ロシアの關係の險惡なるを致せり。ロシア、フランス間の同盟の行動區域は極東に及ばざるを以てフランスは日露戰役に加はるの義務無しと雖も、フランスがロシアに對して好意的中立の態度を維持するに當りて、戰爭の渦中に立つに至るの危險を存せり。日露戰役の起るに當り、イギリス及びフランスは互に相助けて戰爭の渦中に引入れらるるを防がんとするより、兩交戰國の同盟國たるイギリスとフランスとは、却て接近を求むるに急にして、是等兩國の間に進行中なりし協商の談判は促進せられたり。一九〇四年四月八日イギリス、フランス間の協商成りしが、同年七月黒海に在る義勇艦隊所屬のスマーレンスク號及びベルルスブルグ號の二船が商船旗を掲げて海峡を通過し、紅海に於て軍艦として行動し、イギリス及びドイツの商船を停船し、且つ拿捕を行へるより、イギリスは強く抗議し、ロシアは義勇艦隊に屬せる船舶の公海に於て軍艦となれるものが向後捕獲權を行はざるべきを認め、且つ其の已に拿捕せる船舶を解放することと爲せり。

バルチック艦隊の東航の途次之に屬するカムチャッカ號がイギリスのハル近海のドッガー、バンクに於て、漁船を我海軍の水雷艇と誤認し、之に砲撃を加へ、死傷を生ぜしめたるより、イギリスに於て輿論沸騰せるが、デルカッセは兩國の間に立ちて調停を爲し、兩國政府が事實の審査を國際審査委員會の審査に附し、有罪者を處罰し、不當の損害を賠償すべきを協定するに至りて、危機始めて去るを得たり。十一月二十五日兩國間の條約結ばれ、十二月二十二日國際審査委員會開會し、翌年二月二十五日閉會せり。國際審査委員會の報告に於て、ロシア側の主張の維持し得ざるを認め、漁船は敵對行爲を行はざるものとし、日本の水雷艇は附近に在らざりしを以て、ロシアの軍艦が誤解を爲せるものとし、發砲を以て不正と爲せり。然れども酌量すべき情狀あるを認めたり。



ロシア帝は内心に於て、ドッガー、バンク事件につきイギリスに對して憤る所あり。ドイツ帝はロシア帝に對して、ロシアが勝たざるべからずして、又實際勝つべきものと爲し、朝鮮はロシアの手に歸せざるべからずして、又實際其の手に歸すべきものと爲せり。ドイツがロシアに對して同情を表せるを以て、ロシアはポーランド境界地方の軍隊を撤して東亞に退るを得るに至れり。オーストリアも亦ロシアに對して其兩境を防禦するの必要なきを説き、ロシアは之に對して、イタリアがオーストリアを襲ふ場合に於て中立を守るべきを約せり。八月十五日ランズダウンは、ドイツ大使に對して、若し中立違反の爲に我國がドイツと戦ふに至るときは、イギリスは我國との同盟條約に於ける應援義務發生條件に該當するを認めて、我國に應援すべきを警告せり。十月二十七日ドイツ帝はロシア帝に對して電報を送り、イギリスの新聞紙がドイツのバルチック艦隊に石炭を供給することの許すべからざるを説けるに依りて察すれば、日本政府及びイギリス政府がドイツのロシア軍艦に石炭を供給することにつき聯合的の抗議を爲すことあり得べしとし、是の如き戦争の脅威の結果として、ロシア艦隊が燃料の缺乏の爲めに進航するを得ざるに至るべしとし、此の新來の危險に對し、ロシアとドイツとは相提携して之に當らざるべからずとし、又ロシアの同盟國たるフランスをして其義務を想起せしめざるべからずとし、大陸三強國の結合が是の如くにして成らば、アングロ、サクソン集團が之に攻撃を加へんとするに先ち再思するに至るべしと爲せり。而してロシア帝が行動する前に新艦の注文を爲すを忘るべからずとし、其の媾和談判の際に於てロシアをして地歩を占むるを得せしめ、有益なるべきを説き、而してドイツの商社が注文を受くるを望むべきを説き、最後に於て北海のドッガー、バンク事件につきて遺憾の意を表せり。之に對する十二月二十九日のロシア帝の返答に於て、北海事件に關するイギリスの行動に對し、ロシア帝の抱く憤怒の情を表するに足るべき言辭を存せずとし、ロシア帝はドイツの汽船がロシアの軍艦に給炭することに關するイギリスの行動に對し、ドイツ帝の唱ふる不平に全然同意なりとし、イギリスは中立維持の規則を自己流儀に解するものと爲し、今や是の如き事の行はるるを止

めしむべき時期なりとし、之を成就するの唯一の道は、ドイツ帝の説く所の如く、ドイツ、ロシア及びフランスが、イギリス及び日本の驕慢無禮を止めしむる爲めに、直ちに協定を結ぶに在りとし、ドイツ帝の條約の要領を立案して、之をロシア帝に示すべきを求めたり。而して、ドイツ、ロシアが協定に一致するときはフランスは其同盟國と行動を共にするの義務ありと爲し、三國の聯合は世界に平和及び安息を與ふべしとす。ドイツ帝は直ちに條約案を起草して之をロシア帝に送れり。ドイツ帝の送れる條約案は左の如きものなり。

ロシア帝及びドイツ帝は戦争の限局を目的として、防禦的の同盟の次の條款を協定せり。

(第一條) 若し兩同盟國中の一國がヨーロッパの一強國に依り攻撃されるときは、他の同盟國は援助を與ふべく、必要の場合には兩同盟國は協同して、フランスに對して、ロシア、フランス間の條約に基く其の義務を想起せしむる爲めに行動すべし。

(第二條) 單獨に敵と媾和を行ふことを得ず。

(第三條) 援助の約束は交戦國に對する石炭供給の如き行爲に對し、戦争終了後中立規則の違反として第三國より責任問題を提起されたる場合にも及ぶものとす。

ドイツ帝は該案に關し説明して、恰も相互火災保險の如きものなりとし、ヨーロッパの侵略國に對する全然防禦的なる同盟條約なりとす。ヨーロッパの侵略國に對するに限れるの理由につき説明して、アメリカをして該條約に依り脅威を感じしめざるを要するが爲めなりとす。而してドイツ帝はフランスがイギリスに傾けるが爲め、イギリスは自信を得て他を凌ぐに至ると爲し、フランスをしてロシアとイギリスとの孰れかを撰むことを明言せざるを得ざらしむるを可なりとし、ロシアとドイツとが相提携するときは、フランスは公然二國の同盟に加はらざるを得ざるべしと爲す。而して是の如きに至らば中立違反の苦情も自ら止むべく、平和の維持も可能となるべく、而してロシアは自由に日本を處分するを得べしと爲す。而してフランスと歐



判するは北海事件の落着を待たざるべからずと爲す。

ロシア帝はドイツ帝の送れる條約案に附記するに、ロシアの我國との戦争の結果として期待する勝利の獲物を擁護するの義務をドイツに負はしむる趣意の一條款を以てして、條約案をドイツ帝に返却せり。ドイツ帝は是の如き條款を附加するときは人をして兩國が防禦的同盟を結ぶに非ずして、土地併合の目的の爲めの特許會社の一種を作らんとするを疑はしめ、ドイツの利益の爲めの秘密條款の存するを疑はしむるに至るべしと爲し、單にロシアの勝利の結果を奪ふべきの提議を支持せざるの約束と爲すを可なりとせり。而して修正案にしてロシア帝の容るる所とならば、ドイツ帝は直ちに之に署名すべしと爲す。而して同書翰中に於て、ロシアがベルシヤ、アフガニスタンの境上に於て軍事上の示威を行ふことを勸め、ベルシヤよりインド境上に壓迫を加ふることは、ロンドンの狂熱的なる主戰論者に対する清涼劑たるべしとし、北海事件に於てイギリス艦隊が動かざりしは、ロシアがトルケスタンよりインドに入り、又はベルシヤよりアフガニスタンに入るを恐れたるが爲めなりと爲せり。十一月二十三日ロシア帝は修正案の受領を認むると同時に、調印前にフランスをして之を閱覽せしむるを可とすべき旨を打電せり。然るにドイツ帝は調印前にフランスをして之を知らしむるは危険なりとし、ロシア、ドイツが條約上に於て相互的援助の義務を有することを絶對的事實として知るに及びて、始めてフランスをして其地位の危きに瀕するを恐るるに因り、平和維持をイギリスに迫るに至らしむるを得べしとし、フランスにして、ロシア、ドイツ間の條約が猶草案に過ぎざるを知らば、フランスは直ちに之をイギリスに報道すべく、其結果として、イギリス及び日本はヨーロッパ及びアジアに於てドイツに對して直ちに攻撃を加ふるに至るべしとし、豫めフランスに告ぐるは災禍を誘致すべしとし、之を爲すよりは寧ろ全然條約を結ばざるを以て安全なりと爲す。

十二月三日ドイツ船がロシア艦隊に供給するものと認められて、カーディフに於て石炭の積込を爲すを禁止するや、ドイツ帝は直ちにロシア帝と談判を始め、十二月七日の書翰に於て、イギリス政府が厳正中立維持の義務を口實として、ドイツ船のイギリス港を出づるを禁じたりとし、是に至りドイツの執るべき態度を決せざるを得ずとし、ドイツ帝は、イギリス及び日本がロシア艦隊に石炭を供給せるの故を以てドイツに對して戦争を宣言する場合に於て、ドイツ帝がロシア帝の援助を期待し得ざるや否やに關して、確たる擔保を求むると爲し、ロシア帝にして是の如き戦争の際協同して戦ふの擔保を與ふるを得ざることは、ドイツ帝は直ちにドイツ船のロシア艦隊に石炭の供給を爲すを禁ぜざるを得ずと爲せり。十二月十一日に至りロシア、ドイツの間に協約成りロシアはドイツを援助すべきを約し、ドイツは艦隊に石炭を供給すべきを約せるもの如し。然れども兩國間の一般的政治條約締結の企圖は一時中止するに至れり。

一九〇五年七月十九日、バルチック海を巡航してスウェーデンの一港に在りたるドイツ帝は、ロシア帝に電報を送り、ロシア帝にして會見に意あらば、之を行ふべきを告げ、ロシア帝はブエルコーに會するを提議し、七月二十三日兩帝相會合し、此際イギリスがバルチック海に於て攻撃を加ふる場合には、戦争中デンマークを占領して利益保全を計るべきを兩帝の間に約せるもの如し。而してドイツ帝はロシア、ドイツ間の同盟條約に關する條約案をロシア帝に呈示し、七月二十四日遂にロシア帝をしてホーエンツォルレルン號上に於て之に署名せしめたり。該條約案にはチルスキー及びピリレフをして副署せしめたり。該條約の要領は左の如し。

(第一條) 若し或るヨーロッパ國にして二國の一を攻撃することあらば、他の一國は全力を盡して援助を行ふべし。

(第二條) 單獨に敵と講和を行ふことを得ず。

(第三條) 本條約は日本との講和の締結の時期以後に於て有效なるべく、而して一箇年の警告を以て解除を行ひ得べきものとす。



(第四條) ロシヤは本條約の條項をフランスに通知すべく、フランスを招きて、同盟國として之に調印せしむべし。

ドイツ帝は其後ロシヤ帝に宛てたる通信中に於て、兩帝の條約に署名せる七月二十四日を以て、ヨーロッパの政治に於ける礎と爲し、世界の歴史に於て新時期を劃すると爲す。ドイツ帝は、ドイツの指導の下にヨーロッパ大陸諸國を糾合して、イギリスに當らんとするのドイツ帝の宿望の、殆ど成れるを思へるが如し。

ウィットテがポルツマスより歸り、ロミンテンに於てドイツ帝と會せる際、ドイツ帝はブエルコーに於て防禦的同盟が締結され、フランスの加盟を求めんとするを告げたり。九月二十六日ドイツ帝はロシヤ帝に向て、大陸的聯合がアメリカに依り側面を擁護せらるるときに於て、始めて全世界が「ジョン、ブル」の財産となるを妨げ得べしと説き、ポルツマスの講和條約が已に成れる以上は、外國に在るドイツ及びロシヤの使臣に訓令して、一般的政策に關する總ての問題につき協同的行動を執るべきを命ずるを可とすと爲せり。

ドイツ帝は露佛同盟及び三國同盟を其權力の下に糾合することを夢想せるものの如きも、日露戦役の終了の後、ロシヤ帝がブエルコー條約締結の事實をラムズドルフに告ぐるや、ラムズドルフは該條約を以て露佛同盟と兩立し得ずと爲し、ウィットテの歸國後、ウィットテをして該條約の廢棄せざるべからざるを認めしめたり。ロシヤ帝が條約實施の困難をドイツ帝に告ぐるや、九月二十九日ドイツ帝は、露佛同盟が直接にドイツを標的とするものに非ざる以上は、ブエルコー條約の實施が之と低觸すること無きを説き、又フランスに對するロシヤの義務は、フランスが其行動に依り受くるを償する以上に及ばざるべきものとし、日露戦役中フランスがロシヤの窮地に在るを救ふを思はざりしこと歴々たりとし、之に反してドイツは、中立法規の違反に至らざる限りに於て、種々ロシヤを援助せりとし、フランスをして加盟せしむる爲には、時日、努力及び忍耐の三者を要するを認めたるも、モロッコ事件が已に落着せるを以て、協商を致し得べきの機備はれりとし、神明の前に互に手を執りて署名

せる所にして、條約の成立を信ずると爲せり。ウィットテは、條約が外務大臣の副署を経ざるの故を以て、其の拘束力を有することを認め得ざるをドイツ政府に告げたり。ウィットテが十月二十日首相に任せらるるや、ロシヤ帝に勸めて、普通的外交手續を履みて、該條約に關する書翰をドイツ帝に送らしめ、ベルリン駐割のロシヤ大使をして、フランスの加盟が其當時不可能にして、條約が露佛同盟と兩立し得ざるの故を以て、ロシヤ、ドイツ、フランスの一致し得べき時期に至るまでは、該條約が實施し得ざるを説かしめたり。十一月二十八日に於て、ドイツ帝は猶、露佛同盟條約が防禦的條約たるものとせばブエルコー條約は之と矛盾し得ざるを説けり。アルジェラス會議のロシヤの代表者に對するラムズドルフの訓令が發表さるるに及び、ドイツ帝は、ロシヤ帝が已にドイツ帝の勢力を脱し、ブエルコー條約の故紙に等しきを悟るに至れり。ドイツ帝がロシヤ帝を操りて署名せしめたるブエルコーの條約は、却てロシヤの政策の轉回するの機會を作れり。

ブエルコー條約を否認せる後幾も無く、ロシヤ帝はイギリス大使ハーディングとロシヤ、イギリス間の種々の問題につき審議を爲せり。アルジェラス會議の際、イギリスの代表者とロシヤの代表者との間に、二國の協商に關して談話が交へられたり。トルコがタバを占領し、イギリスのエジプト占領に關して争を挑むや、トルコ駐割のロシヤ大使は、ロシヤ政府がイギリスの主張を支持することをトルコ政府に告げたり。一九〇五年十月ウィットテが首相となるや、直ちに外國債の談判を始め、翌年四月上旬に至りパリに於て公債に關する契約が調印されしが、ドイツはブエルコー條約の否認を恚りて公債につきロシヤを助くるを欲せざりしも、イギリス人はクリミア戦役以來始めてロシヤの公債に關係するに至れり。イズヴォルスキが外務大臣となるや益イギリスに近く政策を執り、ベルシヤに關する在來の政策を改めて、イギリスと勢力範圍を分つことを認むるに至れり。イズヴォルスキは他方に於てドイツのバグダッド鐵道に對する在來の反對の態度を改めて、バグダッド鐵道の敷設を認むると同時に、之に對する代償を求めんとするに至れり。ドイツとロシヤとの間のバグダッド鐵道に關する談判は一九一〇



年に至りて始めて終了せるが、之と並行して行はれたるイギリス、ロシア間の談判は之よりも早く終了せり。イギリスは已に近東に於てロシアに對してトルコを擁護するの在來の政策を抛ちしが、東亞に於ても、日英同盟成り、且つロシアが日露戦役に於て我國の爲に破られたるより、イギリスはロシアに對する警戒の念を解くを得たり。一九〇七年八月三十一日イズヴォルスキとニコルソンとの間にベトログラードに於て條約が結ばれ、イギリス、ロシア間の協商成るに至れり。一九〇七年の協商は、一九〇四年の協商に比して其範圍制限されたるも、久しく相反目せるイギリス、ロシアの間に於て疾視の原因を除き、兩國の接近を促がすを得たり。

イギリス、ロシア間の協商につき最も重要視すべきは、ベルシヤに關する協約に在り。諸協約の重要な點は左の如し。

(第一) イギリスはカスリ、シリムよりイスバハン及びイエズドを経て、ロシアとアフガニスタンとの間の境界線がベルシヤの境界線と相會する點に於て終る所の線以外の地方に於て、政治上及び商業上の性質の如何なる讓許をも求めざるべく、又是等地方に於てロシア政府に依り支持さるる同様なる讓許の要求に反對せざるべきを約す。

(第二) ロシヤはアフガニスタンの境界より、ガズイック、ビルジャンド、ケルマンを經由し、バンダル、アッバスに於て終る線以外の地方に於て政治上及び商業上の性質の如何なる讓許をも求めざるべく、又是等地方に於てインド政府に依り支持さるる同様なる讓許の要求に反對せざるべきを約す。

(第三) ロシヤ及びイギリスは豫め協定すること無くして、第一條及び第二條に擧げたる線の中に當る地方に於て、イギリス又はロシアの臣民に與へらるる讓許に反對せざるべきを約す。

此協約に依りベルシヤの北部及び東南部は、ロシア及びイギリスの勢力範圍として兩國の間に定めらるるに至り、而してロシアの反對ありしに拘はらず、其中間地方に於て兩國が均等の機會を有するを認められたり。而してグレーよりニコルソンに

宛てたる八月二十九日の書翰中に、ロシア政府がベルシヤに關する協定の談判中に於て、イギリスのベルシヤ灣に於ける特別利益を否認せざる旨の言明を爲せるを説けり。

アフガニスタンに關する協約に依り、イギリスは該國の政治上の状態を變更するの意思なきを宣言し、又平和的に於てのみアフガニスタンに對して其勢力を行ふべきを約し、而してロシアを脅かすべき如何なる措置をも、アフガニスタンに於て自ら執ること無かるべく、又アフガニスタンに對して是の如き措置を執らしむること無かるべしとす。而してロシアはアフガニスタンを其勢力の範圍以外と認め、ロシアとアフガニスタンとの間の政治的交渉は總てイギリス政府を經由して行はるべきものとす。アフガニスタンに關する協定は、アフガニスタン王の同意を須ちて實施さるべきことと爲せり。然るに該王の同意を得る能はざりし爲め、該協定は效力を生ぜずして止めり。チベットに關する第三の協約に依り、兩國はチベットの領土保全を尊重するを約し、且つ其内政に關する干渉は一切之を行はざるべきを約せり。

イギリス、ロシア間の協商に依り、兩國間は其間の地方的衝突の原因を除去せるのみならず、政治上に於て兩國の關係を一新し、種々の方面に於て互に外交上の協力を行ふに至れり。ロシアはフランスとの同盟に加ふるに、イギリスとの接近を以てして、戦敗の餘、猶裕に強國の地位を維持せり。イギリスは已にフランスと接近せるが、ドイツの方面より來るべき危険に對してロシアの支持を必要とせり。ロシア、イギリス間の協商は、ロシア、フランス間の同盟及びイギリス、フランス間の協商と共に、三國同盟に對立する三國協商を生ぜしめたり。ピュローは三國協商に關するドイツ人の疑懼を散ずるに努め、ドイツ人の自ら主張する行動の自由を他國人にも認めざるべからざるを説けるも、ドイツ人中、イギリス、ロシアの協商を以て、イギリス、フランスの協商に比して、一層ドイツに對する打撃なりと爲す者多く、イギリスの包圍政策を非難するの聲がドイツ人の間に漸く高きに至れり。



ロシア、イギリスの協商成れる後、一九〇七年六月十日我國とフランスとの間に協約結ばれ、支那の獨立及び領土保全の主義に支那に於ける諸國民の均等待遇の主義の尊重を言明し、且つ兩締約國が主權、保護權又は占有權を有する領域に近邊せる支那帝國の諸地方に於て秩序及び平和事態の確保せらるるを特に顧念し、兩締約國のアジア大陸に於ける相互の地位並に領土權を保持せんが爲め、前記諸地方に於ける平和及び安寧を確保する目的につき互に相支持すべきを約せり。同年七月三十日に於て、我國とロシアとの間にも約同様な協約成り、締約國は相互に他方締約國の現在に於ける領土の保全の尊重を約し、締約國の一方が支那又は他方締約國と結べる條約に基く締約國の現在の條約上の權利の尊重を約し、支那帝國の獨立及び領土保全並に同國に於ける列國商工業の機會均等主義の確立及び現狀の存續を計り、兩國の執り得べき一切の平和的手段に依りて、之を擁護支持すべきを約せり。ポルツマス條約を基礎とせる漁業、通商航海並に滿洲鐵道等に關する諸條約も我國とロシアとの間に結ばれ、日露戰役後の東亞に於ける危險なる狀態は除去されたり。而して此の以後ロシアは注意を東亞よりヨーロッパの方面に轉ずるを得るに至れり。

### 第三十二章 バルカン半島問題及びボスニヤの併合

ロシアは東亞の事に没頭し、オーストリアは現狀維持を求め、イギリスも注意を他の方面に向けたるを以て、バルカン半島に於て地方的紛擾の絶えざるに拘はらず、久しきに亘りて此方面に國際大事件の起らざるを得たり。一八九七年四月末、ロシア、オーストリアの間に於て、バルカン半島に關する意見の交換が行はれ、現狀維持を以て兩國の政策と爲し、互に相協力すべきを約せり。一九〇三年十月中旬に至り、同様の趣意を有するミュルツステッヒの協定成り、十月十五日、兩國は其中の一

國が挑發する所無きに、第三國に依り其安全を脅かされ、又はバルカンの現狀維持を破られんとし、是が爲に第三國と戰爭を行ふ場合に於ては、他の一國は完全なる中立を守るべきを約せり。但しバルカン諸邦との衝突の場合は此限に在らずと爲す。バルカン諸邦に關する此除外は、オーストリアのセルビヤ又はブルガリヤと戦ふ場合に於ける行動の自由を保留せんと欲して、ロシアの要求して加へしめたる所なり。是の如く十九世紀の終より二十世紀の初に亘りて、バルカン問題につき、後日の敵たるロシア、オーストリア二國の間に協同的行動の行はるるを見たり。

バルカン半島に於て、トルコの稅政に加ふるに、諸民族間の紛争を以てして、地方的紛擾は絶えず存せり。一九〇二年六月トルコ政府は、所謂マセドニア委員會が、ブルガリヤの爲に武力的宣傳を行ひ、組織的虐殺を行へりとして、諸強國に訴へ、該委員會を解散せしむることを求めたり。此際ロシア、オーストリアは、一八九七年の約束に基きて相協同し、共にトルコ帝に告ぐるに、先づ自から行政改革を計るべき旨を以てせり。トルコ帝は行政改革の實行を約し、ヒルミ「バシヤ」を檢閲總監として、之を實行せしめんとせり。然るにイギリスのランズダウンはトルコ帝の改革計畫を以て不充分として、一九〇三年一月、自己の改革案を發表せり。其後幾も無く、ロシア及びオーストリアは、ラムスドルフ及びゴルショースキの協同行政改革計畫たる所謂二月計畫の綱領をイギリス政府に示して、之が支持を求む。諸強國の同意を得るに非れば、一定の年數間檢閲總監を其地位より移すを得ずと爲し、外國人の専門家が警察及び憲兵の編成を計るべしとし、各地方の收入は、第一次に該地方の行政の必要に充つべく、國庫の收入たる「十分一稅」の徵收に關して、在來の請負の制度を廢止すべしとす。ランズダウンは大體に於て此の二月計畫を承認し、トルコ帝も嘗に之をマセドニアに行ふのみならず、普ねくヨーロッパ、トルコに之を行ふべきを説けり。ラムスドルフはブルガリヤ及びセルビヤの首都を屢訪して、兩國政府が革命運動の煽動を鎮壓すべきを勧め、以てトルコ政府が改革の實行を遅くるの口實を構ふることを防がんとせり。ブルガリヤ政府も其國內に於ける所謂マセドニア



委員會を解散し、而してトルコに在るブルガリヤ貿易事務官をして、ブルガリヤ人の暴徒の領袖に對して、一換起るもブルガリヤ政府の援助を期待し得べからざることを警告せしめたり。

此以後に於ても、バルカン半島に於て騷擾止まず。一九〇三年七月マセドニアに騷擾起り、九月に至り始めて鎮定に就けるが、騷擾の際ロシア及びオーストリアの二國は相協同して、此際諸強國の名を以てトルコ、ブルガリヤの雙方に對し、ロシア及びオーストリアの協同計畫たる所謂二月計畫の實行を妨害するときは、強國の援助を受くる能はざる旨を警告するの議を發せり。ランズダウンは二月計畫よりも一層果斷的なる措置を執るの必要を説けり。騷亂鎮定後、ラムスドルフはゴルシヨースキと共に、トルコ行政改革の新計畫を協議し、十月中旬に於て、ロシア、オーストリア兩國の皇帝及び外務大臣がミュルツステッヒに會せる際、マセドニア行政改革に就きて協定する所ありたり。

ミュルツステッヒの協定のマセドニア行政改革に關する部分には、(一)ロシア及びオーストリアの文官代表者をして、トルコ政府の任命する檢閱總監に随伴し、耶穌教徒の疾苦及び地方官憲の非行を觀察し、改革の實行及び地方の動靜を觀察し、各之を其本國政府に報道せしめ、(二)外國人の將軍及び將校を憲兵隊中に入れ、各地方に於て監視、教練及び編成に従事せしめ、(三)地方平定の後、行政區劃に變更を加へ、一層民族の状態に適合せしめ、(四)行政及び司法の制度の組織を改め、耶穌教徒をして公務に就くを得せしめ、(五)同數の耶穌教徒及び回々教徒を以て組織せる混成委員會に依り、騷擾の際行はれたる犯罪の審問を行はしめ、(六)トルコ政府をして遲滞無く二月計畫及びミュルツステッヒ計畫等の行政改革計畫の實行を計らしめ、(七)不正規兵を解散せしむる等の協定を含めり。

トルコ帝はロシア及びオーストリアの強硬なる警告に接して、主義としてミュルツステッヒ計畫を承認するに至り、先づ憲兵制度につき實行を計れり。一九〇四年四月トルコ、ブルガリヤの間に於ても協定成り、人をしてバルカン地方の騷擾の終止

すべきを思はしめたり。

イギリス政府はミュルツステッヒ計畫の財政改革に及ばざるを不可と爲し、ランズダウンは一九〇五年一月十一日、改革に關するイギリス政府の意見を發表し、トルコの財政を改革する爲め、國內の秩序維持に必要な數までに、マセドニア及び其附近に在るトルコ軍隊を減すべき旨を提議せり。而してブルガリヤも亦之に相應する兵員の縮減を行ひ、且つ暴力團徒の編成を禁遏すべしと爲す。ブルガリヤにして若し之に従はざるときは、諸強國は連帶的に、トルコに對して、ブルガリヤの其土地を占領することを許さざるべきの保障を與ふべしとす。イギリスは又諸強國の任命する代表者を委員とし、檢閱總監を委員長とし、行政的、執行的權力を有すべき一の委員會を組織すべしとし、檢閱總監は委員會の補佐を受けて軍隊を指揮すべしとす。而して財政改革は、「十分一税」の換算を含むべしとし、各地方より中央政府に一定の金額を支拂ひ、殘金は地方的目的に供し得べからしむべしとす。

ロシア、オーストリアも亦財政改革案を提出し、マセドニアの各地方の收入は總てオットマン銀行の地方支店を経由すべきものとし、オットマン銀行が、トルコの檢閱總監並にロシア、オーストリア兩國より出せる文官たる代表者の監督の下に、支出の管理に當るべきものとす。

トルコは別に外國の監督を受けざる財政改革案を立てたり。イギリス政府は是等の兩案の孰れをも承認するを欲せずして、軍隊縮減に依り歳計不足額を減額する能はざるの理由を明にするにあらざれば、關稅率引上を承諾するを得ずと爲し、又オットマン銀行をして事に當らしめずして、一層適任なる機關をして之に當らしめ、餘利金額をマセドニアの改革の爲に使用せしむべしと爲せり。

ロシア、オーストリア二國も、マセドニアの財政整理に關係して、二國の出せる文官たる代表者の外に、之と協力すべき財



政委員を、他の強國よりも出すことを承認するに至れり。八月に於て大強國の大使はトルコ政府に對して、強國の財政委員の任命を認むべきを求めたり。トルコが之を拒絶するや、ランズダウンは海軍示威運動をトルコに對して行ふべきを提議し、十一月に至り提出せる聯合通牒に於て、檢閱總監、文官代表者及び憲兵の委任期間を更に二ヶ年延長すべきを要求し、而して檢閱總監、ロシヤ及びオーストリアの出せる文官代表者並に他の四強國より一人宛出せる委員より成る財政委員會の組織を承認すべきを要求せり。ドイツを除く諸強國の軍艦がミチレーンに於て示威運動を行ひ、税關及び電信局を占領せる後、トルコ帝は終に屈服するに至れり。

イギリスは已にバーマーストン、デイズレリ以來の極力トルコを保全せんとするの舊政策を抛てるが、ドイツがトルコに於て勢力を得るを見て、益々保全政策の必要を感じざるに至り、マセドニア問題に關して最も強硬の態度を執り、終に前述の如く、トルコをして、マセドニアの財政に對する國際的監督を認めしむるに至れり。イギリスはマセドニアよりトルコの實權を排除し、該地方に自治を享有せしめんと欲せり。ドイツ、オーストリアは、イギリスの此政策を以て、ヨーロッパ、トルコの分裂を致すべきものと爲し、之に反對せり。當時ロシヤも、日露戰役以後其力猶振はず、且つ國內に於て内訌を存するを以て、分裂問題の起ることを欲せざりしなり。

ドイツに於ては、一八九七年マルシャルがコンスタンチノブル駐劄の大使となれる頃より、其の近東政策を變更せるもの如し。其以前に在りては、ドイツはバルカン半島に於て特殊利益を有せずと爲し、オーストリアとロシヤとの間の衝突の劇甚なるを致さざらしむることを以て、ドイツ近東政策の殆ど唯一の目的と爲せるもの如し。然るにマルシャルはドイツの將來の植民政策が小アジア方面に於ける發展に在りと爲し、而してドイツ、オーストリアの勢力をエーゲ海に擴ぐることを以て、該計畫實行の豫備條件と爲せり。ドイツ帝も一八九八年第二回東方旅行を行へる頃より、此説に賛成するに至り、ドイツは其

資本を以て、アナトリア鐵道の敷設を爲すの認許をトルコ帝より得、其後ベルシヤ海に向ふべき所謂バグダッド鐵道敷設の認許を得たり。且つドイツ帝は、トルコ帝の同々教徒に對する勢力を通信し、其のロシヤ又はイギリスと戦ふ際に於て、トルコ帝をして是等の國に對して同々教徒を厭起せしめ得べしと爲せるもの如く、此點の考慮に依りても、益々トルコ帝が自家の利益中のものと爲さんと企てたり。

一九〇六年イギリス及びロシヤは、其間に、ロシヤがアルメニヤ及びベルシヤに達する支線の敷設の專權を得、又イギリスがバグダッドよりベルシヤ海に至る線に對する管理權を得るに非れば、バグダッド線の延長を許さざるべきを約せり。而してイギリスは又バグダッド鐵道のベルシヤ海に於ける終點たるべき地方を有するコウニート侯と約して、之を其勢力の下に置き、以てドイツ政府の實權の該地方に及ぶことを妨げたり。已に一九〇三年に於て、イギリス政府は他國のベルシヤ海に於て、兵備を施せる港津を有するに至ることを極力妨ぐべき旨言明せり。

一九〇六年ドイツ帝がウィーンを訪問せる頃、オーストリアは、ドイツが孤立し、オーストリアに依らざるを得ざるを知り、在來の如く三國同盟内に於て、重要な國際問題に關して常にドイツの指揮を仰ぐの地位を有することを以て満足せざるに至れり。一九〇六年十月ゴルシヨースキに代りてオーストリア外務大臣となれるエーレンタールは國內のセルブ人のオーストリアより分裂することを防がんと欲し、バルカン問題につきて積極的の行動を執らんと欲す。故に一方に於てドイツの制敵を受けずして獨立の外交方針を立てんとし、他方に於て現状維持を主義としてロシヤと協商せるゴルシヨースキの政策を棄てて、ミュルツステッヒ協商を墨守せざらんとす。

ロシヤに於ても、一九〇六年五月イヌヴォルスキがラムスドルフに代りて外務大臣となり、東亞に於ては鋒銜を收め、ヨーロッパの東南に於けるスラーヴ人をして自由を得るに至らしめ、之に依りロシヤの勢力を加ふることを計れり。ロシヤは此の



新政策の實行の爲めに、オーストリア及びドイツと衝突すべきを以て、イギリス及びフランスに接近せんとせり。

一九〇七年八月ドイツ帝はロシア帝とスウイネムンデの會合を催し、其際トルコに關してロシア及びオーストリアの意見の一致せる場合には、ドイツが常に之を支持すべきを説けり。同年九月イズヴォルスキとエーレンタールとが、マセドニヤ改革をトルコ帝に勸告することに一致せるが、此際イズヴォルスキは、結局海峽問題をロシアの希望する如く解決し得べしと信する旨を説きたるも、イギリスの賛否如何を詳にせずと言へり。ロシアは已に旅順口を失へるを以て、其力の重點は黒海に在りとし、從てロシアは黒海より地中海に出づるの道を開かざるを得ざる旨を説けり。エーレンタールは之に關するオーストリアの態度を明言せざりしが如きも、ロシアが之に關して確定的處置を執る以前に、適當の時期に於てオーストリアに通知を爲すことを求め、而してオーストリアがボスニヤの併合を行ふ際に於ても、同様の措置に出づべきを約せりと言ふ。

ドイツに於ても、ビュローは海峽問題につき主としてオーストリアの利益に従て行動すべしとし、ロシアの海峽に關する計畫は、先づオーストリアの了解を得、且つドイツの之を妨げざるの態度に對する報償を與ふる場合に於て、始めて之が實現を許すべきものと爲せり。而して先づ第一に、ロシアの三國同盟より遠かりて、西ヨーロッパ諸國と協商するに至ることを妨げざるべからずと爲す。

グレーがランズダウンに代りてイギリス外務大臣となれる頃、ヨーロッパ協調は活動せざりしも、マセドニヤに於て憲兵制度行はれ、財政委員會も其任務に就けり。一九〇七年四月グレーは行政の改善を認めたるも、諸強國が暴力團徒鎮壓の爲めに一層努力せざるべからざるを説けり。九月三十日に至りロシア及びオーストリアは、聯合通牒を 그리스、ブルガリヤ及びセルビアに送り、團徒の相戦ふは、一はミユルツステツヒ改革計畫中の民族的境界に關する一條の誤解に因る所ありとし、將來に於て境界を定むるに當り、團徒の活動に依り致されたる民族的状态の變更を考量すること無く、事前の狀態に依り決定を爲

すべしと宣言し、 그리스、ブルガリヤ及びセルビアの各政府は團徒の其國人より援助を受くるを禁遏せざるべからずと爲せり。ロシア、オーストリアの此聯合通牒は、他強國の公使の支持する所となれり。然れども此通牒は、バルカン諸邦の行動に關して實效を擧ぐるに能はず。而して他方に於てトルコ帝も頑強なる態度を示し、諸強國が海關稅引上をトルコに對して許せる七年の時期の間、ロシア、オーストリアの文官代表者、其他の強國の財政委員並に憲兵將校等の總ての外國人の委任權限を延長すべきを要求せるに對して、文官代表者及び財政委員が、憲兵將校の如く、トルコの官吏となるべきことを主張せり。然れども諸強國の壓迫に依り、トルコ帝も終に屈して、一九一四年に至る迄委任權限を更新することを認むるに至れり。

諸強國の努力せるに拘はらず、マセドニヤの状態は益々惡化せるより、一九〇七年の終に於て、グレーは更に提議を爲し、諸強國がトルコ政府に對して、マセドニヤ地方の豫算の負擔に歸すべきトルコ軍隊の給養費を節約する爲めに、トルコ軍隊の縮減を行ひ、節約し得たる所を以て、暴力團徒鎮壓の爲めの唯一の有効手段たる憲兵の大規模の増加及び裝備に充つるを勸告すべしと爲せり。然れどもロシア及びオーストリアは、トルコ帝の之を聽かざるべきの故を以て、イギリスの提議に協力するを拒めり。

一九〇七年十二月ドイツ外務大臣マルシャルは、ビュローの特別の委任を受けて、ウィーンにエーレンタールを訪ひ、一般の地位につき談話せり。マルシャルは、トルコ帝がマセドニヤ司法制度改革に關する強國の要求を容れざるべしとし、之を強ひんとせば、結局サロニカを占領せざるべからずと爲し、然れども是れバルカン全體に互るの戰爭を誘致する所以なりと説けるに對して、エーレンタールは、トルコ帝が拒絶せば、バルカン諸邦をして其間の戰爭を行ひ盡さしむるも亦可ならずやと説き、マルシャルは、是の如きは危險甚しきを説けりといふ。此際エーレンタールは「サンジャック」鐵道の敷設の認許をトルコに求むるの意あるを告げ、ドイツの援助を求めたり。「サンジャック」鐵道は已に一九〇七年の初計畫せられ、ドイツ政府



は夙に之が通知を受け、五月に於て已にビュローは、トルコ帝の自由なる許諾あれば、ドイツがオーストリアの計畫を支持すべきを約せり。此頃オーストリアは、ボスニヤ併合と、マセドニアに於けるオーストリアの経済的勢力の擴張とを併せて、同時に之を企圖せるなり。是れアドリヤ海に出で、ユーゴスラヴ人種を糾合して一獨立國を建設せんとするのセルビアの希望と衝突するものなり。

一九〇七年九月末よりエーレンタールはイズヴォルスキとマセドニア司法制度改革案につき協議し、其のトルコ政府に提出さるるに先ち、コンスタンチノブル駐劄の諸強國使臣會議に附せられたる際、オーストリア大使ベルヒトールドは却て該案の成立を妨げんとするの態度に出でたり。一九〇八年一月二十七日エーレンタールは、ミトロヴィツァに於て、ボスニヤ鐵道系をトルコ鐵道の終點に連絡せしむべき「サンジャック」鐵道即ちノヴィバザール州經由鐵道の敷設の計畫を公にせり。該鐵道の認許の請求は十二月末に於てトルコに提出され、一月三十一日に於てトルコ帝の正式の認許が行はれたり。「サンジャック」鐵道の敷設は、ベルリン條約第二十五條の定むる所の、ノヴィバザール州經由の軍事上、通商上の通路に關する權利に基くと稱せらるる所なり。エーレンタールは該鐵道敷設の認許を求めたる理由につき説明して、領土上の野心の爲めに非ずして、セルビアとの關稅戰爭の際に於て、エーゲ海に出づるの唯一の道を閉さるるの虞あるを以て、別にサロニカに出づるの道を作るの必要あるが爲めなりと爲す。

イギリス外務大臣グレーは、同年二月二十八日議院に於て、婉曲の辭を用ひたるも、列強がトルコに對してマセドニア改革を提議せる際、オーストリアの獨り私利を計り、列強の協同的行動を阻害せるを批難せり。

ロシアに於て、オーストリアが「サンジャック」鐵道に依り、セルビアのアドリヤ海に出づるの道を塞ぎ、東西のセルブ人種の聯絡を絶ち、バルカンに於けるオーストリアの勢力を加へんとするを憤り、イズヴォルスキは一八九七年の協約及び、ミュルステッヒ協約の精神に背き、非紳土的の行動を行へるものとして、オーストリアを批難し、是に於て一八九七年以來のバルカン半島に於けるロシア、オーストリア二國間の協調關係は遂に終了するに至れり。其後ロシアは「サンジャック」鐵道に對抗するものとして、セルビア、ルーマニア間の境界線のダニューブ河に達する點より、アルバニアの沿岸のジョヴァニ、デイ、メツアに達する鐵道、即ちダニューブ、アドリヤ鐵道を計畫するに及び、エーレンタールは之に承認を與へたることも、ロシア、オーストリアの關係は爾後再び復舊するを得ず。但し「サンジャック」鐵道の計畫も、之に對抗するものとして計畫されたるダニューブ、アドリヤ鐵道の計畫も、久しからずして共に拋棄さるるに至れり。

グレーはマセドニア改革の爲に努力せんとするヨーロッパ協調が、オーストリアの行動の爲に阻害せられたるを説くと同時に、ミュルステッヒ協約につき云々する如きは、最早其時期にあらずと爲し、諸強國が品性及び能力に於て遺憾無しと認むるトルコ人を、一定の年期間知事として任命し、之に行動の自由を與へ、且つ其地位を安固ならしむべきを提議せり。ロシアはイギリスの提議の趣意に賛成せるも、該提議の實行が困難なるの故を以て、檢閱總監をして一定の年限間其任に當らしめ、諸強國の同意無ければ其地位を動かさざることを實行せしめ、以て同一の目的を達すべきを説き、グレーもロシアの提議を是認せり。イギリスは益々ロシアと接近するを求め、エドワード王は招待に應じ、六月に於てロシア帝をレヴァルに訪問するに至れり。

一九〇八年六月九日及び十日に行はれたるイギリス王とロシア帝との間のレヴァルの會合は、イギリス王の最初のロシア訪問たるを以て、著るしく内外の注意を惹けり。兩君主が二國間の協商に言及せるのみならず、イズヴォルスキ及びハーディングの名を以て公報を發し、兩國の間に總ての點に於ける完全なる一致を存する旨を宣言せり。該會合の際、マセドニア改革問題ベルシヤ問題、バグダッド鐵道問題等が議に上れる如く、ハーディングはドイツの海軍擴張の爲め、七八年中に極度の緊張



的狀態が生じ得べしとし、其際ロシアは仲裁裁判官の如き地位に立つべしとし、ロシアが平和及び勢力均衡の爲めに、其際成るべく充分に武備を整へんことをイギリスが切望する旨述べたりといふ。レヴァルの會合の際、海峡問題は議に上らざりしもの如し。

トルコに於て青年トルコ黨は外國の干渉を憤り、又マセドニヤがトルコより分裂するに至らんことを恐れ、自己の手を以てマセドニヤの改革を行ひ、干渉の根源を絶ち、マセドニヤのトルコより分離するを防がんと欲す。一旦九月を以て事を擧ぐるの時期と定めたる如きも、レヴァルの會合ありて後、急に革命運動の時期早められ、七月上旬より運動開始され、七月二十三日モナスチルに於て一八七六年の憲法が公布され、其翌日に於て、トルコ帝は止むを得ず憲法を承認し、一時マセドニヤの騷擾止み、其夏に於て、國際監視に關係ある機關、即ち憲兵、財政委員會及びロシア、オーストリアより出せる文官代表者等は總て廢止さるるに至れり。

トルコの革命の起れる後、九月初、ドイツ外務大臣シエーンがベルヒテスガーデンにエーレンタールを訪へる際、エーレンタールは單に、ボスニヤの併合が時を追うて益々必要となるべきを説けるも、其後に至り直ちに併合を執行するに決心せる如し。此際エーレンタールはシエーンに對して、ボスフォラス、デルダネルス海峡の開放をロシアに認むるの意ありと爲し、又ノヴィバザールの州の占領權を放棄し、サロニカに進出するの企圖を廢すべきを説けりといふ。又セルビヤの革命的暴動の絶の必要に言及し、セルビヤをブルガリヤに與ふべきを説けりといふ。

ヨーロッパ人が青年トルコ黨の革命に眩惑せる際、オーストリア政府は、其のベルリン條約に依り占領及び行政を行へるボスニヤ、ヘルツェゴヴィナ二州の併合を宣言せり。其の理由とする所は、併合が憲法を該地に施行するの前提條件なりといふに在り。二州の占領及び行政は、ベルリン條約第二十五條に基くも、トルコ帝が二州に對して主權を保有することが明約され

たるを以て、二州の併合は、ベルリン條約がトルコの領土と認めたる所を、一方的宣言を以てオーストリアの領土と爲さんとするものにして、ベルリン條約を蹂躪するものと言ふべきなり。オーストリアは二州の併合を宣言すると同時に、ノヴィバザール州より撤退することを宣言せり。是れベルリン條約第二十五條中に於て、ノヴィバザール州に守備兵を置き、軍事上及び通商上の通路を保有することを認められるの權利を放棄するものなり。二州の併合に關して、一八八一年の三帝同盟締結の際に調印されたる議定書に於て、オーストリアが適當と認むる時機に於て併合を行ふことを認めたるも、オーストリアはロシアを憚り、久しく此權利を實行せず。一八八七年に於ける三帝同盟の再度目の更新期に際し、ロシア帝がオーストリアと條約關係を維持するを欲せざりし爲め、更新は行はれずして止めり。一八九七年春オーストリア帝が前年のロシア帝のウイーン訪問に對して禮を返す爲めにロシア帝を訪問せる際、兩國間に協商行はれたるが、オーストリアは此際二州併合の承認を求めたるも、ロシアは二州併合問題が影響の及ぶ所廣く、適當なる時期及び場所に於て特別の審議を爲すの必要あるべきを答へ、判然たる承認を與へずして止めり。

オーストリアはバルカン半島に於て自己に不利なる形勢を存するを見て、現勢を打破するの必要を感じたるが如し。一九〇三年セルビヤに於て、オーストリアに接近せるオブレノヴィッチ王朝倒れて、ロシアに近かんとするカラ、ゾルジ王朝之に代り、セルビヤを中心とするユーゴスラヴ運動が漸く盛ならんとし、舊にオーストリアのボスニヤ領有を危うするに止まらずして、ダルマシヤ、クロアシヤ、スラヴォニア等の領有をも危うせんとす。一九〇六年以來オーストリアはセルビヤに對して關稅戰爭を行ひ、經濟的壓迫を之に加へたり。セルブ人がアドリヤ海に進出せんとするに對し、オーストリアはイタリヤと共同利害を感じ、相共にセルブ人の希望の達成を妨げたり。ブルガリヤに於てフェルデナント公の治世の初年、オーストリアが勢力を有せしも、フェルデナント公がロシア帝と和睦せる後、漸次ロシアの勢力が之に加はるに至れり。而して一九〇二



年の秘密條約に依り、ブルガリヤ人は、ロシヤが三國同盟内の一國と戦ふ場合に於て、兵力を以てロシヤを助くべきことを約し、之に對して、ロシヤ帝はブルガリヤの領土に對する保障を與へたり。ロシヤは此同盟に依り、マセドニヤの大部分及びトルコのルーメリヤ州の獲得を計るのみならず、進んではコンスタンチノブルを獲得せんと計る大ブルガリヤの理想を抑へんと欲せるもの如し。上述の如くバルカン方面に於てオーストリアに不利なる形勢を存せるを以て、ロシヤが日露戦役の瘡痍尙ほ癒えず、トルコも内政改革に急にして、未だ力を外に用ふるの餘裕無きに乗じ、事を擧ぐるに至れり。

二州併合に關しては、「サンジャック」鐵道計畫の場合と異にして、オーストリアが全然ロシヤに秘して事を起せるものに非ず。イズヴォルスキは「サンジャック」鐵道に關する紛議の後、ロシヤ駐劄のオーストリア大使ベルヒトールドと談話せる結果、一九〇八年四月頃に至り、オーストリアとの協商を更新すべき事を約するに至り、アルバニヤを經由して海に出づるの道をセルビヤに與ふべきダニューブ、アドリヤ鐵道を認むることをオーストリアに求め、エーレンタールは該鐵道がボスニヤを經由することを要求せり。イズヴォルスキは一九〇八年七月二日の覺書に於て、ノヴィバザール州を經由する所謂「サンジャック」鐵道を認め、又現状維持が困難となるべき場合には、變更につき審議するを辭せざるべきを説き、就中ボスフォラス、ダルダネルス海峽をロシヤの軍艦に向つて開放せしむるに對して、オーストリアがボスニヤ、ヘルツェゴヴィナ及びノヴィバザール州を併合することを審議するを辭せざるべき旨を説くに至れり。エーレンタールは此際イズヴォルスキに答ふるに、ロシヤにして自國軍艦のみならず、ルーマニヤ及びブルガリヤの軍艦に對しても海峽を開放することを認め、且つコンスタンチノブルをロシヤ艦隊に依り攻撃せざるの保障を與ふるに於ては、オーストリアはノヴィバザールを撤退し、且つモンテネグロに關するオーストリアのベルリン條約第二十九條所定の權利を拋棄すべき旨を以てせり。イズヴォルスキが、假令條件附なりとも、ボスニヤ併合を認めたることは、エーレンタールをして二州併合の實行可能を思はしめたるもの如く、青年トルコ黨

の革命起りて併合實行の時機促進され、八月十九日オーストリア帝の親臨せる會議に於て内部の議を決してエーレンタールはボスニヤ併合に關してドイツ、イタリヤに通牒し、又ロシヤに對しても、八月二十七日通牒を發し、オーストリアをして併合を行はざるを得ざらしむべき事情が起り得べく其際に於ては、ロシヤがオーストリアを援助すべきを求め、併合を行へる場合には、オーストリアはノヴィバザールより撤退すべく、又海峽問題につきロシヤの希望に従ふべしと爲せり。イズヴォルスキは此通知を以て重要なものとし、エーレンタールと面談するの機會を求めたり。是れブラウの會見の起れる所以なり。

イズヴォルスキはカールスバードに在りしが、九月四日セルビヤの首相ミロヴァノヴィッチと會し、オーストリアの二州併合の實行の場合に於て求むべきセルビヤの代償につき談話を交へたり。同月十五日ミロヴァノヴィッチはセルビヤの代償に關する希望を齎して、再びカールスバードにイズヴォルスキを訪へり。イズヴォルスキは、ロシヤ駐劄のドイツ大使ベルヒトールドの招待に應じ、同月十六日ブラウの別墅に赴き、エーレンタールと會見を行へり。此際エーレンタールは、ロシヤにして二州併合に同意せば、オーストリアはノヴィバザール州より撤退し、サロニカ方面に其勢力を擴張するの企圖を廢すべきを説き、イズヴォルスキは、ロシヤ人が併合に關して惡感情を抱くべきを説けるも、オーストリアの二州併合に對して主義上の反對を爲すこと無かりしが如し。エーレンタールは又、黒海沿岸國の軍艦が一隻宛、其間に間隔を設けて、海峽を通航することとせば、ロシヤの海峽開放の希望に反對せざるべきを約せる如きも、トルコ帝の獨立及びトルコ首都の安全の保障されることを以て、前提條件と爲せるもの如し。イズヴォルスキは二州併合の問題がベルリン條約の變更の問題を含むの故を以て、條約關係國の國際會議を開き、是等の國の同意を求むるの必要を説き、而してエーレンタールは之に關して反對を表すこと無かりしもの如し。イズヴォルスキは又ベルリン條約の改正が議に上らば、モンテネグロの主權の制限に關する該條約第二十九條削除の問題起るべきを説き、エーレンタールも削除を認めたるが如し。又ブルガリヤ獨立問題につき雙方が好意的態



度を執るべきを約せり。二州併合の場合に於てセルビヤの受くべき代償の問題、特にセルビヤのアドリア海に進出するの問題につきて、イズヴォルスキが全然何等言説する所無かりしとは信じ難き所なるも兎に角之に關して強く主張する所無かりしが如し。又クリート島に關して、若し 그리스 が全然該島を合併するに至らば、二國は之に反對せざるべきことに言及せる如し。而して上述の關係以外に於ては、トルコの領土を保全すべきことに一致せる如し。イズヴォルスキは會談の要旨を記して、八月二十七日のオーストリアの通牒に對する返答の形式を以てオーストリアに送ることを約せるも、遂に其約を實行せずして止り。後に至りイズヴォルスキは、會談の際、エーレンタールの計畫の不法なるを説けりとし、反對の意思を表示せざりしに非ずして、唯開戦を賭してまでも之に反對すること無かるべきことを告げたるに外ならずと爲せるが、會談の日の夕に於てエーレンタールのオーストリア帝に奉れる書翰に於ては、イズヴォルスキが併合に關して好意的態度を執るを約せりと爲せり。又エーレンタールのオーストリア帝に報せる所に依れば、オーストリア及びハンガリヤの兩議會の代表者の會議の開會前、十月の初に於て併合を行ふべきをエーレンタールがイズヴォルスキに告げ、イズヴォルスキは之を自己のロシア首都歸著後たる、十月半頃迄延期すべきを求めたるも、エーレンタールは是の如き延期の實行し得べからざるを説き、唯相當の時期に於て豫め通知を與ふべきを約せりと爲す。然るにイズヴォルスキが後に至り主張する所に依れば、ブフラウに於て併合問題は學究的に論及されたるに過ぎずとし、兎も角も、文書上の協定の決定されるを待ちて、始めてエーレンタールが併合を實行すべきものと了解し居たりと稱せり。

エーレンタールは併合に關してイズヴォルスキとの了解が成れるものと思惟し、ロシアの反對を受くるを豫期せざりしが如きも、ロシアの條件とせる海峡開放に對してイギリス、フランスの反對を存すべきを思ひ、若しベルリン條約改正を議題とする列國會議に依り承認せらるるを待ちて、始めて二州併合を實行せんとせば、種々の故障が生ずるを免かれずと爲し、併合に

關して先づ既成事實を作らんとせり。九月二十六日エーレンタールが私信に依りビュローに報せる所に依れば、ロシアとの協議整ひ、ボスニヤ併合及びノヴィバザール州撤退の認許をオーストリア帝より得たりと爲せり。オーストリアのノヴィバザール州撤退は、オーストリアの二州並にノヴィバザール州に關する權利を定むるベルリン條約第二十五條の削除に依りて問題を決し得べきに至らしめ、列國會議開催の必要を去らしむるものなり。オーストリアは又、ノヴィバザールの撤退が、二州併合に關するトルコ及びロシアの反對を緩和するの效あるべしとし、又バルカン地方現狀變更の場合に關する三國同盟條約所定の代償の問題を、二州併合に依りイタリアをして提起せしめざらんとする等の考慮をも存して、此際ノヴィバザール撤退を宣言せるものの如し。

イズヴォルスキは更にカールスバードに赴き、ロシア帝の認許を得て、九月末よりローマ、パリ、ロンドンに赴き、海峡問題につき審議せんと欲せり。九月二十九日及び三十日イズヴォルスキはデシオに於てイタリア外務大臣チットニと會せるが、チットニはオーストリアの併合計畫の詳細を聴きて、三國同盟の一國として、オーストリアの爲に疎外されたりとし、併合の延期を求むるに至れるも、オーストリア政府の顧みる所とならず。

エーレンタールはブフラウよりウィーンに歸りて後、直ちに行動に著手し、併合に對するトルコの反對の氣勢を殺ぎ、且此機會に依りブルガリヤを懐柔せんと欲して、ブルガリヤ公との提携を求めたり。九月二十三日ブルガリヤ公フェルデナンドはブダペストにオーストリア帝を訪ひ、又ウィーンに赴きてエーレンタールと會し、二州併合及びブルガリヤ獨立に關する談話が、公とエーレンタールとの間に交へられたり。會中トルコ政府がブルガリヤの使節を遇するに普通の外交使節を以てせずして、宮廷の行事に招待せざりしが爲め、ブルガリヤ人の激昂を招けることあり。又「オリエンタル」鐵道の同盟罷工行はれ、ブルガリヤ政府が同鐵道線の同側内に在る部分を押收するに至れることあり。十月五日ブルガリヤの獨立が其舊都チルノヴォ



に於て宣言され、ブルガリヤ公はブルガリヤ帝と稱するに至れり。

十月一日オーストリア帝はフランス、イタリヤ、イギリス、ドイツの諸元首に宛てたる親書を送る爲めに特使を發し、諸國駐劄の大使をして、十月五日を以て二州併合を各其駐劄國政府に告知せしめんとす。十月三日イズヴォルスキはパリに著し、二州併合が十月七日に於て行はるべき旨を記せる九月三十日附のイーレンタールの書翰を受領せり。フランスに於て大統領フアリエールが十月五日パリに在らざるの故を以て、大使の謁見が十月三日に於て行はれ、オーストリア帝の親書が大統領に奉呈されたり。大統領は親書を一讀せる後、ブルガリヤの獨立に關して問へるに對して、大使はブルガリヤの獨立が二州の併合に先づ一日なるべき旨を答へ、總て兩國間に協定を経たる旨を述べたり。オーストリア大使は又フランス外務大臣ビションに語るに、ロシヤ、ドイツ、イタリヤが併合を承認せることを以てせり。十月六日オーストリアは二州併合を宣言せり。而して之と同時に、ノヴィパザール州より撤退すべきを宣言せること已に前述せる所の如し。

イズヴォルスキは十月三日パリに於て二州併合に關するイーレンタールの書翰を受領せる後、セルビヤ公使に對して、セルビヤが二州併合に依り失ふ所無くして、却て得る所あるべしと稱し、ヨーロッパ會議に於てベルリン條約の變更を議するの日を待つべきを説けりといふ。イズヴォルスキは十月九日パリよりロンドンに向へり。然るにイギリス政府は其際海峽問題を提起することに同意を與へずして、却てロシヤが其友邦に告げずしてオーストリアと協商せることを、婉曲に求めたるもの如し。イズヴォルスキは轉じてベルリンに赴き、トルコにして同意を與ふれば、ドイツが海峽開放に反對せざるべきの宣言を求めたるも、ドイツ政府は海峽開放につき代償を求めんと欲せるを以て、イズヴォルスキはベルリンに於ても確定的の約束を結ぶを得ず。イズヴォルスキはロシヤがオーストリアの併合の代償として何の得る所も無きに終らんとし、且つ二州併合に對してロシヤ、セルビヤの民論の反對が劇烈なるを見て、漸く併合に關して反對の態度を示し、セルビヤが代償を得るに非れば、

併合を承認せざらんとするの態度を示すに至れり。イズヴォルスキは十月二十四日頃セルビヤ外務大臣ミロヴァノヴィッチに對して、ロシヤが併合を承認せざる旨を告げ、ロシヤ帝も十一月中旬セルビヤ首相パシッチに對し、併合を承認せざる旨を告げたり。但しイズヴォルスキは、オーストリアとの衝突は其際避けざるべからざるをミロヴァノヴィッチに説けりといふ。而してロシヤは一方に於て海峽問題を會議の議題と爲すの議を撤回し、十二月十九日ロシヤ帝は、ロシヤ首都のドイツ大使館付武官ヒンツェに對して、海峽問題を提出せざるを告げたり。

オーストリア大使がオーストリア帝の二州併合に關する親書をイギリス王に奉呈するやイギリス王はオーストリアの行爲に關して遺憾の意を述べ、其のベルリン條約に違反することを指摘せり。十月七日ブレールは其選舉區に於ける演説中に於て、ベルリン條約の變更は列國會議に依り承認を受けざるべからずと爲せり。

コンスタンチノブルに在るイギリス、フランス及びロシヤの大使はトルコ政府に告ぐるに、ベルリン條約の總ての變更が該條約署名國の同意を経ざるべからざる旨を以てし、イギリス艦隊がエーゲ海に差遣されたり。十月十三日の公報は、イギリス及びロシヤが、列國會議の開催を要求するに一致せるを宣言せり。イズヴォルスキは、列國會議の開催につきはイギリスの賛成を得たるも、此際海峽開放を主張することにつきイギリスの同意を得る能はず。

十月十三日に於て、ピローはオーストリアが列國會議の開催に反對し、ドイツがオーストリアを支持せざるを得ざる旨をイギリス政府に告ぐ。十月二十二日イーレンタールはオーストリア、ホンガリヤの兩議會の代表者の會議に於て、若し列國會議の開催が其意見に合し、且つ二州併合が討議を経ずして列國會議に於て承認されるべきものなれば、若て列國會議の開催に反對せざるべき旨を告げたり。

セルビヤ及びモンテネグロは、併合の議を得て、セルビヤ國民の運命の成否につき抗議し、軍備



を修む。セルビヤに於てカラ、ジョルジ王朝のピーター王が登位せる後、ロシアの援助に依り、ユーゴスラヴ人の住する地方をオーストリアより奪ふの策を抱けり。一九〇五年オーストリアがセルビヤ、ブルガリヤ間の關稅同盟締結の計畫に對して關稅戰爭を開始せる頃より、オーストリア、セルビヤ間の關係は緊張せり。二州併合が宣言されるに及び、セルブ人の間に、二州併合に對する代償として、ノヴィバザール州をセルビヤ、モンテネグロ兩國の間に分割するの議論が行はれ、又セルビヤ外務大臣ミロヴァノヴィッチは、諸強國の擔保の下に二州の自治を確め、又アドリヤ海に於てセルビヤに一港を與ふべきことを諸強國に求めたり。ロシアはセルビヤに對して二州併合を承認せざるべき旨を告げたるも、ロシア帝は、戰爭の準備の整はざるを説き、オーストリアがセルビヤを攻撃すること無かるべきも、セルビヤより挑發する所無きを要する旨を説き、溫和の態度を執ることを勧めたり。イズヴォルスキも十二月二十四日の議會に於ける演說の際、其辭色を穩にし、ボスニヤ問題につきては、ロシアが三十年前の條約に依り拘束されることを説き、戰國の意思無くして抗議を行ふは狂人の所爲なりとし、先づ諸強國政府間に於て豫備的の協議を行ふて後、列國會議を開催することを要求する以外には策無しと説けり。オーストリアは一九〇九年の初、協定が會議前に諸國間に行はれ、且つ併合に關する討論が會議に於て行はれざる場合に非れば、其委員を列國會議に出席せしむるを欲せずと爲せり。

セルビヤは抗議を維持し、オーストリアに於て參謀本部長コンラッド、フォン、ヘッツェンドルフの如きは、ロシアが援助を與へ得ざる此際に乗じて、到底和輯し難きセルビヤを膺懲すべきを説き、ドイツの參謀本部長も全然此意見に賛同し、エーレンタールも當初は速にセルビヤを威壓して、危機を解決するの說を有し、十二月中頃に於て、セルビヤが二ヶ月内に全然屈服せざる時は、重大なる措置を執るの覺悟を有する旨をピュローに語れり。但し此際にも、オーストリアが隣邦の領土を奪ふこと無かるべきを説けりといふ。其後エーレンタールは、オーストリアが領土の擴張を求めざるを以て、戰爭を行ふの

費用及び危険を償ふに足るべき戰爭の目的を存せずと稱するに至れり。オーストリアに於て意見分れたる如きも、終に、セルビヤが明白に併合を承認し、將來に於て行動を慎み、且つロシアが無條件に併合に同意するに於ては、平和を維持すべきに決するに至れり。トルコもオーストリアの二州併合を認むるを欲せざりしも、オーストリアに對して積極的の措置を行ふを欲せず。單にトルコ人がオーストリアの貨物に對して排斥を行ふに止まれり。オーストリアはトルコに對して、ノヴィバザールの「サンジャック」よりオーストリアの守備兵を撤退せしむることを以て、二州の名義上の主權に關するトルコの損失を償ふて餘ありと爲せり。然れどもオーストリアは其敵を滅せんと欲し、二州に在る固有財産の爲めに賠償を拂ひ、且つ關稅、專賣等に關するトルコの經濟的利益につきトルコに讓歩する所ありて、一九〇九年一月中旬トルコをして實際上併合を承認せしむるを得たり。二月二十六日に至り正式の協定が結ばれ、トルコは之に依り正式に二州併合を認むるに至れり。

ブルガリヤも「オリエンタル」鐵道に關するトルコ政府の權利に對して賠償金を支拂ふことを認め、而してブルガリヤの仕拂はんとする額と、トルコの要求額との間に存する差額は、結局に於てロシアが一八七七年の戰役に於けるトルコの償金の未拂額中より之を控除し、ロシアの調停に依り事件が落著し、トルコはブルガリヤの獨立を承認せり。

オーストリアとトルコとの間に協定成りて後、セルビヤは列國會議に依り代償を得るの望殆ど絶えたるを見て、益激越の態度を執り、抗議を續けたるが、三國協商側に於て、イギリス及びフランスの輿論は、セルビヤ問題につき徹底的にロシアを援助することを認めず、又ロシアも戰爭の準備を缺けるが爲め、セルビヤの希望を遂げしむること不可能なるを見て、協商側の三國は、主としてセルビヤの體面を維持せしむることに其努力を向けたり。フランスのドイツ、イタリヤと共に調停を行ふの議を發せるに關して、ピュローは二月六日頃、之に同意するは時期尚早なりとし、イギリスが諸強國の相共にセルビヤに向ひ、其主張の拋棄及び其武裝の解除を勸告すべきの議を發せるに對して、二月十日ドイツは、其際必要なるは、ロシアが、セルビ



ヤの自己の危険を以て行動するものにして、ロシアの之に援助を與ふるの意思なき旨を表明することに外ならずと爲せり。三月二日に至り強國が協同してベルグラードに向つて、土地上の代價の要求並にボスニア自治の要求を放棄するを勧告するに至り、ロシアは別にセルビアに對して、軍事的措置を廢すべきを勧告せり。三月十日に至りセルビアは、軍事的措置を廢すべく、又自己の利益を求めずして、ボスニア問題を強國の決定に委すべき旨を認めたり。オーストリアは、セルビアがボスニア併合の承認を明言せざるの故を以て之に満足せず。是に於てセルビアの提出すべき正式の通牒案に關して、イギリス、オーストリアの間に交渉が行はれるに至れり。

ドイツに於て、ドイツ帝及び外務大臣マルシャルは、オーストリアが當初ドイツの充分の了解を求めずして併合の計畫を進めたるに不平にして、且つオーストリアの政策に追隨してブルガリヤを庇護するの結果を危めるも、ドイツ帝國宰相ビュローは無條件の忠誠をオーストリアに致さざるべからずとし、オーストリアとの誠實なる協同が、將來に於けるドイツ外交政策の最高原則たるべきものと爲し、近東問題につきては、ドイツはオーストリアの政策を無條件に支持せざるべからずと爲せり。ドイツ帝も、終に併合を承認し、オーストリアを支持すべきを認むに至れり。ロシア駐劄のドイツ大使ブルターレスがイズヴオルスキに語れるが如く、ドイツ人は、ロシアがレヴァルに於て全然協商國と結託するに至れりと爲し、深くオーストリアと結託せざるべからざるを思ふに至れる如し。ビュローは一九〇八年十月の頃已にロシアに對して、ドイツがオーストリアの政策を無條件に支持すべきことを知らしめ、而して十月三十日ビュローがロシアに是の如き通知を爲せる旨をエーレンタールに告ぐるに當り、ヤルピヤ問題は自己の判断方を違すと爲し、エーレンタールの結局の決定を以て、事情の命ずる所と思惟すべきを説けり。是れ將來に於て無條件にオーストリアのバルカン政策を支持せんとするものなり。ビュローはドイツが在來支持せるオーストリアの政策に關し、オーストリアの退却を見ることは、即ちドイツ自身の退却に外ならずと爲し、オーストリア

を充分援助せざれば、ドイツは終に孤立して、獨り敵の結合に當るに至るべしと爲す。キデルレン、ヤゴ、ホルスタイン、モルトケ號もビュローと意見を同うせるもの如し。

ドイツ帝は一九〇八年十二月末、ビュローの提議に依り、ロシア帝に對し、海峽問題につきロシアの意圖を妨げざるべく、喜でロシアと之に關する意見交換を行ふべきを告げたり。然れどもイギリス、フランスが海峽開放を欲せざること明白なるを以てドイツ帝の通告は深くロシア帝を喜ばしむるに足らず。一九〇九年三月十七日に至り、ドイツ大使ブルターレスはイズヴオルスキに對して、ドイツより、二州併合がトルコの認容を得たる旨を諸強國に通報すべきをオーストリアに勧むるに意ありとし、又若しロシアが賛成の意あらば、ドイツは多分ロシアと協同して、諸強國に向ひ公文の交換を以て併合の承認を行ふべき旨を提議すべきを通告せり。而して是れヨーロッパの承認を受けしめんとするのロシアの希望に副ふものと爲せり。イズヴオルスキはドイツ大使の此通告を以て友誼的通信と稱し、之に關してドイツ大使に謝せるも、是れ列國會議を否定し、セルビアをオーストリアの手に委し、オーストリアをして他の問題を解決するの必要を感ぜざるに至らしむるものと爲せり。イズヴオルスキは當時列國會議の開催を望めるが、パリ及びロンドンにドイツの通告を報道するに當り、列國會議開催の保障を得ば、主義としてドイツの提議を承認し得べき旨を附言せり。然るにロシアが數日間返答をドイツ政府に與へざるや、三月二十二日ドイツ政府は通牒をロシア政府に送り、ロシア政府がドイツの措置の友誼的精神に出でたるを認め、且つ該提議を承認するの意あるが如きを喜ぶと爲し、ドイツ政府は、オーストリア、トルコ間の協約を諸強國に通報すると同時に、ベルリン條約第二十五條の廢棄を正式に認むることを諸強國に提議すべき旨ウイーン内閣に勧むるの意ありと爲し、然れども之を行ふに先ち、ロシア政府がオーストリアの此の如き提議を承認するの意あるや否やを確知せんと欲すると爲し、ドイツは可否に關する明答を期望し、曖昧なる返答は之を拒絶と認むべしとし、拒絶の場合には事の成行に任すべく、其際如何なる事態生ずるも、



之に對する責任は全然イズヴォルスキの負はざるべからざる所と爲せり。但し列國會議の開催を全然否定するに至らずして、會議を開くべきや否やは後日之を決すべきものと爲せり。ドイツの此通牒は、世人の一種の最後通牒を以て目せる所なり。

一九〇九年三月二十二日ロシア帝はドイツ帝に對して、ドイツが平和的協定を得るの機會を與へたることを衷心より喜ぶと稱し、イズヴォルスキに受諾を命ずべしと爲し、ドイツ帝がセルビヤに對する軍事的行動を防止すべきを懇望せり。而して同月二十三日に於て、イズヴォルスキはドイツ大使に答ふるに、若しオーストリアが諸強國に求むるに、ベルリン條約第二十五條の廢棄の承認を以てせんとせば、ロシア政府は其の正式にして且つ無條件なる承認を宣言するの意あることを以てし、而してイズヴォルスキは、ドイツ政府の危機解決の希望を見するの證據を與へたるに鑑み、ドイツ政府がオーストリア政府に勸め、セルビヤよりオーストリアに送るべき通牒案作成に關するイギリスの調停の提議を受諾せしむることを望む旨を述べたり。イギリス及びフランスの政府に對してドイツとの通信往復の顛末を報道するに當り、イズヴォルスキは、直ちに併合を承認せざれば、セルビヤが侵入を被むるに至りしなるべきを以て、反對を爲すことが不可能なりしと爲し、オーストリア、セルビヤ間の衝突より生ずるロシアの危険並に世界平和の危険を防ぎ、且つセルビヤに保護を與ふる爲めに、直ちに承認を行ふの外、策無かりしことを説けり。ピニローはローマ、パリ、ロンドン等に駐劄するドイツ大使に訓令を發し、諸政府がロシアの例に倣ひて二州併合を承認せんことを求めしむ。イギリスに於てグレーは、併合の承認がオーストリア、セルビヤ間の問題の決定の後に於て始めて行はれべきを答へ、フランスはドイツの提議を承認するの意を示せるも、オーストリア、セルビヤ間の衝突の終了に至る迄、其要求を延期すべきを求めたり。

三月二十六日エーレンタールは、同月二十八日に至る迄待つべきも、其日に於てセルビヤ政府に對して最後通牒を發すべしと爲せり。三月二十八日グレーは、セルビヤのオーストリアに送るべき通牒の案に關するエーレンタールとカートライト大使

との間の協定の最後の形式を承認し、而してイギリスは、セルビヤが之をオーストリアに送り、オーストリアが之を正式に承認する際に於て、招請を受くればベルリン條約第二十五條の廢棄を認むべしとす。三月二十九日頃、オーストリアに於て猶セルビヤに對する軍事行動を行ふの説が唱へられしが、三月三十一日セルビヤ公使はイギリスの調停に依り、エーレンタール、カートライト通牒案に依る正式の通牒をオーストリア外務相に提出し、以て其屈服を表せり。該通牒中に於て、セルビヤは二州の併合に依り、其權利の侵犯されること無きを認め、諸強國の勸告に依り、オーストリアに對する抗議及び反對の態度を止め、オーストリアに對する其政策の傾向を一變し、向後善隣の誼に依りオーストリアと和輯すべき旨を宣言し、オーストリアの平和的意向に信頼して、セルビヤは一九〇八年春に於ける程度まで軍隊を減すべきを宣言せり。

三國協商の三國は、ベルリン條約第二十五條の廢棄を承認すべき旨のオーストリアの要求に應じ、而してオーストリアは、ベルリン條約に基きモンテネグロの領海に於て有する其の警察權の拋棄を宣言せり。

エーレンタールは二州併合事件につき一時成效を收めたるも、其の實際に於て收め得たる利益を検するに、已に實權を有するボスニヤ、ヘルツェゴヴィナの二州の地位を明確にせる以外に於ては、セルビヤを屈服せしめ、屈辱的宣言を發せしめたることあるに過ぎず。ノヴィバザール方面の利益及びモンテネグロ領海に於ける權利を拋棄せるに止まらずして、ロシア人の深怨を買ふに至れり。而してセルビヤ問題につきても根本的の解決を爲し得ずして、後に世界大戰を致すべき禍根を遺せり。

ドイツは當初、オーストリアの深くドイツと計ること無くして併合の舉に出でたるに不満なりしも、ロシアがセルビヤをして代償を收めしめ得ざれば併合を承認せざらんとするの態度を示すに至り、ドイツは其の結託し得べき唯一の同盟國との緊密關係を世に表示するの必要を認め、ドイツの義務並に利益が、躊躇する所無くオーストリアを援助するに在りと爲し、ドイツ帝の所謂慷慨たる甲冑を着けて、オーストリアを援助するに至り、最後に於て、自ら進てロシアに迫り、併合の無條件的承認



を之に強ひたり。此事件に於て、ドイツの最後の活躍に依り、三國同盟が三國協商を屈服せしめたるの觀を呈せり。然れども協商三國の結束は此事件に依りて益々固きを致せり。ドイツのロシアに迫りて、併合を承認せしめたる所謂最後通牒は、ロシアに對してフランス、イギリスとの結合の頼み難きを感じしめんとする意圖に關係あるべきも、恰もモロッコ事件の際に於てドイツがフランスに對しイギリス、ロシアとの結合の頼み難きを示さんとして行へる高壓的措置の如く、之が結果として、却て協商側の諸國の結束の益々固きを致すに至れり。

ロシアは當初海峽開放を代償としてオーストリアの二州併合を承認するの意ありし如きも、海峽開放の成らざるを見、又ロシア人及び其他のスラヴ人の間に併合に對する反對論の盛なるを見て、セルビヤが代償を得ざれば、二州併合の承認を拒まんとするの態度を執るに至れり。然れども戦争の準備無く、ドイツの一喝に遭ひて遽に屈し、昔に代償を收め得ざるに止まらずして、列國會議開催の主張をも貫くを得ず。此事件に依りロシア人は屈辱を受けたるを感じ、オーストリアに對して怨恚の念を蓄へ、兩國の反目劇しきに至り、一九一〇年の夏ロシア帝がイタリア王をラコニギに訪問するに當り、オーストリアの土地を踏むを避けんとして、道をドイツ、フランスに取り、大迂回を爲せることあり。ロシアは併合事件以後ウィーン駐劄の大使の後任者を補任せずして、サゾノフの外務大臣となる頃に及べり。ロシアはオーストリアに對して深くセルビヤと結ぶに至り、一九〇九年十二月に至り、ロシアは又ブルガリヤと秘密條約を結び、一九〇二年の條約を擴張せり。而して該條約中には、バルカンに於けるスラヴ人の理想は、中央ヨーロッパ諸國に對するロシアの勝利ありて、始めて實現し得べき旨の宣言を見るに至れり。

### 第三十三章 イギリス、ドイツ間の製艦協定談判

イギリスとドイツの間に、已に植民地に關する紛糾を存し、又新に商工業上の競争の勢を生じたるが、兩國の反目をして劇甚ならしむるに至れる最大原因は、實にドイツの海軍擴張に依り、イギリスが其の制海權を脅かされんとすることに在り。イギリスは一八九八年及び一九〇一年に於て、ドイツと緊密關係を結ぶことを求め、之と抗争することを避けんと欲せるも、ドイツはイギリスとロシア、フランスとの間の利害の衝突が到底調和し難きものと爲し、ドイツ、オーストリアとロシア、フランスとの間のバルカン問題及びアルサス、ロレーン問題を輕視し、ドイツが永くヨーロッパに於て相對立する二大勢力の中間地位の利益を占め得べしと爲し、イギリスと緊密關係を結ぶを欲せず。イギリスはヨーロッパ大陸に於ける勢力均衡を求め、ドイツ人のイギリスに對する敵愾的思想若くはドイツ帝の突忽的行動に依り、平和の危うせらるるに備へんと欲し、且つドイツ帝のロシア帝をしてブエルコー條約を結ばしめ、イギリスに對してヨーロッパ強國の聯合するの計畫を立てたるを見て、頗る戒心を加へ、フランスとの協商を固くし、一九〇七年八月に至りロシアと協商を結び、是に於て遂に三國協商成れり。是より以後ドイツは、イギリスが包圍政策を以てドイツを苦しむることを説くに至れり。

ドイツの一九〇〇年の海軍法、イギリスの接近を求むるに對するドイツ政府の冷淡なる態度、並にドイツ人のイギリス人敵視の傾向等は、イギリス政府をして不安の念を抱かしめ、已に一九〇三年に於て、新にスコットランドに堅固なる海軍根據地を作ることを決し、且つ毎年四隻の戦艦を製造せんとする所謂コードル案を通過せしめたり。一九〇四年イギリス王がキールに於てドイツ海軍を檢閲せる後、イギリス艦隊の排置の變更が行はれ、海軍主力を北海方面に置くに至れり。一九〇五年「ド



「レッドノート」號が起工され、翌年二月進水式行はる。「ドイツに於ても、一九〇六年三月の海軍法に依り、六隻の大巡洋艦の増加並に新造すべき戦艦の噸數及び武装の増加を定め、又キール運河を深うするの財源を確めたり。

イギリスに於てカムベル・パンナーマンの自由党内閣が政局に當るや、一九〇六年七月次年の製艦計畫の縮小を發表せり。是れドイツの方面に於ても、之に促されて、新艦製造を制限するに至らんことを希望して行へる所なり。然れどもドイツは其の製艦計畫につきて何等の變更をも行はず。同年八月のイギリス王とドイツ帝との間の會見の際、製艦制限の問題が話題に上りしも、ドイツ帝は其國に於て一旦定めたる計畫を變更し得ざる旨を明言せり。

イギリスの自由党内閣は、一九〇七年に於ても、次年の製艦計畫に於ける新造艦を三隻に減じ、且つ他國が同様の事を行はば更に一隻を減すべしと爲せり。是に關する提議が諸強國に送られたるが、四月三十日ビュローは、帝國議會に於て、此種の審議が假りに危険を伴ふこと無しとするも、實際に適せざるものと爲し、ドイツ政府は之に關係するを欲せずと述べたり。一九〇七年のヘーグ第二回平和會議の際、イギリスはアメリカと共に、軍備制限を議するに意ありしも、ドイツが主として之に反對せる爲め、該問題を審議するを得ずして止めり。同會議の際、ドイツは義務的仲裁裁判の制度の採用にも反對せり。

一九〇七年八月イギリスとロシアとの間に協商結ばれて後、十一月ドイツ帝はウィンゾルを訪問し、其際イギリス、ドイツ兩國の交歓行はれ、兩國民間に於て、幾分の感情の融和を致せり。ドイツ帝は此際バグダッド鐵道に關してイギリスの協力を求むるに意ある旨をイギリス陸軍大臣ハルデーに語り、ハルデーは、新鐵道を利用して南下すべき軍隊に對して、インドを擁護すべき關門を設くるを必要とする旨を答へ、所謂關門とは、ベルシヤ灣に近接せる鐵道部分のイギリスに依る管理を意味すると爲せり。ドイツ帝はイギリスの求むる關門を之に與ふべき旨を答ふ。イギリス外務大臣グレーはハルデーの陳述に基きて一の覺書を作り、ハルデーをして之をベルリンに送らしめたり。該覺書に於て、イギリス政府はドイツ帝の言及せる

所を以て健全なる基礎と思惟すると爲し、之に關して審議するを欲する旨を述べたるも、協定を行ふに先ち、フランス及びロシアをも審議に加はらしめざるべからずと爲せり。ベルリン政府は、バグダッド鐵道の南端部分の問題をイギリス政府と共に審議することを欲するも、他の二國をして審議に加はらしむることは之を欲せずと爲せり。是の如くしてバグダッド鐵道に關する協定問題は頓挫し、イギリス、ドイツ兩國の關係に於て、再び陰翳の加はるを見るに至れり。

ドイツ帝は二月二十六日イギリス及びドイツの海軍政策に關する書翰を、イギリス海軍大臣トウイードマウスに與へ、ドイツはイギリスの海上の優越權を争ふの意志無く、又イギリスの製艦の爲めに、自己の必要とする以上に一隻をも加ふること無かるべしと説けり。トウイードマウスは之に答ふる所ありて、一九〇八年・一九〇九年のイギリスの製艦計畫の未だ議會に提出さざるものをドイツ帝に送れり。然るに三月六日「タイムズ」紙上に於て、其軍事通信員の一人が、ドイツ帝の書翰を以て、豫算の議院の審議に付せられんとする際に於て、イギリス海軍大臣の意見に影響を與へ、ドイツの利益を計らんとするの狡猾なる企圖と爲し、カムベル・パンナーマンは、ドイツ帝の書翰が全然反誼的精神に基くものなるを辯じ、之に對するトウイードマウスの返書も亦私信に過ぎずとなし、ドイツ帝の書翰の受領以前に於て、イギリス内閣が已に海軍豫算に關して正式の決定を爲せるを説けり。

當初イギリスより製艦協定の談判を行ふことをドイツに求めたるも、ドイツ帝及びティルピッツは談判を行ふことに反對せり。イギリスの内閣員は猶ドイツとの協定に望を屬し、一九〇八年・一九〇九年のイギリス海軍豫算は、二隻の「ドレッドノート」型軍艦を製造するに止めたり。而して一九〇八年八月エドワード王のマリエンバードに赴くの途次フリードリッヒスホーフに於てドイツ帝と會見すべきを機會として、製艦に關する協定の談判を始めんと欲せり。ハーディング及びロイド・ジョージがイギリス王に扈從せり。ドイツ帝はイギリス大使が豫め其意向を探らんとするに對して、製艦休止又は製艦速度徐緩に關



する協定は全然之を行ひ得ずと爲し、外國の勢力が自國の軍備に及ぶことは、如何なる人民も忍ぶ能はざる所と爲せり。是に於てイギリス王は製艦協定に關する談話を行はずして止めり。ハーディングがドイツ帝に向ひて、製艦休止又は製艦速度徐緩の協定を結び得ざるやを問へるに對して、ドイツ帝は辭色を厲まして、外國の政府がドイツの海軍軍備につき命令を爲すを許す能はずと言ひ、ドイツ人は是の如き事に屈從せんよりは、寧ろ戰爭を行はんと欲すと説き、是れ國民の名譽及び威嚴の問題なりと爲せり。

ドイツ帝はテイルピッツの説を容れ、製艦を決行せんと欲し、一九〇四年に於て已に、其後二年にして危險帶時期を經過し得べしと稱せることあり。ビュローはドイツの海軍を盛大にせんと欲するも、ドイツの擴張計畫がイギリスの海軍擴張を促がし、ドイツ帝の所謂危險帶時期の經過の實現が困難なるを思ひ、隱忍の態度を執ることを主張せり。然れども一九〇八年七月の末頃、ビュローは製艦計畫の促進につきドイツ帝の意見に従ふことを強ひらるるに至れるもの如し。八月に於ける兩君主の會見後、ビュローはテイルピッツに告げて後、ドイツが現在の海軍計畫を變更し、其以上に擴張を行ふの意圖無きことを宣言し、イギリスがドイツに對する其の非友誼的の政策を改むるに於ては、ドイツの法律上動かし得ざる既定計畫を變更することと關係なき或る協定をイギリスと結ぶことを得べしと説けり。然れどもイギリスはドイツの現在計畫を緩和し、之に對抗すべき製艦計畫の費用を節約せんと欲するものなるを以て、ビュローの宣言を以て満足せず。且つドイツ帝が、ドイツの製艦の制限に關係ある正式の提議を以て、始ど敵對的行爲と思惟するが如き趣意の言を發せるより、イギリスは當時ドイツと協定するの望を絶てり。

一九〇八年十月二十八日、「デーリー・テレグラフ」新聞紙上に於て、無署名のドイツ帝會見談が公にせられ、ドイツ帝がトランスヴァール戰爭中、陰に陽に、イギリスに對して友誼を表し、或はロシヤ、フランスのイギリスに對する聯合干渉の提議を拒絕し、或は戰爭終了の最良方法に關するドイツ參謀本部の意見をイギリス女王に傳ふる等の事を爲し、爾後同様なる友誼的態度を保持せるも、ドイツ人はドイツ帝と其態度を一にせず、イギリス人もドイツ帝の心事を諒とするに至らざるを説けり。是れドイツ帝のドイツ、イギリス兩國間の關係の改善を目的として公にせしめたる所なるも、其の發表さるるや、ドイツに於て之に對する非難の聲高く、イギリスに於ても、却りてドイツに對する反感を高めたり。十月三十一日ドイツ帝はビュローの辭職願を撤回せしむる爲め、將來に於てドイツ帝國宰相の助言無くして、政治上の重要事件につき行動する所無かるべきを約せり。ビュローは帝國議會に於ける演説に於て、會見談中に擧げたる事實につき其世人の誤解と爲す所を正し、兩國民間の關係を改善せんと欲すのドイツ帝の心事を辯明し、該會見談の發表が豫期の結果を生ぜずして、却りて世の非難を招けるに願み、今後ドイツ帝は、私的談話に關しても、ドイツ政策の統一の爲めに必要にして、又帝位の威權を維持する爲めにも必要なるべき慎重の態度を守るべしとし、然らざれば、余も、余の後繼者も、其職責を盡すを得ざるべしと爲せり。此際ビュローがドイツ帝を辯護するに於て不充分なりとして、ドイツ帝はビュローに對して銜む所あるに至れり。

イギリス、ドイツ兩國間に於て、戰爭の起るべきを思ふもの漸く増加せり。ビュローはイギリスとドイツとの關係を緩和せんと欲し、製艦に關して協商を試みんと欲するに至れり。テイルピッツは兩國の關係の緊張は商業上の競争に基くと稱し、海軍の競争に關して妥協を行ふことに反對せり。ビュローはテイルピッツに對して、一朝イギリスと戦端を開く場合に於て、ドイツは泰然として、自信を以て敵に當るを得べきや否やに關する専門的の意見を求め、テイルピッツは三週間後之に答へ、ドイツが泰然として、自信を以て敵に當るを得ざるを以て、益々海軍を擴張し、イギリスの攻撃を防ぐの計を運らすの必要ありとし、製艦の制限を認むるはイギリスに對する屈服にして、却りて戰爭の危險を加ふべしと爲す。然れどもテイルピッツも終に、向ふ十年間、イギリスが毎年軍艦四隻以上の増加を計らざるときは、ドイツも亦三隻以上を製造せざるを約するも不可な



きことを認むるに至れり。是れ毎歳の製艦につき三對四の比率を維持せんとするものなり。然るに一九〇九年二月のイギリス王のベルリン訪問の際、ビュローは製艦問題に關し多く言ふ所なくして止めり。當時ボスニヤ併合事件に因り三國同盟と三國協商との關係が緊張せるを以てなり。

一九〇八年の秋、イギリス海軍省は、ドイツが一九〇九年・一九一〇年の製艦計畫を繰り上ぐるの方針を採れるの報道に接せり。翌年一月グレーはドイツ政府に對して、イギリスの豫算がドイツの措置に應じて著るしく増加すべきを告げたり。イギリスの豫算案に於て、四隻の主力艦を製造することと爲せるも、必要起らば、政府が更に四隻を急に製造するの措置を執り得べきこととせり。三月十六日海軍大臣マッケンナは、議院に於て初めて公然ドイツを以てイギリスの海軍必要を測るの準繩と爲して、豫算案を説明せり。グレーは兩國海軍が相互に製艦狀況に關する情報を交換し、且つ雙方が大使館付武官に便宜を與へて、點檢の實を擧ぐるを得せしめ、以て將來に於て恐慌の生ずるを防ぐべき旨を提議せるも、ドイツ政府の容るる所とならず。七月に至りイギリス政府は、初の四隻の外に、場合に依り起工すべきこととせる他の四隻をも起工する旨を宣言せり。イギリスは其の一九〇九年・一九一〇年の計畫の八隻中の六隻を、十三「インチ」半の砲を有する超「ドレッドノート」型の軍艦と爲せり。イギリスの此措置は、已に起工せるドイツ軍艦の製造を遅延せしめ、危険時期と稱せられたる一九一二年の春に於て、ドイツ主力艦は九隻に止まれり。然るにイギリスに於ては、一九〇九年・一九一〇年の主力艦八隻の製造に次ぎて、次の二ヶ年に於て毎年五隻を起工し、三年間に十八隻を起工するの計畫を實行せり。

一九〇九年三月十六日首相アスクイスは、議院に於ける質問に應じて、ドイツが自己の必要以外の考量に依り其製艦計畫を左右するを拒み、外國の船艦の強弱如何といふ如き考量をして、其製艦計畫に影響せしむるを認め得ずと爲せるが爲め、協定が成立し得ざりしことを答へたり。是より先き、同年一月頃、ロンドン駐劄のドイツ大使メッテルニッヒは、前年の夏頃に於

ては、イギリスと協商することを得たるなるべきも、今はイギリスが已に「ドレッドノート」型軍艦に關する二強國標準維持を目的とする製艦競争を行ふことに決意するに至れる後なるを以て、最早協商の時期去れりとし、ドイツ海軍部内に於て、イギリスが海軍の優勢を維持し得ざることを悟り、其境遇に満足するに至り、競争を断念するに至るべしとするの思想を存する如きも、其の誤れる見解に過ぎざるを指摘せり。

ビュローは依然イギリスとの接近を求め、一九〇九年二月モロッコに關してフランスと協定を結べる後、四月に於て、コルフに赴かんとするドイツ帝とヴェニスに會し、イギリスとの製艦協定を行ひ、當時現存の勢力比率を維持することの許諾を得たり。ドイツ帝は、イギリスをして同時にドイツと一般的條約を結ばしむることを必要と爲せり。ビュローはベルリンに歸りて後、製艦協定案の外に、一般的政治條約、通商條約、植民地條約、バグダッド鐵道に關する特別條約等に關する案を作成せり。一般的政治條約案として、第一に、一般的防禦同盟を約定する條約案を立て、雙方の國は、挑發せざる攻撃對して、全力を以て互に他方を援助するの義務を負ふべしとし、一方が他國との同盟條約に依り、止むを得ず戰爭行爲に出づるときは、他方は好意的中立を守るべきことと爲さんとす。是の如き同盟をイギリスと結ぶことを得ざる場合に於ては、一方が戰爭を行ふ際に他方が中立を守るべきを定むる中立條約を以て満足すべしとし、而して中立條約も亦成らざる場合に於ては、一種の協商を結ぶべしと爲す。該協商に於て、兩國は一般的友交關係の維持を約し、且つ領有狀態の他より威脅を受くるときは、保全の爲め必要な措置につきて協議すべきを約さんとす。是の如き廣汎なる内容を有する提議に對し、イギリスは、一八九八年及び一九〇一年の頃に於ては、喜で之につき談判するの意ありたるも、ドイツが當時のイギリスの此種の提議を拒絶し、イギリスは終に去てフランス、ロシアと緊密關係を結ぶに至れる後なるを以て、其のフランス、ロシアと結べる以上の關係をドイツと結ぶを欲せざるのみならず、ドイツとの接近に依りフランス、ロシアと離るるに至るを恐る。イギリスの求めたる所は、



ドイツとの軋轢を去るべき製艦協定に外ならざるなり。イギリスも、若し製艦協定を結ぶを得ば、ドイツと或種の協商を結ぶことは之を辭せざるべきも、一般的政治條約は、イギリスが之に關して屢々ドイツと談判を行ひてドイツの拒絶する所となりたるものなるを以て、イギリスに於て望を屬すること大ならず。且つ已にイギリスの海軍擴張の豫算提出後なるを以て、ドイツの満足し得べき政治條約の締結さるべき望極めて渺し。

ビュローは四月の初テイルピッツに對して、其の讓歩し得る最大限を示すを求め、六月三日テイルピッツは、一旦定まれる軍備計畫の變更を生ぜしむべき協商を認め得ずと爲せり。テイルピッツの讓歩せる唯一の點は、將來に於ける新艦製造の比率を、三對四に定むることに在りしも、ドイツ側より之を提議すべからずと爲せり。六月二十三日附を以て、ビュローはメッテルニヒに訓令して、機會を求めて他方より威脅が加へらるること無ければ、ドイツは、公平なる基礎に依り製艦協定につき談判するの意無きに非ざることを、イギリス當局者に告げしめたり。然るにテイルピッツは外務大臣シェーンに對して、ドイツの製艦を今後一層促進するの企圖無き旨をイギリスに對して明言せざるべきことを切に求めたり。是に於てビュローのイギリスとの協商を求むるの計畫は、テイルピッツ等の掣肘を受け、談判の進捗を見るを得ず。

一九〇九年七月、ベトマン・ホルウェツヒがビュローに代りてドイツ帝國宰相となり、國際關係の考量に重きを置かざるべからずとし、一方に於てオーストリアの政策に追隨するの地位を脱せんと欲し、他方に於てイギリスに接近して、ヨーロッパ大陸の戰爭の際に於けるイギリスの中立を確むることに焦慮せり。ベトマン・ホルウェツヒはイギリス政府の善意を信じ、之と腹藏なき意見交換を行ふを欲せり。新ドイツ帝國宰相は、是の如き見地より、ドイツの製艦豫算につき屢々争ふに至れり。新に外務大臣となれるキデルレン・ウエヒターも、亦ドイツがイギリスの敵意を招かざる程度の艦隊を以て満足せざるべからざるを説けり。

ベトマン・ホルウェツヒは任官後幾も無く非公式の談判を始め、八月に於て、ドイツ帝の賛成を得て、イギリス大使ゴッペンと製艦協定に關する談判を交へんとせるが、イギリスが其一般政策をドイツに親しむの方向に向け、且つ其の他國と締結する條約が隱約の間にドイツに對抗すべきものたらざるの擔保を供與することを以て、製艦協定締結の條件と爲さんとせり。イギリス政府は好意を以て此際のドイツの提議を迎へたるも、ベトマン・ホルウェツヒはテイルピッツ等に掣肘せられ、ドイツの一九〇七年の海軍法を動かさんとすれば帝國議會の反對に遭ふべきの故を以て、該法に觸れざる範圍内に於て製艦速度徐緩の問題を議すべきものと爲すに至り、而して採用すべき形式に關しても詳細なる説明を與ふるに至らず。ドイツの提議は、一九〇七年の海軍法に依り一九一八年に於て完成さるべきドイツ軍艦數に變更を及ぼさしめざらんとするものなるを以て、イギリス政府を満足せしむるに足らず。ドイツが製艦協定を結ぶの條件として締結を求むる政治的條約案に於て、雙方の國が攻撃の意圖を抱かず、又實際攻撃を行ふこと無かるべく、一方が他の一國又は數國に依り攻撃さるときは、他方の國は中立を守るべきことと爲せり。イギリス政府は、中立に關する約束が、イギリスをして大陸の戰爭の際之に關係するを得ざるに至らしめ、紛争の原因及び結果の如何を問はず、イギリスは實際上フランスを援助するを得ざるに至るべく、是れフランスの信用及び好意を失ふ所以たるを慮り、又イギリスが中立遵守の義務に拘束さるる間に於て、ドイツがヨーロッパ大陸の覇權を確立し、其後に至り孤立せるイギリスを敵とするに至らんことを恐る。一九〇九年の秋、イギリス政府はドイツの提案を拒絶するに至れり。

一九一〇年五月、ドイツ帝がエドワード王の葬儀に際しロンドンに赴きて後、イギリス側より製艦協定に關する談判が促がされたが如きも、ドイツは依然其海軍法の變更を認めず、從て製艦數の減少を認めずして、單に製艦に關する一時的速度徐緩につき協定するの提議を爲せり。八月に於てイギリスはドイツが既定計畫以上に製艦増加を爲さざるを宣言し、又相互の製



艦情況に關して互に情報を交換することを定むることの望ましきを説けり。政治的協商に關しては、イギリスと第三國との間の條約に於て、ドイツを標的とする何物をも存せず、又イギリスが自からドイツに對して敵對的意圖を挾むこと無き旨の保障を與ふべしとす。ドイツ帝はイギリスが其製艦計畫を一定せざるべからずとし、又イギリスのフランス、ロシアと結べる協商にドイツをも加ふべく、豫め協商關係の條約の内容をドイツに告知すべしとし、又例へば門戶開放といふ如き世界的の平行線的の政策に關して協定を爲すべきものとす。而してイギリスがインドの領土の擔保を求むるときは、ドイツはアルサス、ロレーン保有の擔保を求め、且つドイツの後方掩護の義務を負ふことを求めざるべからずと爲す。製艦協定に關して、ティルピッツはイギリスが一九一二年より一九一七年に至る迄、毎歲新に三隻以上の製艦を爲さざるを約すれば、ドイツは其間毎歲新に二隻以上の製艦を爲さざるを約し得べしとす。是れ毎歲の製艦につき二對三の比率を認めんとするものなり。

ドイツは製艦協定に關して概して冷淡なる態度を示し、其締結の爲めには、政治的條約の締結を以て前提條件と爲すを主張せり。一九一〇年十月に於て、イギリス政府は、ドイツ政府の曩に提議せる中立に關する政治的條約案が、日本との同盟條約を除きては、イギリスの結べる如何なる協定よりも廣汎にして、影響する所多く、緊密の度も深きを以て、フランス、ロシアをして誤解を爲さしむるの虞ありと爲し、イギリスのフランス、ロシアと結べる協約は、政治上の一般的形式を基礎とするのと無く、特別問題の解決を爲せるに外ならざるも、特別問題の解決に依り友誼的關係を生じたるものにして、是等の友誼に於て排他的なる何物をも存せずと爲し、イギリスとドイツとの間に於ても、同様な協定を爲すを可なりとせり。十月十三日のベトマン、ホルウェツヒの書翰中に於て、相互的に製艦に關する情報を與へ、大使館付武官をして監視を行はしめんとするのイギリスの主張に對して、之を否認すること無かりしも、海軍に關する協定を行ふの前提として政治的協定を結ぶべきを主張し、イギリスのモロッコ、ベルシャ、バグダッド鐵道、トルコ公債等に關する非友誼的態度に對して不平を鳴らせり。一九一

一年三月二十五日のイギリスの覺書は之に答へ、ドイツ帝國宰相がイギリス政府の態度に關して説く所の根據無きを辨じ、ドイツ政府にして是の如き非難の聲を放つときは、イギリス政府は談判を續行するを得ずと爲す。四月四日ドイツ政府は之に答へ、イギリス政府がベトマン・ホルウェツヒの書翰中の言を誤解せりと爲せり。

一九一一年五月、ドイツは其の曩に提議せる製艦に關する一時的速度徐緩の議を撤回するに至れり。其の理由とする所は、造船業者に對して一定額の政府註文の利益を與ふるの必要に在りと爲せり。既定計畫以上に軍艦の増加を行はざることに関し一九一〇年十月に於て、ドイツよりイギリスに對し、此點に於てイギリスが如何なる約束を爲し得べきやを問ひ、イギリスが未だ之に答へざる間に、ドイツ帝はイギリス大使に向ひ、ドイツは如何なる場合にも既定海軍計畫を擴張せざる旨の約束を爲すこと能はざるを告げたり。ティルピッツは當時已に、一九一二年に至り更に新海軍法を出すの計畫を蓄へたるなり。一九一一年五月九日ドイツ政府は、海軍法の定むる所に反せざる限り、軍備費の相互削減に關する提議研究の意思ある旨を提言せり。然れども之と同時に、上述の如く製艦の一時的速度徐緩の提議を撤回し、且つ該提言の行はるる以前に、ドイツ帝國の宰相が帝國議會に於て下記の如く公言する所ありたるより、ドイツ政府の新規の基礎に基き海軍協定を談判する趣意の上掲の提言も、イギリスの多く望を屬する所とならず。ベトマン・ホルウェツヒは、ドイツ帝國議會に於て、如何なる相互的監視も絶対に實行し難しとし、之を企圖するも、相互の不信用と不斷の葛藤とを致すに過ぎずと爲し、而して其隣邦が私かに軍備制限條約に依り許されたる比率を超える無きことを絶対に確かめ得るに非れば、一國の防禦手段を弱むるを得ずと爲し、一般軍備制限の問題を眞面目に考量する者は、人が人たり、國家が國家たる間は、該問題の解決し得ざるものなることを論結せざるを得ずと爲せるなり。イギリスの主張せる製艦狀況に關する情報の交換につきては、ドイツ政府も此問題を議するを認むるに至り、談判數月に互り、一九一一年六月一日のイギリスの通牒は、情報交換につき精細に規定すべきを説けるのみにて、他の問題に言



及せず。其後も此點の談判行はれ、一九一二年一月の終、總ての重要な點につきドイツの主張を容れたるイギリスの覺書がドイツに交附されたるも、ドイツ政府は之に答へずして止めり。

一九一一年五月ドイツ帝はヴィクトリヤ女王記念建設物の除幕式に參列するの招待を受諾してイギリスに赴き、此際のイギリス人民のドイツ帝に對する態度は、兩國の關係の改善を示せるの觀ありて、エドワード王の崩御の後兩國の關係が一層良好となるべきを思はしめたるも、次章に記述すべき第二モロッコ事件に依り、兩國の關係は甚大なる影響を受くるに至れぬ。

第二モロッコ事件に於て、イギリスがドイツに對し、外交上極力フランスを援助せるより、ティルピッツは此事件以後益々ドイツ海軍擴張の必要を説き、海軍法の有効期間の盡くべき一九一七年以前に於て、新海軍法を提議せんと欲し、ドイツ帝も此議に賛同せり。ペトマン・ホルウェツヒは海軍擴張がイギリスとの戰爭を誘致するの虞あるを説けり。ティルピッツが其意見行はれざれば辭職せんとせるより、ドイツ帝は一九一一年十一月中旬、新海軍法施行の爲めの費目を豫算案中に編入するを命ぜり。ペトマン・ホルウェツヒはロンドン駐劄ドイツ大使メッテルニッヒをして、イギリス政府が、例へば中立條約と言ふが如き或る一般的政治協定の談判に應ずべきやを探らしめたり。然るにメッテルニッヒはグレーの談れる所に依り、イギリス政府がフランス、ロシヤとの協商を害すべき何等の政治的協定をも、ドイツと結ぶの意なきを察知せり。此際グレーはドイツの中央アフリカに於ける植民國の建設につき、援助を惜まざるべきを説けり。ペトマン・ホルウェツヒは、ドイツが或る特定地域の獲得を求むるに非ずして、植民的發展につきイギリスの妨害を受けざるの安全を求むるものと爲し、又此際バグダッド鐵道問題に關して決定する所無かるべからずとせり。然れどもイギリスとの談判に於て、一定の提議を生ずるに至らず。ドイツ帝は海軍強からざれば植民地を維持し得ざるを説けり。ロシヤのベルシヤ方面に於ける行動が、動もすればイギリスとの協商の條項を無視する等の事ありたるより、イギリスに於て一九一二年の初頃より、ドイツとの製艦協定を行ふべきを主張する

者あるに至れり。同年一月二十八日に至り、イギリス政府は一九一一年六月以後停滯せる製艦情報交換の談判に關する覺書をドイツ政府に提出し、之と同時に、イギリス内閣員とドイツ帝國宰相との間に個人的懇談を遂げしむるの提議が、アトホスト・カッセルよりハムブルグ・アメリカ總會社取締役バルリンを経て、非公式にドイツ政府に提出されたり。イギリス側に於て此際談話の基礎と爲さんと欲せる所次の如し。曰くイギリスは海上の優越權を維持せざるべからず。曰くドイツの現在製艦計畫は、之を更に擴張すべからずして、出來得べくば之を縮小すべし。曰くイギリスは出來得る丈けドイツの植民的發展を援助すべし。曰くイギリスはドイツに對する攻撃的計畫又は結合に與らざるべきを約する協定を結ぶの提議に應ずべし。ドイツも亦上述する所と同様なる非公式の方法に依り之に答へ、ドイツ側もイギリスとの接近を歓迎し、談話の基礎につきても大體異議無しとせるも、一九一二年度の豫算に掲ぐる所は、ドイツ現在製艦計畫に含まれたるものと看做すべきを求めたり。メッテルニッヒは、イギリスが海上の優越權を維持すべきを談話の基礎と爲さんとするを以て、ドイツが新海軍法を拋棄せざる以上は、結局に於て談話も結果無きに終るべきを、當初より指摘せり。

イギリスはドイツの返答に對して、ドイツの製艦計畫は、イギリスをして新規の出費を必要ならしめざる如きものならざるべからずとせり。ペトマン・ホルウェツヒは、イギリスにして、苟もドイツに對する計畫、結合又は戰爭には、イギリスが加はらざるべき趣意の政治的協定を結ぶに意あらば、軍備費に關する協商は成り得べきを答へしめたり。

一九一二年二月ハルデーンはベルリンに赴けるが、製艦協定に關するドイツ政府の意向を探り、協定の基礎を求むるの任務を有したるもの如きも、協定を締結するの權限を有せざりしもの如し。二月八日ペトマン・ホルウェツヒと面談し、翌日ドイツ帝及びティルピッツと面談し、更に二月十日に於てペトマン・ホルウェツヒと面談せり。ドイツ帝は新海軍法案の内見をハルデーンに許し、ハルデーンに對して、政治的協約が成りて、公にせらるるに至らば、一九一二年に於て新艦一隻を起工す



るを止め、新海軍法に依り製造せんとする三新艦は、一九一三年、一九一六年及び一九一九年に於て起工することと爲すべしとせり。然れどもハルデーンは、新海軍法全體の拋棄を求むるのみならず、出來得べくば、舊海軍法に依る製艦の減少を求めんと欲するものなるを以て、ドイツ帝の新艦製造延期の提言を以て満足するを得ず。此際ティルピッツは、イギリスの二國標準主義を承認し得ざるを説き、ハルデーンは、協約成るとするも、必ずしも一定の比率を定むるを要せずと爲せり。ベトマン・ホルウェツヒとの會見の際、政治的協定が問題となり、ドイツ帝國宰相は、一方の國が他の一國又は數國と戰爭する場合に於て、他方が好意的中立を遵守し、且出來得るだけ戰爭の限局に努力すべきものとし、雙方の國が已に締結せる現行條約と兩立せざる範圍内に於ては、前記中立遵守義務は適用無きものと爲さんと欲せり。是れドイツをして、已に結べる三國同盟條約に基きて、オーストリア又はイタリヤを助けて戰爭に加はるを得せしむるも、イギリスとフランス、ロシヤとの間には未だ應援義務を明定する同盟條約を存せざるを以て、イギリスをして、ドイツがフランス又はロシヤと戰爭する場合に於て、中立を遵守せざるを得ざるに至らしむるものなり。ハルデーンはイギリスの到底斯の如き協約を結び得ざるを説き、一方が他方に對して、挑發を受けずして攻撃を行はざるべく、又他方に對する侵略的目的を有する結合に加はり、若くは是の如き目的を有する計畫、企圖に與かること無かるべき趣意の協約を結ぶことは、之を爲し得べきも、其以上の約束を結ぶを得ずと爲せり。然れどもベトマン・ホルウェツヒは斯の如き協約を以て満足するを得ずと爲せり。ハルデーンは製艦問題に關して、前日ドイツ帝が一九一二年に於て新海軍法に依る新艦一隻を起工することを止めて可なりと爲せるが、一九一三年に於ても起工を止め、一九一六年に於て始めて新海軍法に依る新艦を起工することと爲すを得ざるやを問ひ、ベトマン・ホルウェツヒは、該問題を以て専門的問題なりとして、之に對する返答を避けたり。植民問題に關して、ハルデーンは、ドイツがアンゴラの大部分をボルチュガルより得、又結局に於てベルギー領コンゴの一部を得ることあるも、イギリスは之に反對せざるべきを説き、バグ

ダット鐵道につきイギリスの満足し得べき協定成らば、ザンジバル及びベムバをドイツに割讓することをも辭せざるべきを説けり。而してティモールのボルチュガル領の部分はイギリスに歸すべきものと爲せり。ハルデーンは、ドイツが、其の満足し得べき植民的協定を結ぶを得ば新海軍法を拋棄すべきを思へる如きも、ドイツは極めて緊密なる一般的政治協定を得ること必要とし、且つドイツ帝及びティルピッツは、堅く執りて新海軍法の拋棄を肯せざるを以て、ハルデーンの使命は、單に製艦協定の困難を明にするの結果ありたるに過ぎず。

ハルデーンの猶ベルリンに在る際、二月九日海軍大臣チャーチルは、グラスゴーに於て、強勢なる海軍がイギリスに取りては生活上の必要物にして、ドイツに取りては奢侈物に過ぎずとの言を爲したることは、ドイツ人を憤らしめたり。ハルデーンの歸國後、ドイツの新海軍法に關して研究が行はれたる結果、之に依る新造軍艦の噸數及び攻撃力の著大なることが明白となり、製艦協定を得るの困難が益々明確となるに至れり。ドイツに於ても政治的協定の條件につきハルデーンの提議せる所に不満にして、ベトマン・ホルウェツヒは、ドイツの止むを得ずして戰爭を行ふ總ての場合に於て、イギリスが中立を遵守することを肯せざるを以て、新海軍法を犠牲にすることを得ずと爲せり。

ハルデーンの歸國後に於ても兩國間に談判猶行はれ、メッテルニツヒは協商の成否に關して悲觀説を有したるも、猶植民地問題に關するハルデーンの談話の結果につきドイツ政府に對して修正意見を述べ、アゾーア群島及びカプ・ヴェルデ群島の分割につき説く所あり。又植民地協定を確保する爲めに、少くとも三年間新艦製造を休止すべしとするの意見を述べたり。ハルデーンはメッテルニツヒに告ぐるに、内閣に於て植民地に關し問題を生じたることを以てし、又ドイツの新海軍法の研究の結果、單に新艦を多く製造せんとするに止まらずして、全艦隊の準備を加へ、著るしく乗員の數を増さんとするを見れば、更に編成變更の計畫を審ふるものと認めらるることを以てし、イギリスも其製艦計畫の規模を大にし、新たに巨額の支出を費



算に加へざるを得ずと爲せり。而して其の實行さるる場合に於ては、他の問題につきドイツと緊密なる協定を結ぶこと困難なりと爲せり。グレーはザンジバル及びベムバの割譲には、バグダッド鐵道に關する協定の成るを以て足れりとせずして、製艦の費用に關して協定の成るを要することを説き、先づ製艦協定及び一般的政治條約につき談判し、箇々の植民地に關する談判は後日に譲るを可なりとせり。ドイツ帝及びドイツ帝國宰相は、グレーの説く所がハルデンのベルリンに於て述べたる所と異なれりとし、ハルデンは、乗員の増加に對しても、植民地に關する條約を同時に締結することに對しても、異議を唱へざりしを説けり。テイルビッツは又新海軍法に依る乗員増加が該法に現はれたる以外の目的を有すること無きを辯じたり。三月五日の覺書に於て、ドイツ政府は、ハルデンと協定せる基礎に依りて談判せんとするに、イギリス政府が談判の基礎を變更せんとするものと爲せり。ハルデンは、ベルリンに於て乗員に關して何等言ふ所無かりしは、新海軍法を充分に研究するの遺無かりしが爲めと爲せり。グレーもイギリス政府がドイツとの協定につき其意思を變更すること無きを説けり。

ドイツ帝は、三月五日の覺書をイギリス政府に交附せるの報告を待たずして、海軍の要求をも含める防備提案を公表せんとし、而してドイツ帝のメッテルニッヒに送れる電報中に於て、若し是が爲めにイギリスが其軍艦を地中海より北海に移すことあらば、ドイツは動員を行ふべきを説けるより、三月八日ベトマン・ホルウェツヒは辭表を提出し、戰爭を誘致し得べき此種の措置につき責任を負ふ能はずと爲せり。ドイツ帝は、絶対に平和的にして、イギリスとの協商を求むるの態度を執るべきを約し、ベトマン・ホルウェツヒをして其職に留まらしめたり。

ベトマン・ホルウェツヒは猶イギリスとの協定を求めんとして、ハルデンの提議せる政治的條約案に追加を爲し、一方と第三國との間に切迫せる葛藤の起れる際、適當の時期に於て他方との協議が行はるべきことと爲さば、可なりとせり。然るに三月八日に於てドイツの海軍提案が新聞紙上に公にせられたるより、イギリス政府は最早新海軍法に關する變更の行はれ得ざ

るべきを察し、協商の成り難きを思ふに至れり。グレーは三月十四日ドイツの政治的條約案を容るる能はざる旨を答ふると同時に、政治的協定に關する最後の提議を爲したるも、ドイツが更に其海軍力を強めたるを以て、イギリスは在來のフランス、ロシアとの友誼關係を危殆に瀕せしむるを得ずと爲せり。而してイギリス、ドイツ兩國間の相互的信賴關係の回復の爲めには、下記形式の政治的協定を以て充分とせり。曰く、イギリスはドイツに對し、挑發せられざる攻撃を行ひ、若くは是の如き攻撃に加はること無かるべく、又ドイツに對し侵略的政策を追ふこと無かるべし。イギリスの現在加はれる如何なる條約協商若くは結合に於ても、ドイツに對する攻撃が其主題となり、若くは其部分を成すこと無く、時機に於ても、イギリスは是の如き目的を有する協定に加はること無かるべしと。グレーはドイツの要求する中立條約が、フランスの感情を害すべきの故を以て、之を容るる能はずと爲せり。グレーは又植民地問題に關して談判するを拒むの意無しと説けり。然れどもグレーは此時已に製艦協定に關し望を絶てるもの如し。チャーチルはドイツ大使に對して、ドイツの新海軍法がイギリスをして多大の支出を爲さしむべきを以て、最早兩國間に協定を得ること困難なるべしと説き、又ベルリンに對して、軍備競争が繼續せば、二ヶ年間に於て戰爭起るに至るべしと説けりといふ。三月十八日チャーチルは下院に於て、イギリスが戦艦につきドイツに對し六割の優勢を常に維持せざるべからざるを説き、兩國が試みに一ヶ年間、新艦製造を休止するも可なりとせり。然れども製艦休止の提議は公式に行はれずして止めり。

三月半頃に於て、ドイツ帝國宰相は猶イギリスとの協定の望を絶たずして、政治的條約に關する自己の提案がイギリスの容るる所とならば、製艦要求の低減を關議の問題と爲さんとするの意圖を抱きて、新海軍法の公式の發表を、政治的協定の問題に關するイギリスの返答を受くる迄待たんことをドイツ帝に請へり。然るにグレーの返答及びチャーチルの所言に依り、ベトマン・ホルウェツヒは失望するに至れり。ドイツ帝はロンドンに在るメッテルニッヒに親しく打電して、イギリス政府がハル



ドイツの情願せる談判の基礎を棄て、政治的條約の締結を強硬せしめたりとし、此に至りては全然新規なる基礎に依り談判するの外無しとし、フランスを加へたる攻守同盟を問題と爲すべきものとせり。ドイツ帝國宰相は是の如き訓電の發せらるることを妨ぐる能はざりしも、別にメッテルニッヒに宛てて訓電を發し、防禦同盟に近き協定を結び得るに非れば、新海軍法の主要なる部分の拋棄をドイツ帝に勧むる能はずと爲せり。然るに其後メッテルニッヒの報告に依りて、新海軍法全體を拋棄するに非れば、何事をも行ひ得ざるを見て、三月十八日、ベトマン・ホルウニツヒは、一時全然談判を中止することを訓令するに至れり。其後三月二十日グレーはメッテルニッヒに對して、植民地問題につき猶談判するの意ありと告げ、又製鐵問題に関する感情が静まれる後に於て、政治的協定をも議するの意ありと告げたり。然るにメッテルニッヒはイギリスがドイツの製鐵を制限せんと欲するも、自己は拘束を受くるを欲せずして、如何なる國にても、苟も軍備を加へんとするものあるときは、イギリスは新に軍備を加ふるの自由を保有せんとするを以て、ドイツ、イギリス間に協商成るを得ざる旨を、イギリス政府に告ぐべきの訓令を受けたり。メッテルニッヒは、猶イギリスをしてドイツの唱ふる政治的條約の形式を容れしめ、依りて製鐵協定を致さんと試みたるも、三月二十九日に於て、グレーは、イギリス内閣が曩にイギリスの主張せる協定の形式を離るるの意なきを告げ、メッテルニッヒは、ドイツの之に満足して製鐵協定を行ふを諾すること、到底有り得ざるを告げたり。然れども全然協商の道を塞がざらんと欲して、一定の時期に於て製鐵狀況に関する情報を交換するの問題及び植民地問題につきて談話を續けたり。然るにドイツ政府は、中立條約及び製鐵制限協定の談判は挫折せるものと認め、四月十五日に於て新海軍法並に陸軍擴張提議を帝國議會に提出し、五月十四日に於て總て通過するに至れり。

イギリスに於ても、海軍競争を制限するの企圖の成效せざりしより、ドイツの新海軍法に應ずるの計を爲し、五月に於て首相及び海軍大臣は相携へてマルタ島に赴き、キッチナーをエジプトより迎へて、之と地中海問題を議し、海軍大臣は七月二十一日下院に追加豫算を提出し、而してドイツの新海軍法に應ずる爲め、イギリスが其職能をイギリス本土の沿岸に集中するの必要あるを説けり。九月に於てフランスはオーストリア及びイタリヤの聯合艦隊に當らしむるの必要より、第三艦隊をブレストより地中海に移し、而してイギリスの地中海艦隊はイギリス本土の沿岸に移り、イギリス、フランス兩國の間に於て、海軍力の排擠に關し、互に分擔を爲し、此點に於て相援助するの關係が生じたり。一九一二年十月下旬に於て、グレーとフランス大使カムボンとの間に、後章に於て記述すべき公文交換を見るに至れり。

### 第三十四章 第二モロッコ事件及びイタリヤ、トルコ間の戦争

アルジェジラス會議に於てフランス及びイスパニヤが八開港の警察の編成を分擔し、是の如くして、大體に於て其間に勢力地域を分てるも、開港に於ける警察の編成は遅々として行はれず。モロッコの内地に於ても秩序の確立困難にして、一九〇六年秋の擾亂の際、フランス、イスパニヤが軍艦をタンジニアに派遣せることあり。一九〇七年三月末に於て、フランス人の一醫師が殺害に遭ふや、フランスは此際晉に損害賠償を要求するに止まらずして、在來よりの諸懸案の解決及び改革の促進を要求するに至り、アルゼリヤに近きウヅジャ市を占領せり。又カサブランカ港に於てヨーロッパ人に對する暴行の行はるや、一九一七年八月、フランスは軍艦を上陸せしめたり。是に於てモロッコの東西兩部に於てフランスの占領を存するに至れり。モロッコの「サルタン」アブデュル・アズに對してムライ・ハフィッドが叛旗を擧ぐるや、フランスは當初「サルタン」の擁護を試みたるも、ムライ・ハフィッドの勢盛にして、一九〇八年六月末に至り首都フェズに其勢力を及ぼすに至れり。八月末ドイツはムライ・ハフィッドをモロッコの君主として承認する事に關し、アルジェジラス決議署名國に通報し、自から



主動的地位を執らんと試みたるも、九月中旬フランスが承認の條件を提出し、列國はフランスの提議を容れ、ムライ・ハフ  
イッドがアルジェジラスの決議の尊重を誓へる後、始めて之に承認を與へたり。

一九〇七年より翌年に互り、フランスはモロッコに關しドイツとの協商を計り、ドイツ人をして經濟的企業に關係せしめ、  
之をしてモロッコに關する政治的野心を抛たしめんと試みたり。然るに一九〇八年九月のカサブランカ事件に依り兩國間に危  
機を生じたり。同地駐劄のドイツ領事館員が、フランス占領軍の外國人隊の脱營者を保護し、九月二十五日、領事館書記生が  
脱營者を伴ひてドイツ船に赴かんとする途中に於て、端艇の覆るに遭ひ、上陸せんとして、六名の脱營者は、領事館員の抗議  
に拘はらず、フランス占領軍に屬する港津官憲の爲に捕へられ、拘禁を受けたり。ドイツはフランスに對して、領事館員の國  
際法上の特權の侵犯に對して速に救済を與ふることを要求し、フランスはドイツ領事の權限越越の行爲に關し、ドイツ政府が  
之が否認を爲し、且つ領事を譴責するを求む。二週間後、ドイツは事件を仲裁裁判に附すべきを提議し、フランスが之を承認  
せる後に於て、ドイツは更に、フランスが先づカサブランカ港津官憲を處罰し、拘禁されたる三名のドイツ人の脱營者を釋放  
するを求め、其の實現されたる後に於て、ドイツは其領事館員を處罰すべきを説けり。フランスは事件を仲裁裁判に附するこ  
とが、已に兩國の間に決せられたる旨を答ふ。ドイツは更に、速かにドイツ人たる三名の脱營者を釋放するを求め、且つ二人  
の所屬被害領事館員の爲めに賠償を求む。該要求提出の翌日、ビュローは領事館員に關する損害賠償の要求が容れられざると  
きは、ドイツ帝がパリ駐劄ドイツ大使を召還すべしと稱せり。フランス政府は屈せずして、仲裁裁判の決定に委せざるべから  
ざるを主張せり。十一月六日に於て、ビュローは更に、仲裁裁判開始前、脱營者の逮捕につき辯解を爲すことをフランスに求  
めたるも、フランス政府の聽く所とならず。十一月七日イギリス及びロシアの大使は、フランス外務大臣ビションに對して、  
各、其本國政府がフランスの政策を是認し、之に贊同する旨を告げたり。其後二日にして、オーストリア大使はフランス外務

大臣に對して、オーストリア帝が問題の和解的解決をドイツ帝に勸めたる旨を告ぐ。是に於て危機去り、十一月十日、フラン  
ス、ドイツの間に於て、カサブランカ事件を仲裁裁判に附するの宣言が調印されたり。其後一九〇九年五月二十二日のヘーグ  
常設仲裁裁判所の判決に於て、占領軍の管轄權がドイツ人に對するドイツ領事館の管轄權に勝つべきものと爲されたるも、外  
國人が治外法權を有するモロッコに於て、管轄權の問題が難澁にして、卒然之を明解し難きの故を以て、ドイツ領事の所爲も  
亦尤むるを得ずと爲せり。但し現場に在りしドイツ領事館員は、重大にして明白なる過失を犯せるものと認められたり。又フ  
ランスの軍憲は、其行動不正ならずとせられたるも、ドイツ人の脱營者がドイツ領事館の保護を受くるに當り、フランス軍憲  
は、出來得べき丈け現實の地位を尊重し、逮捕拘禁を行ふに先ち、管轄權の問題の決するに至る迄、ドイツ領事館に留置する  
ことを提議すべかりしものと爲され、不必要なる暴力を加へたるものとして非難を受けたり。

ドイツ帝はフランスとの協商を求め、一九〇九年一月二十六日ドイツ外務省より、フランス大使に對して、ドイツがモロッ  
コに於て經濟的の目的を有するに過ぎざるを説き、其後兩國の間に談判行はれ、二月八日に至り、モロッコに關する宣言が調  
印されたり。フランスはモロッコの保全及び獨立を維持すべく、又經濟上の平等を保護すべく、從つて、ドイツの商工業上の  
利益の妨害を爲すこと無かるべしとし、ドイツはモロッコに於て單に經濟的利益を求むるに過ぎずとし、フランスの特殊政治  
利益が秩序並に國內安寧の鞏固と緊密關係を有するを認め、是等利益の妨害を爲さざるべきことに決意せりとし、兩國は自己  
又他國の爲に經濟上の特權を設くべき性質の措置を自から行ひ、又は他の之を行ふを獎勵すること無かるべく、而して兩國  
の各、確め得たる事項につき、兩國の國民をして互に相與からしむることを計るべき旨を宣言せるなり。同日交換せるドイツ  
外務大臣とフランス大使との間の書翰中に於て、ドイツがモロッコに關して向後政治關係上私利を求めざるの態度を執ること  
は、ドイツ人の已に占め得たる地歩を害すること無かるべしと爲し、ドイツ人が向後モロッコに於て政治的性質の公務に關す



る地位を得んとして競争すること無かるべく、又双方の利益の相協同する場合に於て、フランスの利益に重きを置くべきを認むるに外ならざるものと爲せり。

一九〇九年二月の協商に依り、ドイツ、フランス兩國の關係が改善すべきを思はしめ、經濟的企業につき談判行はれ、同年十月頃鐵山、土木、鐵道等に關して一旦協定成りしも、其實効を擧ぐるを得ず。一九一一年の鐵道關係の協定に對して、フランス政府が容易に同意を與へず、又一九一〇年の末に結ばれたるコンゴ企業協定の協定も、内閣の更迭の爲めフランス政府の方針變じ、承認を得ざるに至れり。一九〇九年二月の上述の協商は、政治上フランスを利する所なく、又經濟上ドイツを利する所無くして止め、

一九一一年三月成れるフランス新内閣に於て、第一モロッコ事件の際ドイツに抗爭せるデルカッセが、海軍大臣として勢力を有せり。同年四月頃フェッズ附近の叛徒の勢猖獗にして、フランス政府はヨーロッパ人の生命財産を保護するの必要ありとし、「サルタン」の求に應ずると稱して、軍隊をフェッズに送らんとせり。ドイツはフランス兵が一旦フェッズに入らば、「サルタン」を支持する爲め、占領が永久的となり、「サルタン」は獨立君主と看做すを得ざるに至り、アルジェジラス決議書の約束の前提が消滅するに至るべしとす。ドイツ外務大臣キデルレンは、五月上旬已に、フランス人がフェッズを占領せば、之に對してフェッズ滞在の期間を問ひ、該期間内に撤退を實行せざるときは、アルジェジラス決議書の違反として代償を求めべく、單純なる抗議は效果無かるべきを以て、アガディールを收めて、代償を得る爲めの質物と爲すべしとせり。ビュロー及びドイツ帝相次で此意見に賛成するに至れり。ドイツ外務大臣は、一九〇九年の協商が、フランスに對してモロッコに於ける政治的勢力を認めたるも、直接の権力を行ふことを認めたるに非ずと稱せり。

フランス軍は五月二十一日フェッズに著し、該地を占領せり。イスパニヤも、フランスの軍事行動に依り、一九〇四年の秘

密條約に基く行動の自由を享有するに至れりとし、軍隊を其勢力地域内に上陸せしめたり。

フランス軍が猶フェッズに進むの途上に在る際、ベルリン駐劄フランス大使カムボンは、フランス、ドイツ間に一般的の協商を行ふべき旨をビュローに語り、其後六月中旬に至り、キデルレンとキッシンゲンに於て談話し、其際カムボンは一九〇四年のイギリス、フランス間の協商の如き一般的協商を結ぶことを提議せるが如く、又ドイツ外務大臣はモロッコに對する代償を得るの必要を説き、アフリカのフランス領の土地、就中フランス領コンゴが話頭に上れるもの如し。カムボンは、ドイツがモロッコの一部を求むることありとするも、フランス人は斷じて此種の要求に應ずるを得ずと爲し、他の方面に於て代償の談判を行ひ得べきを説けるが如し。カムボンはドイツとの協商に關する本國政府の意見を問ふ爲め、一旦歸國せるも、暫時の間、フランス政府よりドイツに對して提議する所無かりしもの如し。

ドイツは軍艦バンテル號をアガディールに派遣し、七月一日、フランス、イギリス、イスパニヤに對し軍艦派遣を告げ、モロッコの南部の動搖に因り、靜謐の状態の回復するに至る迄、臣民及び保護民の生命財産を保護し、該地方に於けるドイツの重要な利益を擁護する爲めに、軍艦を送れるものと爲す。ドイツ大使は、イギリス外務大臣に通牒を呈示せる際の説明中に於て、フランス、イスパニヤがモロッコに於て諸所に兵を配置せるを以て、アルジェジラス決議書は死文となれりとし、ドイツはフランス及びイスパニヤと、モロッコ問題の確定的解決を行はんと試むるに意ありと爲せり。アガディールは當時開港にあらずしを以て、該地にドイツ臣民の在る理なく臣民保護は口實に過ぎずして、軍艦派遣に依りフランスとの代償の談判を進捗せしめんと欲せるに過ぎざるもの如し。

イギリスに於て外務大臣グレーは、七月四日ドイツ大使に告ぐるに、イギリスがモロッコ問題につき無頓著なるを得ずして、フランスに對する條約上の義務並にモロッコに於けるイギリスの利益を考量せざるを得ざることとを以てし、ドイツの軍艦派遣



に依り新事態が生じたりと爲し、將來の事態の推移が一層直接にイギリスの利益に關係すること有り得べきを説き、イギリスを除外して新協定の成るを認めずと爲せり。グレーの上述の通告に對し、ドイツ政府が何等の返答をも與へざりしことは、グレーの見て以て外交上の常規を逸すると爲せる所なり。七月十二日ベルリン駐劄イギリス大使のドイツ、フランス、イスパニヤ三國間の協議につき問ふ所あるに對して、ドイツ政府はイギリスを除外して三國間に協議を爲すの意圖を有せざる旨を答へたり。

七月九日に至り、ドイツ外務大臣キデルレンとフランス大使カムボンとの間に談判開始され、ドイツ外務大臣はモロッコに於ける領土上の主張を拋棄するの意あるを告げ、代償につき説く所あり。而して談判に他國を交ふるときは、アルジェジラス決議書の總署名國を加へざるを得ざるに至るべきを説き、フランス大使も之を争はず。キデルレンはキッシンゲンの談判の繼續として談判を行はんと欲せるも、カムボンは、アガディール軍艦派遣の事ありたるより、事態變更せりと爲せり。キデルレンはドイツのモロッコ拋棄は、例へばコンゴの如き地方に於て代償を得るに非れば、國論の是認する所とならざるべしと説けり。ドイツ、フランスの雙方が、對手國をして先づ一定の提議を爲さしめんと計れるを以て、談判は長きに互れり。七月十八日に至り、ドイツ外務大臣は、サンガ河より海に至る迄のフランス領コンゴの割讓を求めたり。但し北カメルーン及びトーゴランドをフランスに與ふべしと爲せり。カムボンは、フランス植民地の海より遮斷さるるに至ることを認め得ずと爲す。

ドイツのフランス領コンゴに關する過大の要求は、談判の破裂を恐れしめたり。イギリス政府はフランス政府に對して、談判破裂の際國際會議を招請することに關してフランスの意見を求め、七月二十日フランス政府は、イギリスがアルジェジラス決議書署名國の會議を招請することに關して異議を有せずとし、モロッコの土地をドイツに割讓する如きは、フランス、イギリス間の一九〇四年の協約並にフランス、ドイツ間の一九〇九年の協約に反すと爲せり。同日フランス外務大臣ツ・セルヴ

は、海岸よりサンガ河に至る迄コンゴを割讓する如きは、之を爲し得ざる旨をカムボンに打電し、然れどもフランスは境界の変更の談判に應ずるの意ありと附言せり。イギリスは、ドイツ、フランス間の談判が行詰まる如き場合に於て、イギリスが國際會議を開くの提議を爲すに當り、之を承認するの意思あるや否やに關して、ドイツの意向を探らんとせるに、ドイツ政府の之に對する返答は、全然決定的ならざりしが如きも、國際會議を快諾するに至らざりしもの如し。

フランス外務大臣がドイツ大使シェーンに對し、ドイツの過大なる要求を以て眞面目のものと見るを得ざる旨を説けることに關聯し、ドイツ外務大臣キデルレンはカムボン向ひて、フランス外務大臣の慎重を缺けるを尤め、若し談判が不可能となれば、ドイツは行動の自由を回復すべく、アルジェジラス決議書の完全なる適用を要求し、必要あれば、結局まで進むの覺悟ありと稱せり。當時ドイツ帝は平和の攪亂を欲せざりし如きも、キデルレンは、談判不調とならばドイツが開戦の意思あることを、フランス政府をして感ぜしめ得ざれば、何物をも獲得し難しと爲せり。

イギリスに於ては、ドイツがモロッコに占據し、イギリスの貿易航路の側面に海軍根據地を作るに至ることを妨げんと欲せり。ドイツがフランスの他の植民地の割讓を受くることは、イギリスも之に反對せざるも、ドイツがコンゴに於て其全部又は大部分を要求するを聞きて、談判破裂の起り得べきを見、談判破裂の結果、ドイツが依然アガディールに占據すべきを思ひ、憂慮する所あり。七月二十一日グレーはドイツ大使に對して、ドイツ、フランス間の談判が不成效に終らば、ドイツ人がアガディールに滞在すべく、滞在長ければ愈撤退を困難ならしむる事情を生ずべく、イギリスは自己の利益を保護する爲め何等かの措置を執るの必要に迫らること起り得べしと爲せり。同日大藏大臣ロイド・ジョルジは其演説中に於て、イギリスの利益に大影響ある事項につき、強國間の關係上、イギリスが度外視せらるる如きを忍容し得ずとし、是の如きを忍びて只管平和を求むる如きは、イギリスの如き強大國の堪ふる能はざる庸辱なりと説けり。ドイツ人はイギリス大藏大臣の此言を以て、イギ



リスがドイツの植民的及び通商的發展を阻害せんとするに急なるを認するものと爲し、深く之を憤れり。

ロイド・ジョルジの演説後、七月二十四日ドイツ大使はイギリス外務大臣を訪ひ、ドイツのアガディール軍艦派遣の目的とする所終始變更無しとし、一人の兵士も上陸すること無しとし、ドイツはモロッコの沿岸に軍港を設け、又は土地を得るの意圖を抱けること無しとし、ドイツはフランスがアルジェジラス決議書を厳守するか、然らざればドイツと談判を爲すを要求するものと爲し、ドイツ政府のモロッコに於てフランスの行爲に反対するの權利を放棄するに代へて、植民地に於て代償を求めんと欲する旨を説けり。而して談判破裂するも、ドイツはモロッコの土地に關して意圖する所無きを説くに至り、唯其際に於ては、アルジェジラス決議書の履行を求めんとするに外ならずと爲せり。グレイが、議院に於ける質問に接する際には、一人の兵士も上陸すること無き旨を答へ得べきやと問へるに對して、翌日ドイツ大使は答ふる所ありて、前日の通信は秘密なるものとし、イギリス大蔵大臣の彼が如き演説ありたる後に於て、アガディールに關して説明を與ふるは、ドイツの威威に適せずと爲し、議院に於て前日の通信を公表することを拒めり。然るに七月二十七日に於て、ドイツ大使は極めて穩當なる通信を爲すに至り、同日イギリス首相アスキスは、ドイツの希望に應じ、議院に於て、フランス、ドイツ間の談判の成效を切望する旨を演述せり。

ドイツは第二モロッコ事件の際、第一モロッコ事件の際と異にして、モロッコ問題に關し其の國際的性質を高調すること無く、ドイツの得べき代償の問題に重きを置けり。ドイツはモロッコに占據することのイギリスの反對を招くべきを知れるを以て、モロッコ以外に於て代償を求めんとせらるも、アガディールに軍艦を派遣するに當り、當初より該港に占據するの意思無きことを確言せば、フランスを威脅して高價の代償を拂はしめんとするの目的を達し得ざるを以て、イギリスに對しても、當初モロッコに占據するの意思無きことを明言するを避けたるより、イギリス人の憂慮を招き、大蔵大臣ロイド・ジョルジの上達

の演説を招けり。イギリス大蔵大臣の該演説は、一方に於て、ドイツ人を惹るに至らしめたるも、他方に於て、ドイツのフランスに對する要求を輕減せしめたり。キデルレンは、前には海岸よりサンガ河に至るフランス領コンゴに對する要求を以て、變改を許さざる所と稱したるも、ロイド・ジョルジの演説ありて後は、妥協的態度を示すに至り、八月に入り、ドイツの要求の主要點が、其のカメルーン方面の領地をコンゴ河に觸接せしむるに在りと爲し、コンゴの沿岸地に對する要求を放棄するに至れり。フランスの首相カイヨは、八月中旬自から外交の局に當り、ドイツに提議すべきモロッコ及びコンゴに關する提案を定め、九月上旬よりカムボンをしてベルリンに於て談判を再開せしめ、ドイツ外務大臣は、モロッコに關するフランスの提議を容れたるも、コンゴに關するフランスの代償の提議に満足せず。九月八日キデルレンはモロッコに關する對案を示せるが、カムボンは之を以て、經濟上の保障を得るの口實の下に、モロッコに於て地歩を占めんとするの企圖と爲し、談判が危機に瀕するに至り、ドイツに於て經濟界の恐慌を生ぜり。其後キデルレンも妥協的態度を示し、モロッコに關する條約案は、十月十一日を以て其の實質上の協定を得、コンゴに關する條約案は、十一月二日を以て其の實質上の協定を得、十一月四日に至り此等兩條約の調印を見るに至れり。是に於て四ヶ月に互れる談判が終了せり。十一月末に至りドイツ軍艦はアガディールを去れり。一九一二年三月のフェッズ條約に依り、モロッコの「サルタン」が、フランスの保護關係の下に立つことを認むるに至れり。

モロッコに關する條約に依り、ドイツはフランスのモロッコに於て勢力を樹立するを認めたるに對して、單に關稅率の均等維持を約せしめ得たるに止まれり。而してドイツはコンゴ地方に於て著大なる代償を求めんとせらるも、終に其の目的を達するを得ずして、カメルーンの東境及び南境に沿へる幅員總計十萬平方哩の帶地を割讓せしめ、又コンゴ河に達するの道途を確め得たるに止まれり。第二モロッコ事件の經過に依り、ドイツが他の強國に對し脅威を加へて、其意思を行はんとし、世界



大戦を招致することを避けざるものと思惟せらるるに至り、協商諸國のドイツに對する警戒心が強められ協商國間の團結の益、固きを致せり。

第二モロッコ事件の反響として、イタリアのトリポリ占領を見るに至れり。イタリアは、諸強國との協商に依り豫めトリポリ占領の承認を確めたるも、三國同盟中のドイツ、オーストリア二國が、イタリアのトルコに對して積極的行動を執るを喜ばざるを知り、トリポリ占領の實行に躊躇せり。然るにフランスのモロッコに於ける行動並にドイツの軍艦バンテル號派遣等に依り、イタリアは其決意を固むるに至れり。イタリアは當時已にバルカンに於て事件の起るべきを豫想し、該事件の起る際に於ける行動の自由を保有せんとし、且つオーストリアが其際の代償として、已にイタリアの自己の有と思惟せるトリポリを提供する如き事の起るを防がんとするの底意を有せるもの如し。一九一一年八月下旬に於て、イタリアは諸強國に對し、トリポリに於ける不斷の不快事故を終止せしめ、トルコをしてイタリアの利益を尊重せしむるの意圖あるを告げたり。トルコはドイツの調停を求めて、イタリアが強力手段に出でざるときは、トリポリに於て廣汎なる經濟上の利益を許與すべきことを提議せり。九月二十八日イタリアは、其國民の虐待を受け、其通商の侵害されたることを口實として、最後通牒をトルコに與へ、翌日宣戦を行へり、十月五日トリポリ市占領され、其後幾許も無く沿岸の要地が占領されたり。

ドイツはトルコの歡心を收むるを必要とし、其同盟國たるイタリアのトルコに對して事を起すを喜ばざりしが、戰爭開始の後幾許も無く、ドイツは、イタリアをしてトリポリに於て行政の實權を收めしめ、トルコ帝の形式上の主權を認めしめ、トリポリを併合前のボスニヤの地位に置くことを提議せるも、此際トルコの容認を肯せる所は、一時的占領又は租借に過ぎず。其後イタリアがトリポリを占領するに及び、トルコ帝の形式上の主權をも、之を認むるを肯ぜざるの意を明示せり。

十一月五日イタリアはトリポリの併合を宣言せり。トルコは之が割讓を認めず。イタリアはトルコを屈服せしむるの手段に

窮せり。一九一二年春イタリアはエーゲ海に於けるサモス、ローツ及び其他のトルコ領島嶼を占領せり。オーストリアはイタリアの勢力を加へんとするに平かならざりしが、エーゲ海の島嶼の占領ありてより、三國同盟條約に基く代償問題を提起せり。然るにドイツの勸告ありて、戰爭終了後まで、該問題を延期することと爲せり。オーストリアは、イタリアに對する反目の情よりして、一時ロシアに接近せんとするに至れり。

戰爭中イタリアは、チュニスに向はんとするフランス船に就き戰時禁制品の搜索を爲せる事件の爲め、一時フランスと軋轢するに至れり。一九一二年十一月三國同盟條約更新されたり。是より先き、トルコは、バルカン半島に於て戰爭の起らんとするを見て、急遽イタリアと媾和せんとし、十月十五日のウーシー媾和豫備條約に依り、トリポリの割讓を認めたり。イタリア、トルコ間の戰爭は、バルカン戰爭を誘致する直接の原因となれり。

### 第三十五章 第一及び第二バルカン戰爭

ロシア政府はボスニヤ併合事件に關する屈辱の念に堪へず、又エーレンタールのバルカンに於て更に事を謀るを防止せんと欲す。是に於てロシア政府は、其指導の下に、バルカン諸邦をして聯合せしめんと計れり。バルカン聯合の當時の難關は、セルビアとブルガリアとの主張の調和を致すことに在りたり。ロシアは、マセドニアの大部分をブルガリアをして有せしめ、セルビアをして、オーストリアのボスニヤ・ヘルツェゴヴィナ、ダルマシヤ等の土地を取りて、自ら償ふの期望を抱かしめ、以て聯合を成就せしめんと欲せり。ロシアはブルガリアの離叛するに至ることを制せんとして、一九〇九年十二月之と秘密軍事協約を結び、ロシアがドイツ、オーストリア、ルーマニア又はトルコと戰爭する場合には、ロシア帝が希望せば、ブルガリ



ヤの全兵力を動員し、豫定の計畫に従ひ、ブルガリヤ兵をロシアの統率の下に置くべしとす。而してブルガリヤが挑發する所無くして攻撃を受けたるときは、ロシアは應援を爲すべしとす。ルーマニヤは、ブルガリヤが領土を増加する場合には、必要なれば強力を用ゆるも、代償を求めんと欲し、出來得べくば、シリストリヤ、ヴァルナ線まで領土を擴げんと欲せり。オーストリアはルーマニヤの同盟國たるも、ブルガリヤをも味方とせんと欲するを以て、ルーマニヤの強て代償を求めんとするの計畫に賛成せず。ドイツ帝はブルガリヤを以て、半ばスラヴ的の國家なりとし、ドイツ人種とスラヴ人種との間の衝突の際、深く之に依頼するを得ずと爲し、一九〇九年十一月オーストリアに對して、トルコ及びルーマニヤと堅き約定を結び、以てロシアの計畫するバルカン聯合に對抗すべき強勢なる結合を作るべきを勸告せり。地方に於てロシアは、ルーマニヤをして、オーストリアの土地を取りて領土を擴ぐるの期望を抱かしめて、之をバルカン聯合に加はらしめんと欲せり。

ロシアは、バルカンに於てオーストリアを孤立せしむる爲め、イタリアを援け、之を自己及びバルカン諸邦と接近せしめんと欲し、一九〇九年十月下旬ラコニギに於てイタリア王と會見せり。ベトマン・ホルウエツヒ及びエーレンタールは、該會見の以前に於て、堅き協定に依り、イタリアとオーストリアとを結合せしめんと努力し、十月半頃に於て、交換すべき書翰の案文が確定するに至れり。該秘密書翰案に於て、オーストリアが、バルカンに於ける現状維持の困難なるに依り、ノヴィパザール州の一時的又は永久的占領を行はざるを得ざるに至る場合には、事前にイタリアと協議し、且つ代償をイタリアに與ふべきを約せんとし、兩國はバルカン問題に關して、其中の一國が全然同等の基礎に依り参加せざる協定を、第三國と結ぶこと無きを約せんとし、又兩國中の一方が、第三國より、不干渉の原則に反し、又はバルカン地方、若くはアドリア海及びエーゲ海に於けるトルコ領の沿岸島嶼に於ける現状の變更に關する提議を受けたるときは、兩國中の他方に之を通告すべきを約せんとせり。然るにオーストリアが、未だ此秘密協定に關して充分の承認を與へざる前に、ラコニギの會見が行はれたり。

一九〇九年十月に於けるラコニギの會見の際、ロシア、イタリア兩國の君主は、バルカンに於て出來得るだけ現状を維持すべく、現状維持の不可能となるべき場合に於て、之に他國の權力を及ぼさしむること無く、民族主義の基礎に依るバルカン諸邦の發展を促進すべしと爲せり。是れトルコ分割の際に於て、獨りバルカン諸邦のみが、バルカンの土地の取得に與かるべきものと爲せるものなり。又兩國中の一方は、東部ヨーロッパ問題に關し、兩國中の他方が参加せざるときは、新たな條約上の義務を負ふこと無かるべきを約し、イタリアは、海峽問題に關してロシアに對し好意的態度を執るを約し、ロシアは、トリポリ問題に關してイタリアに對し好意的態度を執るを約せり。

十一月三十日及び十二月十五日の日附に係る書翰交換に依り、オーストリア、イタリア間に於て、一八八七年の三國同盟條約第七條を明確にし且つ之を完成するものとして、上掲の趣意の秘密協定が結ばれたり。然るに他方に於て、イギリス及びフランスは、ロシアの求に應じて、ラコニギの協商に賛同せり。イタリアは、ラコニギ協商を以て條約と同様なる拘束力を有せざるものと爲せるも、該協商に依り三國協商に接近するに至れり。

一九一〇年の初、曩に二州併合事件の爲め破綻を生じたるロシア、オーストリア間の外交關係が舊に復せり。エーレンタールは又一八九七年及び一九〇三年の協定に類するロシアとの新協定を結ぶに意ありたり。ロシアは舊協定を復するを欲せざりしも、(1)出來得べき限りのバルカンの現在状態の維持、(2)トルコの主権の下に在る民族の權利平等、(3)バルカン諸小邦の獨立、鞏固及び平和的發展等の三原則につき協定せんと欲せり。ロシアは、其のバルカンの現状維持を不可能と認むる場合に於て、國際的拘束を受くるを欲せざるなり。エーレンタールは、此等の原則を承認すると同時に、バルカン諸邦間に於て兵力的衝突を生ずる際、兩國の一方は、先づ他方と意見交換を行ひたる後に非れば、如何なる措置にも出づること無かるべき目を、互に相約することを求めたり。



一九一〇年十一月月上旬のロシヤ、ドイツ兩帝のポツダム會見の際、ドイツ帝國宰相ベトマン・ホルウェツヒはロシヤ外務大臣サゾノフに對して、オーストリアが膨脹政策を執ることありとするもドイツは之を助くること無かるべしとし、サゾノフは之に對し、ロシヤがイギリスと協商することありとも、ドイツを敵とする結合に加はること無かるべしとせり。近東に關して、サゾノフは、トルコの分割が平和を攪亂するの故を以て、トルコの維持を欲する旨を説けり。ベトマン・ホルウェツヒは北ベルシヤに於けるロシヤの政治的特殊地位を認め、ドイツが此方面に於ける鐵道の讓許を求むるの自由を拋棄すべきを説けるも、ドイツの商業に對して充分なる法律上の平等の保障を求めんと欲する旨を述べたり。サゾノフは又バグダッド鐵道の敷設に對して妨害を加へざるべきを説けるも、ベルシヤの領土を通過してテヘランに至る支線は、之が敷設權をロシヤの手に留保せんとせり。十一月十一日ドイツ帝が禮を返して、ロシヤ帝をウォルフスガルトンに訪へる際、ロシヤ帝は、其の主要なる利益が極東に存すると思惟するが如き風を裝ひ、シベリヤ鐵道及び黒龍江鐵道の複線工事の必要及び日本との戰爭を再開するの必要を説けり。此等の會合の際の話題中に於ける北ベルシヤ及びバグダッド鐵道關係の問題については、長きに亙る談判を経て、一九一一年八月、之に關する條約が調印されたり。

ロシヤは、フランスがモロッコに於て、又イタリヤがトリポリに於て、各、其志を遂げんとするを見て、一九一一年十月頃より海峽問題を提起せり。トルコがロシヤ軍艦に對して海峽を開放するに至らんことを求め、トルコにしてロシヤの此希望を容るるときは、ロシヤはバルカン諸邦をしてトルコとの友交關係を維持せしむるに盡力し、進でコンスタンチノブル及び其附近の土地の領有をトルコに保障することをも辭せざるの意向を漏らせり。十二月四日ロシヤが通牒を以て、ロシヤ軍艦に對して海峽を開放することを要求するや、トルコは、是の如きベルリン條約の重大なる變更は、他の署名國の承認を要する旨を答へたり。ドイツ、オーストリアはロシヤの要求を承認するを拒み、イギリス、フランスに至りても、ロシヤの軍艦のみに對し

て海峽を開放することを喜ばずして、ロシヤが其主張をトルコに強ひることを援助するの意無し。トルコは強硬の態度を持し、獨りロシヤ艦隊にのみ海峽通航を許す能はずと爲し、海峽に於ける總ての權利がトルコ人民及び其君主に專屬する旨を説けり。ロシヤ政府は形勢の非なるを察し、ロシヤ大使が其一存を以て學究的の論議を爲せるに過ぎざるものと稱するに至れり。此事件はトルコをして益、中央ヨーロッパ二國に近かしめたり。

バルカン諸邦が、トルコと戦ひて自己の國勢擴張の目的を達する爲めに、互に他の援助に俟つ所あるを思ふに至り、且つバルカン諸邦が其間に聯合を行ふときは、ロシヤの後援を得べきを思ひ、而してイタリヤ、トルコ間の戰爭起りて、トルコに對して行動するの時機到れりと爲せるより、ロシヤの希望せる如く、バルカン聯合の計畫が實現さるるに至れり。ブルガリヤの首相ゲショッフがバルカン聯合計畫の中心人物となり、セルビヤとの提携を求め、先づトルコを征し、後にオーストリアに抗せんと欲せり。一九一一年十月十一日ゲショッフがセルビヤ首相ミロヴァノヴィッチと會見して後、兩國の間に談判行はれ、一九一二年三月十三日秘密攻守同盟條約が締結されたり。締盟國の一方が第三國たる一國又は數國より攻撃を受ける場合には、他の一方は其全兵力を以て、攻撃を受ける締盟國を援助すべしとし、強國の一がトルコの統治の下に在るバルカンの土地を併合又は占領せんとする場合に於て、締盟國の一方が、其重大利益を侵さるるの故を以て開戦の理由を存すと認むるときは、他方締盟國は、全兵力を以て、該強國に反對して締盟國の一方を援助すべきものとし、而してトルコに於て、擾亂に因るトルコ帝國の危急、締盟國の重大利益の侵害又はバルカン現狀維持の危機を存する場合には、兩締盟國は直ちに其間に交渉を開くべく、兩國の意見一致し、且ロシヤの是認を受くれば、トルコに對して協同的に軍事行動を行ふべく、假令兩締盟國間に意見の一致を得ずとするも、締盟國の一方が上述の場合に該當するとして、トルコと開戦するときは、他方の締盟國は、少くとも好意的中立を守るべしと爲せり。而して共同作戰の際、戰勝を得たる場合の土地の分配に關しても約する所ありて、最も難問た



るマセドニヤ中央部分の所屬問題は、之をロシヤ帝の裁決に委することと爲せり。又同盟に關係する兩國の紛議は、總てロシヤ帝の裁決に依りて決すべきを定めたり。同年四月下旬に至り、兩國間に軍事協約が結ばれたり。是より先き、一九一二年四月頃、 그리스 は非公式にブルガリヤに對して防禦同盟締結を提議せることありしが、同年十月中旬より公式の同盟談判は、其後談判一時中止せるも、一九一二年四月中旬より談判再び開かれ、五月二十九日に至り、トルコの攻撃を受くるときは、互ひに全兵力を以て援助する趣意の防禦同盟條約が結ばれ、同年九月に於て軍事協約が結ばれたり。此際マセドニヤに於ける二國の將來の境界線につきては、協商を遂ぐるを得ざりし所なり。ブルガリヤとモンテネグロとの間に於ても、一九一二年六月以來談判行はれ、八月下旬協定成り、セルビヤとモンテネグロとの間に於ても、バルカン戦争開始の一ヶ月前頃に協定成れり。

一九一二年の初、モンテネグロ王がトルコに對して事を擧げんとせる際、ロシヤ帝はモンテネグロをして妄動すること無からしめんとせり。然るに同年四月アルバニヤ及びマセドニヤに於て新に動搖を生じ、八九月の頃、マセドニヤに於てブルガリヤ人及びセルビヤ人のトルコ人の爲に虐殺に遭へるものありたり。モンテネグロは夙に活動を始めたが、九月三十日ブルガリヤ及びセルビヤが動員令を發し、トルコも之に對して動員令を發し、 그리스 も更に之に對して動員令を發せり。

一九一二年の夏、諸強國はバルカンの形勢につき憂慮せり。ロシヤはバルカン戦争が其政策の必然の結果たるに拘はらず、當時軍備未だ整はざるを以て、事變の起るを尙早と爲し、之を恐れたり。ロシヤは又其自からコンスタンチノブルを收むることの他強國の認むる所とならざるを思ひ、又ブルガリヤをして該地を收めしむるを欲せざるを以て、ブルガリヤ人及び 그리스 人に對して、マリツツァ谿谷を以てトルコの新境界と認め、トルコをしてアドリヤノーブルを保有せしむべきを説けり。八月に於てオーストリアは、諸強國が相協同して、耶蘇教徒たる諸民族に對して正當なる保障を與ふべき進歩的分權政策の採用

をトルコに勸め、而してバルカン諸邦に説きて、靜かに是の如き政策の結果を待たしむべき旨を提議せり。フランスの首相ボアンカレは會、ロシヤに在りて、サゾノフに勸めて之を承認せしめ、他の強國も皆之を承認せり。然るにオーストリアが之に關して更に措置を執るに至らざる間に、事態が發展するに至れり。ロシヤはフランスを誘ひ、相共にブルガリヤ政府に對して妄動を警め、平和維持を計れり。フランスはトルコ及びモンテネグロに對して、共に其軍隊を境上より退却せしむることを勸めたり。八月十三日に於てオーストリアは、諸強國が協同してトルコ帝に勸告するに、其の新にアルバニヤに對して約せる所の改革の利益を、他のバルカン諸民族に及ぼすことを以てするを提議せり。

フランスの提議に基きて審議せる末、十月七日諸強國は、ロシヤ、オーストリア二國をして、バルカン諸邦に告げしむるに、破裂を致すべき如何なる措置をも、諸強國が是認せざるべき旨を以てせしめ、並に諸強國が改革の事に當るべく、戦争より生ずべき現状の變更は之を認めざるべき旨を以てせしむることに一致せり。

現状維持主義を強要せんとする上述の二強國の警告的通牒の受領前、十月八日モンテネグロはトルコに對して攻撃を開始せり。而して十月十三日ブルガリヤ、セルビヤ及び 그리스 の三國は、トルコに對してマセドニヤ改革案を提出し、十月十五日トルコは三國の提議を以て最後通牒と看做し、同月十七日三國に對して宣戦を行へり。同日 그리스 はトルコに對して宣戦を行ひ、翌十八日ブルガリヤ、セルビヤもトルコに對して宣戦を行へり。是に於て第一バルカン戦争が開始されたり。

トルコは直ちにイタリヤと講和して、バルカン諸邦に抗せんとせるも、トルコ軍初より振はず。セルビヤ軍はマセドニヤの西部のウスクップ、ノヴィバザール州及びアルバニヤの境界地方を占領し、 그리스 軍は南部マセドニヤを占領し、ブルガリヤ軍はコンスタンチノブルに向て進軍し、十月の末アドリヤノーブルに達し、トルコ軍は終にコンスタンチノブルを擁護するチャタルジャ線まで退却せり。十一月中旬に於て 그리스 軍はサロニカを占領せり。



諸強國は此形勢を見て、其の聲明せる現状維持主義の實現の困難なるを察し、時局の發展を觀望するの必要を認め、専ら戰爭の限局に努力を向けんとせり、ボアンカレは所謂不求私利の主義を唱へて、強國間の利害の衝突に依り一般平和の破るるに至るを防がんと欲し、該主義は諸國の認容する所となれり。

十一月下旬、トルコは諸強國の調停を求めたり。フランスは列國會議開催の提議を爲せるが、ドイツ、オーストリアが、先づ會議に關する諸強國の計畫につき一致を得るを必要と爲し、是に於てグレーは、イギリスがロシヤの會議に關する最小計畫を確かめドイツがオーストリアの最小計畫を確むるの議を提出せり。

オーストリアは、セルビヤが北アルバニヤの一部及びアドリヤ海の一港を得ることに反對せり。然るにロシヤは、セルビヤをしてアドリヤ海に於て一港を得せしむることを主張せり。セルビヤ人はアルバニヤに侵入し、デュラツォを占領せり。オーストリアはセルビヤをして占領を撤せしめんと欲す。

ロシヤは十一月八日イタリヤに求むるに、オーストリアに説きて、セルビヤにデュラツォ又は其他のアドリヤ海上の一港を與へしむることを以てせり。然れどもイタリヤ政府は、セルビヤの勢力のアドリヤ海に出づるを欲せず、且つ已にオーストリアとの間にアルバニヤの領土保全を約せるを以て、ロシヤの要求に應ずる意無し。

ロシヤは、セルビヤのアドリヤ海に進出するの主張を極力支持せんと欲せるも、イギリス及びフランスが此問題の爲めに窮局までロシヤを援助すること無かるべきを察し、セルビヤをして一港を有せしむることを断念し、鐵道聯絡に依りアドリヤ海に出づるの商業上の通路を確むることを以て満足すべきを、セルビヤに勧むるに至り、イギリスも亦セルビヤに對し同様の勸告を爲せり。

是より先きブルガリヤの戰勝の勢盛なるや、ロシヤは、ブルガリヤがコンスタンチノブルを占領するに至らんことを恐れ、

ブルガリヤに警告するに、ブルガリヤ軍がコンスタンチノブルに入らんと試むるときは、ロシヤは黒海艦隊をボスフォラスに進入せしむべき旨を以てせり。然るにブルガリヤ軍はチャタルダヤ嶺に於てトルコ軍の爲に支へられたり。ロシヤの此際の措置は、ブルガリヤ人をしてロシヤより離れしむるの一因となれり。

ボアンカレは所謂不求私利の主義を唱へ、強國の欲を制し、戰爭を限局することに努力し、十一月末ドイツが諸強國間の意見交換を提議せるに際し、大使會議をパリに開催することを提議せるも、ドイツ、オーストリアは、パリに於て大使會議を開くを欲せず、又先づ會議の議題につき協定の成るを必要と爲せり。此際グレーは、ロンドンに於て大使會議を開くの提議を爲せり。

ロンドンに於ける大使會議は、十二月十七日より開會されたり。會議の當初より、オーストリアはアルバニヤを以て獨立國と爲すべきを主張せるも、國際條約に依り、セルビヤに對してアドリヤ海に出づるの商業上の通路を與ふることを争はず、又ロシヤもアルバニヤを以て獨立國と爲すことを争はざるを以て、アルバニヤに關する會議の主要なる問題は、其北境及び東北境の問題、スクタリ問題並に南境の問題等に限らるるに至れり。大使會議は、バルカン諸邦間に調停を行ひ、又セルビヤ、モンテネグロに對して干渉を行へるも、主として強國間、殊にオーストリア、ロシヤ間の衝突を防ぐに努力し、是の如くして強國間の平和を確め、戰局を限定せんとせり。

ロシヤ、オーストリアの間に於て、一九一二年十二月頃より一九一三年三月頃に至る迄、危機生ずるの虞を存せり。一九一三年一月に於て、ロシヤがコーカサス境界に軍隊を集め、トルコに對して、バルカンの戰鬪が再び開かるときは、ロシヤは必ずしも中立を守るを得ざるべき旨を告ぐるや、ドイツは直ちにロシヤに告ぐるに、トルコに對するロシヤの攻撃がヨーロッパの平和を危うすべき旨を以てし、ロシヤは此時より妥協的態度を執るに至れり。ドイツは又オーストリアに對して、平和



維持の勸告を行へり。二月上旬オーストリア帝はロシア帝に親書を送り、其平和的意圖を告白せり。三月十一日兩國の職權を撤するの協定が公にせられ、幾許も無く撤兵が實行されたり。

是より先き、トルコは到底バルカン諸邦の聯合に抗敵する能はざるを見て、ブルガリヤに對して休戦を求めブルガリヤは其同盟國と協議の上、トルコの請求に應じ、一九一二年十一月二十七日より休戦談判行はれ、十二月四日トルコと、ギリースを除くバルカン聯合諸國との間に、休戦規約が成立し、十二月十六日よりロンドンに於て媾和談判が開かれたり。一九一三年一月の初、當時猶敵手に落ちざるアドリヤノーブル、ヤニナ、スクタリ等の割讓を要求されたるより、トルコは之を拒絶し、一月六日談判中止され、破裂を見るを恐れしめたり。諸強國は、ロシアの發議に依り、一月十七日トルコに對し、アドリヤノーブルの拋棄を勸告し、トルコ政府も之を容るるに至りしが、一月二十四日の政變に依り、トルコに於てエンヴェル「ペー」の新政府成りて、アドリヤノーブルの拋棄を否認するに至り、二月三日夜より戰鬪再び開かれたり。三月下旬に於てアドリヤノーブルはブルガリヤ人及びセルビヤ人の聯合的攻撃の爲めに陥り、是より先き、ヤコナもギリース人の爲に陥れられたり。

此頃ルーマニヤがブルガリヤに對して、ブルガリヤの領土を加ふるに對する代價の要求を提出し、更に紛糾を加へたり。ブルガリヤはロシア帝の該提議を裁決するを求めたるも、ロシア帝は此要求に應ぜずして、事件は大使會議の議に附せられたり。ルーマニヤはシリストリヤ市及び其附近の地を得るに至れるも、之を以て満足するに至らず。

モンテネグロのニコラス王が、アルバニヤをしてスクタリを有せしめんとする諸強國の決定を無視し、該市の包圍を行ひ、一九一三年四月二十三日終に之を陥るるや、オーストリアは諸強國の協同的行動に依り撤退を行はしむべきを求め、協同的行動が行はれざれば、オーストリアは單獨に行動すべしと爲せり。一方に於て強國の聯合海軍示威運動が行はれ、他方に於てニコラス王に對して金鎊上の賠償が提供され、五月中旬に至り、ニコラス王は終に撤退を諾するに至れり。

トルコと戦ひて勝利を得たるバルカン聯合諸國の間に於て、直獲せる土地の分配につきて紛議を生ぜり。セルビヤは諸強國のアルバニヤを以て獨立國と爲すの方針に依り、此方面に於て土地を得る能はざるに至り、且つトルコの豫想外の敗北に依り戰況が意外に發展し、當初豫見せざりし事態を生ずるに至れるの故を以て、土地の分配に對する當初の約束に變更を加へ、マセドニヤに於て約束以上の分配に與かるべきを主張し、ギリースも亦當初の約束の變更を主張せり。ブルガリヤは、トルコに對する戰鬪に於て其衝に當り、功勞共に他を凌ぐと爲し、當初の約束の變更を認めず、且つギリースのサロニカを收めたるに對して不平を抱けり。ブルガリヤはセルビヤ、ギリースに對抗するの必要を考慮して、四月十六日トルコと休戦を結べり。ロンドンに於て開かれたるトルコとバルカン聯合諸國との間の媾和成立の遷延せるは、セルビヤ及びギリースの全權委員がアルバニヤの境界の劃定、エーゲ海の島嶼の所屬、スクタリ還付の賠償等の問題の決定され、保障さるるに非れば、媾和條約に署名せざらんとするの態度を執れるに依れり。五月二十八日に至り、グレイは大使會議の決議に依り干涉を二國に加へ、諸強國は此以上の遷延を期待せずと爲し、交戰國の全權委員にして媾和豫備條約に署名するに意ある者は、直ちに之を行ふべく、署名に意なき者は、宜しくロンドンを去るべき旨を告ぐ。其後二日にして、ロンドン媾和條約が總ての全權委員の署名する所となれり。

交戰國間のロンドン媾和條約に依り、トルコはエノス、ミディヤ線以西の領土を舉げて之を拋棄し、又クリート島を拋棄せり。アルバニヤは獨立國となり、其境界の問題と、エーゲ海の島嶼の所屬問題とは、諸強國が之を決定すべきことと爲せり。而してバルカン聯合國間の紛議につきては、其間の直接の商議に依り之を解決すべきものと爲せり。

バルカン聯合の諸邦は、トルコと第一バルカン戰爭の結果につき不満の念を抱き、ブルガリヤに對して利害を共同にせるセルビヤ、ギリース二國の間に、同盟が結ばるるに至れり。然るに六月二十九日ブルガリヤ軍はマセドニヤに在るセルビヤ軍を



攻撃し、南方のブルガリヤ軍もサロニカに向て進まんとせり。是に於て第二バルカン戦争開始さる。ルーマニヤはブルガリヤよりシリストリヤ市及び其附近の土地を得たることを以て満足せずして、更に土地の割譲を求め、其軍をしてダニューブを渡りて進ましめたり。トルコも兵を出してアドリヤノーブルを奪回せり。ブルガリヤは止むを得ずして、ルーマニヤの境界改定の要求を容れ、ルーマニヤはセルビヤ、ギリイス及びブルガリヤに對して休戦及び講和を勧め、七月三十日よりブカレストに於て講和談判開かれ、八月十日講和條約が調印されたり。

講和談判の際、ブルガリヤとギリイスとの間に於て、カヴァラ港の領有に關する紛争を生じたが、ドイツが、フランスと同じく、ギリイスの主張を助け、ロシアが、オーストリアと同じく、ブルガリヤの主張を助け、此問題に就きては、四國同盟と三國協商とが相對立するに至らざりしなり。イギリスは協商側の意見の分れたるを見て、保留的の態度を執れり。結局に於てギリイスは、其のカヴァラ取得の主張を貫くを得たり。

是より先き、オーストリアは、ブルガリヤがセルビヤに對して攻撃を加ふるを見て、一九一三年七月初、セルビヤに對して強力を加ふるの企圖を爲せしもの如きも、ドイツ、イタリヤは、オーストリアのセルビヤに對する軍事的行動を以て防禦的措置と認むるを肯せずして、同盟條約に基く應援義務の發生を認めざりしを以て、オーストリアも事を起さずして止めり。ブカレスト講和條約成るに及び、オーストリアは、更に之を大使會議の議に附し、之に變改を加ふるの説を爲せり。然るにルーマニヤ王は之を拒絶し、ドイツ帝はルーマニヤの主張を支持せり。此問題に就きても、オーストリアの意見はドイツの反對する所となり、行はれざるに終れり。

大使會議に於て、ロシア、オーストリア二國間の破裂を生ずるの虞ありたるアルバニヤ問題の解決が行はれ、ヨーロッパの一般平和の維持が確められたること已に之を述べたり。又トルコとバルカン聯合諸國との間の講和談判につき、大使會議は一

九一三年三月下旬、講和の基礎條件に關する案を定め、雙方の交戦國に對して、之が採用を勧告せることあり。然れどもバルカン聯合諸國の關係に關しては、其のバルカンに於ける將來の不穩状態を致すの虞ありたるに拘はらず、大使會議は、調停又は干渉を行ふを避けたり。是れ一は、再び強國間の紛糾を生ずるを恐れたるが爲めなるが如し。但し講和成立の遷延を妨ぐる爲に干渉を行へることあるは、已に之を述べたり。八月十一日ロンドン大使會議は、イタリヤとギリイスとの間のアルバニヤ南境問題を決定し、以後會合が行はれざるに至れり。

ブカレスト條約締結の後もセルビヤは直ちにアルバニヤを撤退するに至らずして、オーストリアの威脅を受けて後、十月に於て始めて撤退を行へり。トルコはブカレスト條約に加はらざりしが、九月二十九日に於てトルコ、ブルガリヤ間に講和條約が結ばれ、アドリヤノーブル及びキルク、キリツセがトルコに復歸するに至れり。二國は講和締結後に至り、其間に同盟談判を行ふに至れり。

第二バルカン戦争の結果として、ブルガリヤはエーゲ海に達するの目的を遂げ得ずして、マセドニヤに於ても、其取得すべかりし土地を奪はれ、而してトルコも亦第一バルカン戦争に依り多く土地を失へるより、共に戦後のバルカンの状態に不平なり。オーストリアはセルビヤ、モンテネグロのアドリヤ海に進出するを妨げ得たるも、第二バルカン戦争に依りセルビヤの著るしく勢力を加へたるに對して、不安の念を抱くに至り、機會を得てセルビヤの勢力を挫き、依りてロシアのバルカンに於ける勢力を抑へんとするの意圖を蓄ふるに至れり。ロシア人はセルビヤ、モンテネグロをしてアドリヤ海に進出せしむるを得ざりしことを以て遺憾と爲せるも、第二バルカン戦争に依り、オーストリアの敵たるセルビヤが、バルカン地方に於て勢力を加へたるを喜ぶの情無きを得ず。然れども第二バルカン戦争の結果、ブルガリヤがセルビヤの敵と結合するを求めんとする關係を生じ、ロシアの企圖せるバルカン聯合は、最早實現し得ざるに至れり。



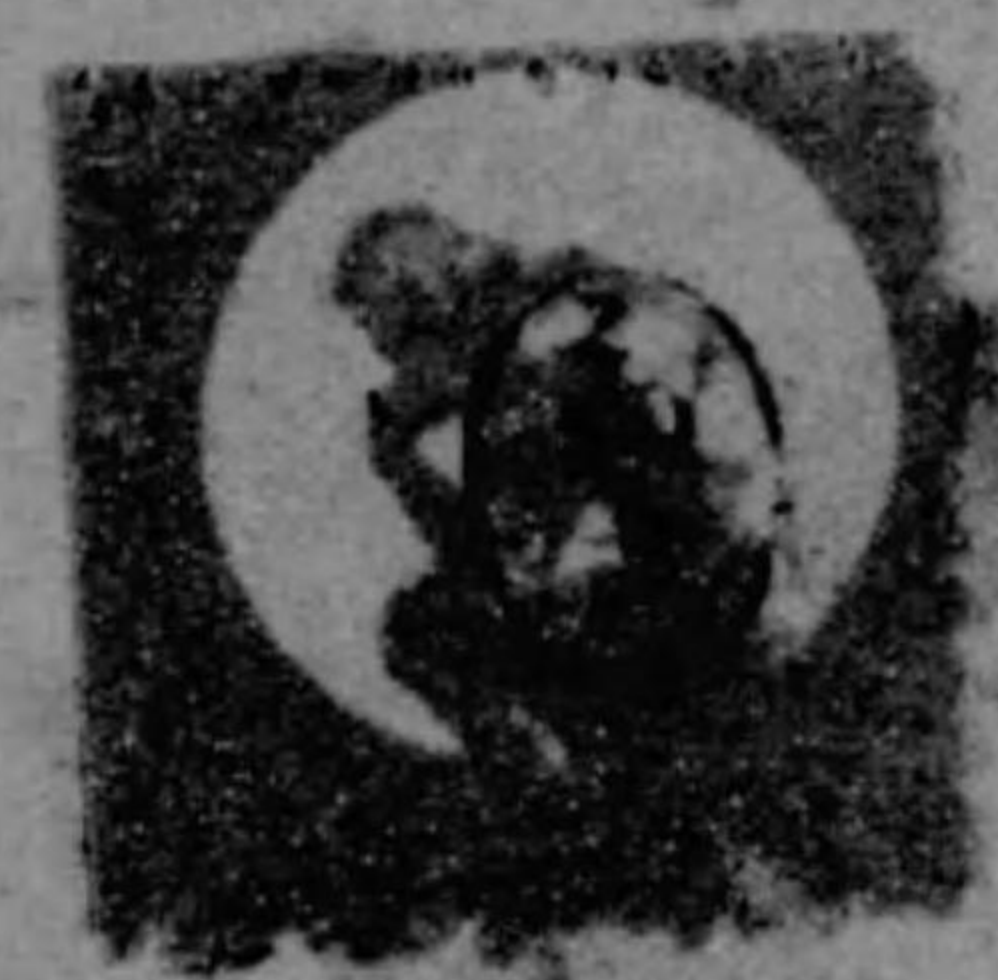
バルカン事件の當初より、ドイツが平和の爲に盡力し、イギリスと歩調を同うせるが爲め、兩國の關係良好なるに至れり。グレーは此機に乗じ、ドイツと接近し、之と一般的協定を行ひ、ヨーロッパに於ける二大國家結合間の衝突を未然に防がんと欲せるもの如し。グレーは一九一二年十月十五日、一時大使の職務を執れるドイツ大使館参事官キールマンに對して、其秘書官を以て、重要な意見の陳述を爲さしめたるもの如し。グレーは、兩國の協力に依り外交上の親密關係の恢復される其際に於て、兩國の總般の政治上の希望及び利害に關して協商を行ひ得べしとし、進みたる妥協を遂ぐるの覺悟ありとし、支那、ベルシヤ、トルコ及びアフリカに於ける提携が有望なりとし、ドイツがグレーの此際の提議を重要視すべきことを求めたりと言ふ。キールマンは、グレーの此提議を以て、イギリス人が最早製艦問題を兩國接近の障害と認めざるに至れるの證左と爲せり。ドイツ外務大臣キデルレンは、バルカン問題につき充分に談合することをキールマンに許し、ドイツがコンスタンチノブルの將來につき比較的輕微なる利害を有するに過ぎずして、此方面に於てイギリスと提携するに意あることを言明するを許せり。而して兩國間の將來の談判は嚴正秘密と爲し、談判の結果たる協定は直ちに之を公表すべきを求めしむ。但し先づ兩國が、自己の存亡の利害の問題たらざる場合には一方の領土に侵入すること無かるべきを約さざるべからずと爲せり。是れイギリスに對して、近東に於てドイツと提携し得る爲めに、ドイツと一般的政治協商を結び、事實上イギリスの在來の外交關係を犠牲にするを求むるの、過大の要求を爲せるものに外ならず。十月末に於てキールマンが其の訓示されたる所に依り、グレーに對して陳述を爲すや、グレーは兩國當路者間の談話を續行するの希望を述べ、近東問題に關して、已にトルコの權力を離れたる地方の更にトルコに復歸することは不可能なりとし、イギリスはマンスタタンチノブルの運命に關する場合に非れば積極的に行動するの意無しと説き、其以外の事項につきては、ロシア及びオーストリアが相一致する解決に従ふべしと述べ、此方面に於てイギリスがドイツと提携し得べきを喜ぶ旨を述べたるも、グレーはドイツの要求の過大なるを見て、ドイツ

との一般協定を結ぶことを断念せるもの如し。此頃グレーが、コンスタンチノブルをロシアの手に委するよりは、寧ろ之をブルガリヤの手に歸せしむるか、然らざれば、永く中立的の自由市と爲すを望めることの他に漏れたるもの如く、且つグレーがドイツとの接近を求めたること明白となれるより、ロシア及びフランスは、イギリスの態度につき警戒の情を挟み、フランスはイギリスとの關係を一層緊密にするの必要を感ずるに至れるもの如し。會、イギリスに於て、第二モロッコ事件以後イギリス、フランス兩國の軍人間に行はれたる談話が、内閣の問題となれること無きを非とし、且つ其際談話の雙方の政府を拘束すること無きものなるを明白にすべしと爲す者ありたり。是に於てポアンカレが發議を爲し、グレーが原案起草に當り、十月二十二日及二十三日に於ける所謂グレー、カムボン書翰交換を見るに至れり。該書翰に於て、在來兩國の軍事専門家間に行はれたる談話は、兵力に依り他方を援助すべきや否やにつき、孰れの政府の自由をも約束すべきものに非ずと爲し、兩國の一が挑發すること無くして、第三國の攻撃を受くべきを感じ、又は一般平和を脅威する事件の起るべきを感ずるの重大なる理由を有する場合には、相互間に交渉を開き、攻撃防止又は平和維持の爲めにする共同的行動を行ふべきや否や、之を行ふとせば如何なる共同的措置に出づべきやを審議すべきものと爲せり。是れ一定の場合に於て兵力的援助を行ふの義務を定むるに至らざるものなるを以て、未だ同盟條約を以て目するを得ざる所なり。然れども此書翰交換は、一定の場合に於て攻撃防止又は平和維持の爲めに、兩國が直ちに審議を行ふべきの義務の定めたるを以て、イギリス、フランス兩國の關係は、著るしく緊密の度を加ふるに至れり。

一九一二年十二月、三國同盟條約の第四回目の更新を見るに至れり。ドイツは一九一三年に於て、バルカン戦争に因る國際勢力の變移を理由として陸軍の大擴張を行ひ、平時に於て十七萬人を増員せり。ドイツに於て、ロシアの汎「スラヴ」主義の運動にドイツ人種とスラヴ人種との間の衝突につき警戒の念を加へ、バルカン戦争に依りセルビヤが勢力を加へ、トル



コが勢力を減じたるを憂慮し、又フランス人の間にドイツに対する敵愾心の盛ならんとするを憂慮するに至れり。當時ドイツ人の間に協商諸國に對する敵愾心鬱起し、在來實際に於ては戦争を欲せざりしドイツ帝も、一九一三年十一月ベルギー王に對し、ドイツとフランスの戦争が必ず起るべきを口外するに至れり。オーストリアは第二バルカン戦争に依りセルビヤの勢力が近東に於て増加せる形勢に安ぜざると共に、其近東政策の爲めに強勢なるドイツの兵力を利用し、國運を恢復するの計を實行するを思ふに至れり。一九一三年二月オーストリアは一八八三年以來存せるルーマニヤとの同盟を更に更新し、同年二月及び三月に於て、ドイツ及びイタリヤも之に加盟するに至れり。



昭和二十一年十一月三十日第一刷印刷  
昭和二十一年十二月十五日第一刷發行

世界外交史

定價 參拾五圓

著者 立木 太郎

發行者 鈴木 利貞

印刷者 丸山 紀一郎

配給元 東京神田區淡路町二丁目九番地  
日本出版配給株式會社

發行所

株式會社 日本評論社

東京都京橋區京橋三丁目四番地  
電話東京(56)六一九一  
發售東京 一六番

(作文社印刷所印刷・和田製本)



FI4N-13

H 26



